

琉球の方言 3巻 : 宮古大神島

法政大学沖縄文化研究所

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

176

(発行年 / Year)

1977-12-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012775>

Ⅲ 文 法

動詞の活用

宮古平良市大神方言の動詞の活用について記述する。そして、その後で筆者が以前に調査したことのある平良市西里、下地町与那覇、来間島、池間島、水納島の各方言の動詞の活用をも合わせ示すことにする。来間島、池間島、水納島の調査はまだ十分とはいえないが、これまでの調査でみつけたかぎりの活用形を表示して参考資料としたい。

大 神 方 言

1. 動詞語形変化の諸形式と活用形

大神方言の動詞 *kak'i*（書く）の語形変化を示すと、次の通りである。

kaka（書こう） *kaka te:n*（書かない）
kaka ba（書かば） *kak'i tika*（書けば）
kak'i bus'ikam（書きたい）
a ɡa du kak'i（私が書く） *kak'im na*
（書くか） *kak'i p'itu*（書く人） *pe:*
pe: kaki（早く書け） *pe:pe: kakira*
（早く書け！） *kab'i n kaki s'iti*
jumas'i（紙に書いて読ます） *kaki du*
（書いた） *kak'i tai*（書いた）
kaki'i（書いている） *kakidu:i*（書い
ている） *kake:i*（書いてある）
kakida:i（書いてある）

以上の諸形式中から *kak'i*（書く）の活用形と考えられるものを抽出すると、次の通りである。活用形の前後の形式は〈 〉の中にくる。

志向形 *kaka*

未然形 *kaka* 〈*te:n*〉

条件形₁ *kaka* 〈*ba*〉

条件形₂ *kak'i* 〈*t'ika*〉

連用形 *kak'i* 〈*bus'ikam*〉

終止形₁ *kak'i*

終止形₂ *kak'im* 〈*na*〉

連体形 *kak'i* 〈*p'itu*〉

命令形₁ *kaki*

命令形₂ *kakira*

接続形 *kaki* 〈*s'iti*〉

過去形₁ *kaki* 〈*du*〉

過去形₂ *kak'i* 〈*tai*〉

上記語形変化の諸形式中、次のものは一つの活用形と認めがたい。

kaki'i（書いている）

kakidu:i（書いている）

kake:i（書いてある）

kakida:i（書いてある）

これらの形式は基底においては次のような形式の結合からできているものと解される。

kaki(書いて)	{	<i>u'i</i> （居る）⇒ <i>kaki'i</i>
		<i>du</i> （ぞ） <i>u'i</i> （居る） ⇒ <i>kakidu:i</i>
		<i>a'i</i> （有る）⇒ <i>kake:i</i>
		<i>du</i> （ぞ） <i>a'i</i> （有る） ⇒ <i>kakida:i</i>

従って、これらの諸形式は接続形に *u'i*（居る）
a'i（有る）等が結合してできているものと説明される。

奄美・沖縄方言では動詞の連用形に「テアリ」「タリ」が結合すると、これらの形式がそれぞれ完全に融合して一語を形成し（派

生形式), 各々「継続」「既存」「完了」のアスペクトをあらわす。

	奄美(湯湾)	沖縄(瀬底)
基本 (書く)	kakjun, kakjui	hakun
継続 (書いている)	katfun, katfui	hatfin
既存 (書いてある)	katfë:n, katfë:i	hatfe:n
完了 (書いた)	katfan, katfa	hatfan

但し, 大神方言をも含めて, 宮古方言にはこのような派生形式は認められない。前記の大神方言で, $u\ddot{i}$ (居る) $a\ddot{i}$ (有る) はたまたま $kaki$ (書いて) と融合しているかのようにみえるが, しかし, $u\ddot{i} \cdot a\ddot{i}$ が他の動詞の接続形と結合する場合や, あるいは $kaki\ddot{i}$ (書いている) が助動詞に接する場合等をみると, $u\ddot{i} \cdot a\ddot{i}$ はやはり接続形と完全に融合しているのではなく(従って, 一語を形式しているのではなく), いつでも接続形と分離できるようなゆるい結合であることがわかる。従って, 宮古方言では派生形式を認めないで, 接続形に $u\ddot{i} \cdot a\ddot{i}$ が結合していると解した方が妥当であるが, しかし, ここでは奄美 沖縄方言との比較上, あえて「継続」「既存」という形で示しておく。

2. 活用体系

$kaki$ (書く) 以外の動詞の活用も調査して, 大神方言の動詞活用を示すと, 第1表の通りになる。

第1表について,

- (1) この表では活用形を変化部と不変化部とに分析し, 表示してある。但し, $s\ddot{i}k\ddot{i}s\ddot{i}$ (切る) $umu:$ (思う) $s\ddot{i}m$ (死ぬ) $k\ddot{i}s\ddot{i}$ (来る) 等のように, 必ずしもそう分析されていないものもある。これらの動詞の活用型は

変化の過渡期にあり, その過渡期の状態においては, 分析も他の動詞と同様, 一律に行なえない場合もある。

- (2) 変化部の頭音が長音の時, 換言すれば, 不変化部の末尾音と変化部の頭音が同音である時, 変化部の頭音を〔:〕と表示せず, 不変化部の末尾音と同じ形で表示した。たとえば, $umu:$ (思う) は表では $umuu$ と表示してある。
- (3) 表中の // 記号は最上段の $kaki$ (書く) の変化部に同じという意。一記号は変化部がゼロで, 不変化部が直ちに接尾形式に接することを意味する。△記号は今回の調査でみつかなかったもの。その中には, 動詞本来の性質としてその活用形を有しえないと思われるものも含まれている。たとえば, $a\ddot{i}$ (有る) の志向形等。

活用の型は変化部の違いにより分類してある。

- (5) 所属動詞とは各々の位置づけてある活用の型に従って活用するという意で, そこにあげてある動詞はいちいち活用させて調査してみた結果である。

3. 活用形の用例

3.1 志向形

志向形は次のように用いられる。

$\ddot{g}i:$ u $kaka$ (字を書こう)

a $\ddot{g}a$ $pera$ $\ddot{g}i$ (私が行こう)

$anta:$ $\ddot{g}a$ $ja:$ $\ddot{g}kai$ $pera$ $\ddot{g}i$

(私たちの家へ行こう)

$p\ddot{i}tu:$ $\ddot{g}kai$ $\ddot{g}a$ $pera$ $\ddot{g}i$

(人を迎えに行こう)

ata $\ddot{g}kai$ $ku:$ $\ddot{g}i$ (明日こう)

$uk\ddot{i}na:$ $ta:$ $\ddot{f}i$ iki $ku:$ $\ddot{g}i$

(沖縄まで行ってこう)

第 1 表 宮 古 大 神 方 言

分	類	動 詞	変化部 不変 化部	志向形	未然形	条件形1	条件形 2	連用形	終止形1	終止形2	連体形	命令形1	命令形2	接続形	過去形1	過去形2	継 続1	継 続2	既 存1	既 存2	所 属 動 詞		
I	I.1	1 書 く	kak	a	a	a	i	i	i	im	i	i	ira	i	i	i	ii	idu:i	ei	ida:i	pataaki(働く) iki(行く)		
		2 漕 ぐ	ku _o	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"		
		3 立 つ	tat tak	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	maki(待つ)	
		4 飛 ぶ	tub	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"		
		5イ 取 る	tur tu	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	s'imai(しばる) abi(呼ぶ) sui(刈る) kii(蹴る) pei(行く)	
		5ロ 居 る	ur u	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	△	△	"	"		
		5ハ 有 る	ar a	△	△	△	"	"	"	"	"	"	△	△	"	"	"	△	△	"	"		
		5ニ 言 う	a'ir ai	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	bi(坐る)	
		6 切 る	s'ik'is s'ik'if s'ik'ir s'iki	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
			7 読 む	jum ju	"	"	"	"	m	m	m	m	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	k'ik'im(包む)
			8 眠 る	nivv niv	"	"	"	"	"	v	v	v	v	"	"	"	"	"	"	"	"	"	kavv(被る)
			9イ 笑 う	para uma	"	"	"	"	u	u	u	um	u	"	"	"	"	u	iju:i	"	ija:i	"	arau(洗う) ffau(食う) kau(買う)
		9ロ 思 う	umu	"	"	"	"	u	u	u	um	u	"	"	"	"	u	iju:i	"	ija:i	"		
		I.2	1 曲 げる	mag'iras mag'iraf	"	"	"	"	"	"	"	"	"	ira	"	"	"	"	"	"	"	"	
	2 押 す			us uf uss	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	kurus(殺す)
	II		1 する	as af ass	"	i	i	i	"	"	"	"	"	"	ura	"	"	"	"	"	"	"	
				2 混ぜる	mag'ir mag'i	i	i,a	"	i	i	"	"	"	"	"	"	"	i	"	"	"	"	"
		3 着 る		k'is k'if	i	i	i	"	"	"	"	"	"	irura	"	"	i	"	"	"	"	"	
				4 死 ぬ	sin sinas sinaf si	i	i,a	i	"	"	"	"	"	"	iru	irura	"	"	i	"	"	"	"
		イ 見る	m	i:	i:	i:	i:	i:	i:i	i:im	i:i	iru	i: rura	i:	i:	i:	i:ju:i	"	ija:i	"	"	bi(酔う)	
ロ 落ちる			ut	i	i,u	i	ii	ii	ii	iim	ii	iru	irura	"	"	i	iju:i	"	"	"	"	uki(起きる)	
ハ 受ける			uk	i	i	i	ii	ii	ii	iim	ii	iru	irura	"	"	i	iju:i	"	"	"	"		
IV			来る	k k'is k'if	u:	u:	u:	"	"	"	"	"	"	u:	u:ra	"	"	"	"	"	"	"	
		主な接尾形式				n(ない) te:n (ない) i'i (れる) s'i (せる)	ba (ば)	tika (た)	busi- kam (たい)	体 言 na (禁止)	s'iti (て)	du (た)	tai (た)										

kamana'i nu jamkari ba ki: ja ju ka
 di (頭が痛いから今日は休もう)
 tura di ira (取ろうね)
 ma:taki ffa u kara

(一緒に草を刈ろう)

ka'i ga ika (刈りに行こう)

文中の動作主の意志を表わす場合にも志向形
 は用いられる。共通語の(～するつもり)にほ
 ぼ相当する。

kari ga du kaka di a'iri'i tai
 (彼が書くと言っていた)

ututa: i ki du ku: di ka ira
 (弟たちはいつ来るつもりかしら)

vva: ika di ika te:n
 (君は行くつもりか行かないか)

kaka di mai a fi n (書こうともしない)
 am mai ika di a fi ba vva mai ku:
 (私も行くつもりだから君も来い)

また、次のような用法もある。

mi: di go: (見るぞお)
 a ga tura di ira (私が取るよ)
 vva ga tura di (君が取るべきだ)

3.2 未然形

1) si (せる, 使役) simi'i (しめる, 使
 役)に接する。

gi: u juma si (字を読ませる)
 gi: juma simi'i (字を読ましめる)
 mma ga n du kaka fi (孫に書かせる)
 ututu n kaka fi (弟に書かせ)
 bi: ba sa:ri ki: nivva sa di
 (酔えばつれていってねかせよう)

2) ii (れる, 受身・可能) rai'i (られる,
 受身・可能)に接する。ii・rai'i は時には
 i・raiと末尾のiが脱落する場合もある。

pi'tu n du tanuma ii (人に頼まれる)
 pi'tu n du tasiki rai'i (人に助けられる)
 in du ffa ii (犬にかまれる)
 a ga ki ga kai du gi: u kaka ii (私の
 着物へぞ字を書かれる。私の着物へ字を書か
 れる)

gi: nu du kaka i u'i
 (字がぞ書かれている。字を書かれている)

ia sini rai du si (親に死なれる)
 jarabi ga mi du para: i u'i
 (子供にまで笑われている)

usi:ke:rasa i du si (押し返えされる)
 si'ra i du si
 (刈られぞする。刈ることができる)

midum mai a fi rai u'i munu vva a fi
 rai n na (女もできるものを君はできないのか)
 mi gi: ka:mai numa i n na
 (水さえ飲めないのか)

uma: nak'i nna si ga: si kam fuju nna
 nufukam nautimai a'ia i n
 (ここは夏は涼しいし、冬はあたたかいし、
 なんとともいえない)

jusarabe: pi si kari ba a: ra g kai
 ja pautira i n
 (夕方は寒いから外へは出られない)

bi: rai du si
 (酔えられぞする。酔うことができる)

kaka i du si
 (書かれぞする。書くことができる)

gi: kaka i ga mi du si
 (字は書かれまでぞする。
 字を書けることができる)

fira bi tai si ga du ssa i n
 (調べたけれどもわからない)

upukari ba k'ika i n

(大きければ使えない)
 kari ɡa kʰsʰ tika ssa i du sʰ
 (彼が来れば知られず。彼が来ればわかる)
 3) n (ない, 否定) te: n (ない, 否定)
 に接する。

ara: kaka te: n (私は書かない)
 kari ju: i (または nfi) patarakʰ
 pʰta: mi: n (彼のように働く人はみない。
 彼のように働く人はいない)

kare: sʰi i sʰga du naraʃe: fi: n
 (彼は知っているながら教えてくれない)
 nna: ma ɡami makʰ si ɡa mai ku: n
 (今まで待っても来ない)

jurusa te: n (許さない)
 vva mai ka: te: n (君も買わない)
 kare: ja: nna mi: n pe: m
 (彼は家にいないかしら)

kare: ika te: n pe: m
 (彼は行かないかしら)
 vva ika te: n (君は行かない)

im kai iki mi: ru juruʃe: uka te: n
 (海へ行ってみろ, 許してはおかないから)
 tura te: n ti aʰri ɡa mai du turi
 uʰ (取らないと言ったけれども取っている)

ara: bi: n (私は酔わない)
 passam mata te: n (いいえ, 待たない)
 ara: umanna ura te: n (私はここにはいない)

4) mai (お〜になる, 尊敬) に接する
 kaka mai (お書きになる)

3.3 条件形₁

a ɡa kaka ɡa vva jumi
 (私が書かば, 君は読みなさい)
 a ɡa kaka ɡa vva mi: ru
 (私が書いたら, 君は見なさい)

naUbaʃi aʃi ɡa mai vva ɡa ʃi: ri
 ti (どうしようが君の勝手だ)
 pe: pe: uki ɡa mai kake: n
 (早く起きても間に合わない)
 bi: ɡa sa: ri ki: nivva sa ɡi
 (酔えばつれていつてねかせよう)
 a ɡa kaka ba vva naUjare: s
 (私が書くから君はいいよ)

3.4 条形形₂

vva ɡa kakʰ tika kari ɡa du jum
 (あなたが書けば, 彼が読む)
 kama ɡkai ikʰ tika i: a iʰ
 (向こうへ行ったら叱られる)

ututu jara ɡa mai u: tʰka sa: ri
 ku: (弟でもいたらつれてこい)
 nnama takʰ tika kakeʰ du sʰ
 (今立てば間に合うよ)

kari ɡa kʰsʰ tika ssa i du sʰ
 (彼が来るとわかる)
 ami nu fu: tika japam
 (雨が降ると休む)

uri ɡa jum tika a ɡa du kakʰ
 (これが読むと私が書く)
 bi: tika niʰ du sʰ (酔うとねる)

3.5 連用形

1) 助動詞 ɡusʰkam (たい, 願望)
 kurikam (にいく, 困難) ja: sikam
 (やすい, 容易) 等へ接する。
 bi: ɡusʰkam (酔いたい)
 bi: mi: ɡusʰkam (酔ってみたい)
 kare: tuʰ kurikam (あれは取りにくい)
 kama kara uma ɡkai ja kʰsʰ kuri
 kam (向うからここへは来にくい)

g̊i: u kak̊i bus̊ikam (字を書きたい)
kanu ki: nu mta tu̯i ja:s̊ikam
(あの木の実は取りやすい)

umə ʔkai ja k̊is̊i ja:s̊ikam (こ
こへは来やすい)

2) pag̊imi̯i (始める) dauk̊i (上手)
等へ接する。

g̊i: u du kak̊i pag̊imi̯i (字を書き
はじめる)

tu̯i dau̯g̊i (取り上手)
kak̊i dau̯g̊i (書き上手)

3) 「連用形+du+s̊i」の形でよく文末に
用いられる。s̊i (する) は補助動詞と解され
る。

mme jag̊ati k̊is̊i du s̊i (もうやが
て来る)

u̯i du s̊i (居りぞする。いますよ)
kanu ki: nu mta u ba tu̯i du
s̊i (あの木の実を取りぞする。あの木の実を
取ることができる)

karika: ja tika am mai as̊i
du s̊i (あれぐらいであれば、私もしぞする。
私もできる)

uma nna a̯i du s̊i (ここにありぞす
る。ここにある)

s̊i (する) はまた補助動詞として文中にも
用いられる。

nna:ma gami mak̊i si ba mai
ku: n (今まで待ちせばまい来ない。今まで
待っても来ない)

4) se:n (ながら) ga (に) 等の助詞に接す
る。

a̯ik̊i se:n jumi (歩きながら読め)
kai ga ika (刈りに行こう)

3.6 終止形₁, 終止形₂

宮古方言には、奄美方言と同様、終止形に二
つの形が用いられている。大神方言も例外でな
く、たとえば「書く」に kak̊i, kak̊im 両形
あらわれる。奄美方言では両者に意味上の相違
を認めることができるが、大神方言ではその違
いを明確になしえなかった。但し、用法上にお
ける次の一点のみは明確に区別されているよう
にみうけられた。すなわち、kak̊im の形は常
に「疑問」あるいは「問い」の文中で用いられ
るということである。但し、形容詞の場合は必
ずしもそうでない。たとえば, takaka̯i,
takakam (高い) は両形とも平叙文の中で用
いられる。

unu sake: takaka̯i (この酒は高い)

unu sake: takakam (この酒は高い)

形容詞の場合はむしろ -m 語尾の形がよく用い
られる。

iru: kakikam (kit̯sikikam)
(色がきれい)

kanu p̊i̯ta: ma:nu aparag̊ikam
pag̊i (あの人は大変美しいはず)

ts̊i:kam do: (強いぞ)

juka:ta du g̊i u kaki pukar
ikam (休まずに字を書いてきつい)

以下、動詞の用例を示す。

終止形₁

uri ga jum tika a ga du kak̊i
(これが読むと私が書く)

p̊i̯ta ʔki as̊i b̊i (浜で遊ぶ)

saki ba: ju: num s̊i ga du ju:

pataraki (酒はよく飲むけれどよく働く)

kanu p̊i̯ta: bi: kara du nivv
(あの人は酔ってからねる)

p̊i̯tu: mak̊i (人を待つ)

nti nta n du ai (どこどこにあるの)
utututa: ja: n du ui (弟たちは家にいる)

upu p'itu mai imi p'itu mai
upu:sa ui (大人も子供もたくさんいる)
tig kara du uti k'is'i (天から落ちてくる)

paku ki: ji du kuff (箱は木でつくる)

ki: nu juda nu du sari'i (木の枝が枯れる)

me:kun du mmari'i (宮古で生れる)
unu 'iu naunu pusa bakai du
as'i ka ira: (この魚はどのぐらいばかりぞするのかしら)

kaman ai sa (向うにあるよ)

kari ga tafuke: nukui gumata
(彼がだけ残るのか)

mme jagati tub'i gumata (もうやがて飛ぶよ)

vva ga du tu'i gumata (君が取るべきだ)

ara: kama ukai iki gumata (私は向うへ行くべきだ)

終止形₂

vva gi: u ba kakim na (あなたは字をば書くか)

gi: u kakim (字を書くか)

3.7 連体形

1) 体言に接する。

kaki p'itu: tumi ku: (書く人をさがしてこい)

kari ju'i patarak'i p'ita:
mi:n (彼のように働く人はいない)

kama kara k'is'i munu p'itu
(向うから来るものは人だ)

kama kara k'is'i munu p'itu
pe:m ira (向うから来るものは人かしら)
ia ga ai: kane: assu (親の言うとおりにしなさい)

k'ik'isu nu agai ke patarak'i
(月の上がるか働く)

kari ga tumi'i muna: nti ka
ira (彼がさがしているものはどれかしら)

2) na (禁止) に接する。

uma u gi: u kaki na (ここに字を書くな)

bi:i p'ita: num na (酔う人は飲むな)
bi:i na (bi:n na) (酔うな)

3.8 命令形₁, 命令形₂

命令形も二つの形が用いられる。「書け」を例にとると, kaki, kakira 両形用いられる。前者は普通の命令であり, 後者は強い調子の命令を表わす。

命令形₁

pe:pe: kaki (早く書け)

ia tu mataki iki (親と一緒にいけ)

ai'ki se:n jumi (歩きながら読め)

bi: si'ti ja: ukai peri (酔ってから家へ帰れ)

gi: u kaki iki (字を書いていけ)

ia ga ai: kane: assu (親の言うとおりにしなさい)

kanu vva: masaka u ka u gai assu
(あのね, 君はよく考えてしなさい)

affi ba du sammin nafi (だから用心しろ)

uma ukai ku: (ここへ来い)

ututu jara ba mai u: tika
 sa:ri ku: (弟でもいたらつれてこい)
 vva mai ku: (君も来い)
 im kai iki mi:ru jurufe: uka
 te:n (海へ行ってみろ, 許してはおかない)

命令形 2

pe:pe: kakira (早く書け!)
 vva mai ku:ra (君も来い!)
 i'a ga a'i: kane: assura (親の言
 う通りしろ!)

3.9 接続形

接続形は s'i:ti (して) に接しなくても、(~
 して) の意を表わすが, s'i:ti がつく (~し
 て) の意が強調されるという報告を受けた。

ti du kara du uti k'i:s'i (天からぞ落
 ちてくる)

ututu jara ba mai u: tika
 sa:ri ku: (弟でもいたらつれて来い)
 uk'ina: ta:fi iki ku: di (沖縄ま
 で行ってこよう)

kanu vva masaka du ka du gai assu
 (あのね, 君はよく考えてしなさい)

turi du u'i do: (取っているぞう)
 kaki du u'i do: (書いているぞう)
 bi: du nau mai s'i:sa da tam
 (酔ってぞなにも知らなかった)

kanu pi:ta: bi: du kairi tai
 (あの人は酔ってぞびっくりかえった)

bi: mi: bus'ikam (酔ってみたい)
 k'inu: bi: du s'i tai (昨日は酔って
 しまった)

mati gami du u'i (待ってまでぞいる)
 gi: u kaki iki (字を書いていけ)
 jukai ta du gi: u kaki bukari-

kam (休まずに字を書いてきつい)
 im kai iki mi:ru jurufe: uka
 te:n (海へ行ってみろ, 許してはおかない。
 jurufe: は接続形 jurufi に係助詞 ja
 《は》の融合したもの)

kare: s'fii s'ga du nara fe:
 fi:n (彼は知っていながら教えてはくれない。
 nara fe: も接続形 nara fi に係助詞 ja
 《は》の融合したもの)

次に, s'i:ti の接した用例は次の通り。なお
 s'i:ti は s'i:ti となる場合もある。

ka bi' n kaki s'i:ti (s'i:ti) kari
 n juma sa gi (紙に書いて彼に読ませよ
 う)

fuf s'iti akari s'i:ti ti du u'i
 (降って晴れてとぞいる。降ったり晴れたりし
 ている)

iki s'i:ti (s'i:ti) k'fi s'i:ti (行
 って来て。行ったり来たり)

bi: s'i:ti (s'i:ti) ja: ukai peri
 (酔ってから家へ帰りなさい)

gi: u kaki s'i:ti (s'i:ti) ik'i (字
 を書いて行く)

大神方言の接続形 kaki (書いて) が国語の
 どの形式に対応するのか, たとえば「書き」に
 対応するのか, 「書いて」の変化したものであ
 るのか検討を要する。今のところこれは国語の
 「書き」に対応するものと解される。

大神方言の場合, kaki が (~して) の意を
 強めるため ti (て) を必要とする場合, 必ず補
 助動詞 s'i (する) を介して ti に接しているこ
 とは接続形の用例のところでみた通りである。
 一方, 補助動詞の s'i (する) は連用形の用例の
 項で示したように, 「連用形+du+s'i」の形
 でもよく用いられる。kak'i du s'i (書き

ぞする)。また, du (ぞ) を介さなくとも次のように直ちに連用係を承ける場合もある。

$\text{nna:ma } \text{gami } \text{mak'i } \text{ji } \text{ba } \text{mai } \text{ku:n}$ (今まで待ちせばまい来ない。今まで待っても来ない) この場合連用形 mak'i は(待つ)と訳せる。

以上の例からもわかる通り, 補助動詞 si' は kaki , kak'i 両方承けえる。この事実は次のような解釈を成り立たせる。

すなわち, 大神方言の接続形 kaki も連用形 kak'i も国語の「書き」に対応する。そして, 国語の連用形の中止法・連用法は当方言の接続形 kaki として用いられ, その他の用法は当方言の音韻変化を受けて連用形 kak'i となって用いられた。

国語	大神方言
「書き」	「書き」
{ 中止法・連用法	→ 接続形 kaki
{ その他の用法	→ 連用形 kak'i

このような通時的観点から活用形を命名するならば, kaki を「連用形 1」, kak'i を「連用形 2」とすることもできる。

そして, 次の用例なども連用形と接続形の深い関連を示す 1 例といえよう。

$\text{kanu } \text{p'i:ta: } \text{bi: } \text{unu } \text{p'i:ta: } \text{nivvi } \text{u'i}$ (あの人は酔って《酔い》, この人はねている)

「継続」「既存」の形式もこの接続形に u'i (居る) a'i (有る) が接して成立している。

3.10 過去形 1

過去形 1 は du に接する。過去形 1 は単語のレベルでは必ず du を伴う。

$\text{kaki } \text{du}$ (書いた) $\text{ku } \text{gi } \text{du}$ (漕いだ)
 $\text{u } \text{fi } \text{du}$ (押した) $\text{a } \text{fi } \text{du}$ (した)
 $\text{mi: } \text{du}$ (見た) $\text{k'i } \text{fi } \text{du}$ (来た)

しかし, これが文中で用いられると, 末尾の du は脱落する。代りに必ず du (ぞ) を有する文中で用いられる。

$\text{kari } \text{ga } \text{du } \text{'ika } \text{di } \text{a'i } \text{ri}$ (彼がぞ行こうと言った)

$\text{ututu: } \text{du } \text{k'i } \text{fi}$ (おとといぞ来た)
 $\text{k'inu } \text{du } \text{ara } \text{g'i: } \text{u } \text{du } \text{kaki}$ (昨日ぞ私は字をぞ書いた)

$\text{k'inu } \text{du } \text{pataraki}$ (昨日ぞ働いた)
 $\text{k'inu } \text{du } \text{iki}$ (昨日ぞ行った)

但し, 文中でも次のように用いられる場合がある。

$\text{mme } \text{uki } \text{du}$ (もう起きた)

3.11 過去形 2

過去形 2 は ta'i (た) に接するものである。

$\text{firabi } \text{ta'i } \text{s'iga } \text{du } \text{ssa } \text{i } \text{n}$
 (調べたけれどもわからない)

$\text{imi: } \text{du } \text{mi: } \text{ta'i } \text{pe:m}$ (夢を見たのかしら)

$\text{uma } \text{n } \text{du } \text{ar'i } \text{ta'i}$ (ここにあった)
 $\text{uma } \text{ðkai } \text{du } \text{k'i } \text{s'i } \text{ta'i}$ (ここへぞ来た)

$\text{jamatu } \text{ðkai } \text{ja } \text{bakaka'i } \text{ke } \text{du } \text{iki } \text{ta'i}$ (大和《内地》へは若い時ぞ行った)

$\text{tu } \text{g'i } \text{nu } \text{du } \text{k'inu } \text{funi } \text{kara } \text{uk'ina: } \text{pe'i } \text{ta'i}$ (妻がぞ昨日舟から沖縄へ行った)

$\text{uk'ina: } \text{kara } \text{du } \text{k'i } \text{s'i } \text{ta'i}$ (沖縄からぞ来た)

3.12 継続 1

継続 1 は接続形に u'i (居る) が結合してできているが, 結合の際 u'i の u は脱落する傾向があ

る。また, *kaki'i* (書いている) の他に, 終止形同様, *kaki'im* (書いている) の形も予想されうが未確認である。

なお, *sik'i'si* (切る) において *sik'iri'i* となるべきものが *sik'iji'i* となっているのは, この動詞が活用型の变化の過渡期にあたるためである。

gi: u te:n du kaki'i (字をただぞ書いている。字だけ書いている)

kare: gi: u du kaki'i (彼は字をぞ書いている)

nnama du ffa u turi'i (今ぞ草を取っている。今草を取っている)

ffa u du turi'i tai ja: (草をぞ取っていたね。草を取っていたんだなあ)

kare: s'iji s'iga du narafe: fi: n (彼は知っていながらぞ教えてくれない)

juka: da du gi: u kaki:ri bukarikam (休まずに字を書いているのできつい)

tui n'fi du tubi'i (鳥のようにぞ飛んでいる)

'ia n'fi du nitiju:i' (親のようにぞ似ている。親に似ている)

mi gi: te:n du numi:i' (水ばかりぞ飲んでる)

araiju:i' (洗っている)

ffa iju:i' (食べている)

kanu pi'ta: bi: unu pi'ta:

nivvi ui' (あの人は酔い, この人はねている)

3.13 継続 2

継続 2 は接続形に *gu ui'* (ぞいる) が結合

してできているものである。

mme ukidu:i' (もう起きている)

vva: bi: duu'i' (君は酔っている)

n: bi: duu'i' (はい, 酔っている)

なお, *ukidu:im* (起きている) の形も予想されるが未確認である。

3.14 既存 1, 既存 2

既存 1・既存 2 は接続形に *a'i* (有る)

gu a'i (ぞある) が結合してできているものである。

既存 1

gi: u kake:i' (字を書いてある)

既存 2

gi: u kakida:i' (字を書いてある)

uma n du arida:i' (ここにぞある)

なお, *kake:im* (書いてある)

kakida:im (書いてある) の形も予想されるが未確認である。

4. 活用分類

活用の型は変化部の違いによって分類してある。実際には, 志向形から接続形までの変化部に着目すれば分類は十分に行なえる。

4.1 1.1 類

1.1 類は *kak'i* (書く) に代表されるもので志向形から接続形までの変化部が [a, a, a, i, i, i, im, i, i, ira, i] となる動詞類である。しかし, その中でも多少変化しているものがある。 *ui'* (居る) は条件形 2 が *u* になっているが, これは *i* の変化したものである。また, 過去形 1 は見出しえず, 過去形 2 では語幹が直ちに接尾形式に接していく *u tai'* (いた) と, 時には語尾があらわれる *ui tai'* (いた) 両形が見出しされた。その他に, 継続

の形も見出しえなかった。a'i(有る)は志向形・未然形・条件形Ⅰ・命令形が用いられない。過去形・継続についてはu'i(居る)と同様である。s'i'k'i's'i(切る)は不変部末尾音のrがsに変化する過渡期の姿、いわばラ行四段がサ行四段へ移行するような過渡期の姿を示している。jum(読む)ni'v'v(眠る)para'u(笑う)では条件形Ⅱ・連用形・終止形・連体形等の語尾がそれぞれm・v・uとなっているが、これらは本来それぞれm'i・v'i・i'であるものがm'i→m, v'i→v, i'→uとなったためであろう。umu:(思う)についてもpara'u(笑う)と同様に解される。

Ⅰ.Ⅰ類は文語の四段活用に対応する動詞がほぼ属している。

4.2 Ⅰ.Ⅱ類

Ⅰ.Ⅱ類はⅠ.Ⅰ類とほぼ同じであるが、命令形Ⅱで異なっている。Ⅰ.Ⅰ類の命令形Ⅱ語尾iraがなぜⅠ.Ⅱ類ではi'ra, uraとなるのか音韻現象では説明できないものである。

Ⅰ.Ⅱ類は国語のサ行四段活用に対応する動詞がほぼ属する。

4.3 Ⅱ類

Ⅱ類は概して言うならば、Ⅰ類の活用型と次のⅢ類の活用型との混淆型ともいうべきものである。

as'i(する)は国語ではサ行変格活用であるが、当方言では志向形・未然形・条件形ⅠではⅢ類的であり、その他ではⅠ類的である。

ma'g'i'i(混ぜる。その変化部'iは長音でなく明確に'iが発音される)も志向形・条件形Ⅱ・連用形等ではⅢ類的であり、その他ではⅠ類的である。

k'i's'i(着る)は志向形・未然形・条件形Ⅰ・命令形でⅢ類的であり、その他ではⅠ類的である。

s'im(死ぬ)の活用は多少複雑で、Ⅰ類的な面とⅢ類的な面を有すると共に、いわゆるナ行変格活用の活用形が変化したようなものもあらわれてくる。まず、志向形・未然形・条件形Ⅰ・命令形はⅢ類的である。条件形Ⅱ・連用形・接続形・過去形Ⅰ等は、いわゆるナ行変格活用の活用形「死ぬる」が変化したものと解される。すなわち、「死ぬる」の不変部の末尾音rがsに変化し、それとともにその直前の母音uもaに変化したものと解される。命令形もあるいはナ行変格活用の活用形が変化したものなのかも知れない。その他の活用形はⅠ類的である。

4.4 Ⅲ類

Ⅲ類はuki'i(受ける)に代表されるもので、変化部が[i, i, i, i', i', i', i'm, i', i'ru, i'ru'ra, i] となる動詞類である。mi:i'i(見る)の変化部に長音が含まれているのは、これが2拍動詞であるためである。

Ⅲ類はⅠ類とは活用の型が明確に区別され、文語の上二段・上二段・下二段に対応する動詞が属する。宮古方言では文語の四段活用系動詞と上一・上二・下二段活用系動詞とは活用の型で明確に区別される。

4.5 Ⅳ類

Ⅳ類はカ行変格活用に相当する動詞で、これは当方言でも変格活用型である。不変部にk'i's(k'i's')があらわれるが、これは、k'i's:(き)→k'i's'iと変化したためである。志向形・未然形・条件形・命令形がk'i's不変部を軸として成立するようになると、この動詞もⅠ類

的にならないとも限らない。

平良市西里方言

1 動詞活用体系

大神方言の記述方法に準じて、西里方言の動詞の活用を示すと、第2表の通りである。

「既存」等の形が示されていないのは未確認のためである。

2 活用形の用例

2.1 志向形

志向形の用例は次の通り

ba ga kaka di (私が書こう)

dzi: kaka (字を書こう)

vva itsi' kaka di ga (君はいつ書くのか)

2.2 未然形

用例は次の通り。

1) si' (せる) simi' (しめる) に接する。

ututu n kaka si' (弟に書かせる)

ututu n kaka ji (弟に書かせ)

uki simi' (受けしめる)

2) ri' (i') (れる) rai' (られる) に接する。

vva ga kaki ba du kagi: tfa

kaka i' (あなたが書けばきれいに書かれる。きれいに書ける)

kaka ri' (書かれる)

uki rai' (起きられる)

kak' ts'ka: kaka i du si' (書けば書かれぞする。書けば書くことができる)

kaka i n (書かれない)

kaka i' p' tu (書かれる人)

3) n (ない) dga: n (ない) へ接する。

dzi: kaka n (字を書かない)

kaka dga: n (書かない)

kaki' ka kaka n ka ssi' sa i n
(書くか書かないかわからない)

kaka n si' ga kak' ts'kja:

kaka i du ssi' (書かないが書けば書くことができる)

nnja kaka dga: n (もう書かない)

kanu p' to: kaka dana pi' tai
(あの人は書かずに行った)

2.3 条件形 1

dzi: kaka ba mi: ru (字を書かば見なさい)

2.4 条件形 2

vva ga kaki ba du kagi: tfa

kaka i' (あなたが書けばぞきれいに書ける)

pja: pja: ti kaki ba du dzo: ka' i
(早く書けばぞよい。早く書くとよい)

jamakasa kaki ba du dzo: ka' i
(多く書けばぞよい)

2.5 条件形 3

kak' ts'ka: kaka i du si' (書けば書くことができる)

adza ga kak' ts'ka: bam mai

kaki' du si' (兄さんが書けば私も書く)

kaka n si' ga kak' ts'kja:

kaka i du ssi' (書かないが書けば書くことができる)

2.6 連用形

kju: kara kak'i padz'imi'i (今日から書きはじめる)

kak'i bus'imunu (書きたい)

kak'i bus'imunu dara: (書きたいだろう)

adza ga kak'j ts'ika: bam mai
kak'i du s'i (兄さんが書けば私も書きぞする)

2.7 終止形₁, 終止形₂

na: ju dzo:dz'in kak'i (名前を上手に書く)

pja:pja:ti kak'i (早く書く)

kak'im do: (書くぞ)

終止形₁と終止形₂の違いはまだはっきりつかみえていないが、少なくとも終止形₂は限られた文脈、たとえばdo: (ぞ)の前等で用いられるようである。

2.8 連体形

dz'i: kak'i p'jtu (字を書く人)

ant'finu tukuranna kak'i na (そんなところに書くな)

2.9 命令形

pja:pja:ti kaki (早く書け)

kagi:ts'afi kaki jo: (きれいに書けよ)

kabi' n kaki puka n pari (紙に書いて外に貼れ)

2.10 接続形

kabi' n kaki puka n pari (紙に書いて外に貼れ)

kabi' n kaki tti puka n pari
(紙に書いて外に貼れ)

kakja: mai kakja: mai mania:
n (書いても書いても間に合わない)

tti (て)はs'i'ti (して)の変化したものである。kakja: mai (書いても)はkaki ja mai (書きはも)の変化したものであろう。

2.11 過去形

k'inu du kak'i tai' (昨日書いた)

ba ga kak'i tai' (私が書いた)

kanu p'jto: kaka dana pi'i tai'
(あの人は書かずに行った)

2.12 継続

ba ga kaka tti umui u'i (私が書こうと思っている)

nnama dz'i: u kaki u'i (今字を書いている)

3 活用の分類

活用の型は大きく三つの型に分類される。

Iはいわゆる文語の四段活用に相当する動詞が所属しており、IIは上一段・上二段・下二段活用に相当する動詞が属している。IIIはサ行変格・カ行変格活用に相当する動詞が属している。

大神方言と大きく異なるのは、ss'i (する)がk'i's'i (来る)と共に変格活用(不規則活用)として位置づけられることである。

また、baro: (笑う)等で不変化末尾音と変化部とが融合して長音になっているところも大神方言と異なる。

第 2 表 平 良 市 西 里 方 言

分 類		動 詞	変化部 不変部	志向形	未然形	条件形 ¹	条件形 ²	条件形 ³	連用形	終止形 ¹	終止形 ²	連体形	命令形	接続形	過去形	継 続	所 属 動 詞		
Ⅰ	Ⅰ.1	1	書 く	kak	a	a	a	i	i	i	i	im	i	i	i	iu	iki (行く)		
		2	漕 ぐ	kug	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"		
		3	押 す	us	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	ukusi (起こす) k _o si (切る) k _o si (着る)	
				uf	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"			
		4	立 つ	tat	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	matsi (待つ)	
				tsts	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"			
				tats	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"			
		5	飛 ぶ	tub	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"		
		6イ	取 る	tur	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	kii (蹴る) ii (射る)	
				tu	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"			
	Ⅰ.2	6ロ	居 る	ur	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	△		
				u	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	—	△			
		6ハ	有 る	ar	△	△	"	"	"	"	"	"	△	"	—	△			
				a	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"			
		7	言 う	ai	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"		
				a	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"			
		8	読 む	jum	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"		
				ju	"	"	"	"	m	m	m	m	m	"	"	m			
		9	死 ぬ	sin	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
				si	"	"	"	"	n	n	n	n	n	"	"	n			
	10	被 る	kavv	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"		
			ka	"	"	"	"	v	v	v	vm	v	"	"	v				
Ⅱ		イ	笑 う	bar	a:	a:	a:	ai	o:	o:	o:	o:m	o:	ai	ai	o:	aiui	ko: (買う) fo: (食う)	
		ロ	思 う	um	a:	a:	a:	ui	u:	u:	u:	u:m	u:	ui	ui	u:	uiui		
Ⅲ		イ	見 る	m	i:	i:	i:ra	i:ri	i:i	i:	i:i	i:m	i:i	i:ru	i:	i:	i:ui	ni:i (煮る)	
		ロ	落 ち る	ut	i	i	ira	iri	ii	i	ii	i:m	ii	iru	"	i	"	uki (起きる) uki (受ける) ibi (植える)	
Ⅳ		1	す る	s	u:	u:	u:	"	"	"	"	"	u	"	"	"			
				ss	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"				
				f	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"			
		2	来 る	k	u:	u:	u:	"	"	"	"	"	"	u:	"	"	"		
				k _o is	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"			
				k _o f	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"			
主 な 接 尾 形 式					da:n (ない)	ba (ば)	ba (ば)	tsika: (ば)	busi- ka (たい)		体 言 na (禁止)		tti (て)	ta (た)					

下地町与那覇方言

1 動詞活用体系

与那覇方言の動詞の活用を示すと、第3表の通りとなる。

2 活用形の用例

2.1 志向形

dzì: kaka (字を書こう)

ba ga kaka di (私が書こう)

kari ga du kaka tti aì taì
(彼がぞ書こうと言った)

ba ga du kaka tti umui ju:ì
(私がぞ書こうと思っている。私が書こうと思っている)

vva its'iga kaka di (君はいつ書くのか)

num gats'ina panasa (飲みながら話そう)

atsa: pja:fi uki di (明日は早く起きよう)

umanu minatu kara kamanu

s'ima gamja: pu:fin fi ika di
(この港からあそこの島まで帆船で行こう)

ka: di na ka: dja:n na sabaki mi:ì (買うつもりか買わないのか聞いてみる)

2.2 未然形

1) s'ì (せる) s'imi' (しめる) に接する。
ututu n dzì: u kaka s'ì (弟に字を書かせる)

fikin nu uki s'imi' (試験を受けしめる)

ututu n kaka sa di (弟に書かそう)

to: gara: n kunu gumju: pja:
pja:ti s'iti s'imiru (誰かにこのごみを早くすてさせろ)

uja anna u pukarassa s'imiru
(父母を喜ばしめなさい)

ati pantakari ba kanu

tigamju: ba ututu n kaka s'ì
ta'ì (あまり忙しいのであの手紙を弟に書かせた)

2) ri'ì (れる) rai'ì (られる) に接する。

dzì: nu kaka ri'ì (字が書かれる)

fikin nu uki rai'ì (試験が受けられる)

vva ga kaki ba du dʒo:dz'inna
kaka ri'ì (あなたが書けばぞ上手に書かれる。あなたが書けば上手に書ける)

ba: ba ga tigamju: kari n
mina juma ri nja:n (私は私の手紙を彼にみんな読まれてしまった)

vva: unufaku mus' n fa: ri
tarja: (君はそんなに虫に食われたね)

k'ino: nnatis'ikja: anna n'iza
ri ta'ì (昨日はずいぶん母に叱られた)

vva mai kundo: tudz' n jama
ri oka:s'ì naθg'ì ja ta'ì dara:
(あなたも今度は妻に病まれて、さぞ難儀だったでしょう)

im nu kaman mi: rai u'ì so:

s'ima padz'ì (海の向うにみえているのは島のはず)

baθ gami utaga: riu'ì (私まで疑われている)

funi nu du mi: rai u'ì (舟がぞ見えている)

ja:ra: nu munu ja ts'ika:
 banum mai fa: ri du s'i (やわらかいものならば、私も食べられずる)
 kudza: ika ru da ta s'iga
 kutussa kanaradzi' iki' du su
 di (昨年は行かれなかったが、今年は必ず行く)
 dʒin nu nja: daka: kurasa ru
 n (金がないと暮されない)
 natugafi fa: ru n (どうしても食べられない)
 3) n (ない) dja:n (ない) に接する。
 karja: kaka n (彼は書かない)
 nnja kaka dja:n (もう書かない)
 itt saidi kaka nni ba du dami
 (熱心に書かないとだめだ)
 karja: kaka dana du pi' ta'i
 (彼は書かずに行った)
 mamju: ba nnapi masaginti
 nju: daka: nara n (豆をもっとよく煮なければいけない)
 kak'i kaka nna ssa ru n (書くか書かないかわからない)
 nnja: su: dja:n (はい、もうしない)
 kaka n s'iga kak'i ts'ika: kaka
 ri du ssi (書かないが書けば書ける)
 ba: ika dja:n (私は行かない)
 atja:da 'iza nni ba du dzo:kai
 (あまり叱らなければよい)
 ban tu ma:ts'iki ika dja:n na
 (私と一緒に行かないか)
 4) mai (~なさる) ba: (~たい) へ接する。
 kaka mai (お書きになる)
 kaka ba: (書きたい)

2.3 条件形 1

kaka ba du dzo:kai (書かばよい)

2.4 条件形 2

pja:pja:ti kaki ba du dzo:kai
 tai (早く書けばよかった)
 vva ga kaki ba du dʒo:dʒinna
 kaka ri'i (あなたが書けばぞ上手に書ける)
 atsa nu s'itumutja: pja:fi
 iki' gumata jari ba kju: nu
 ju: ja pja:fi nivvi ba du
 dzo:kai (明日の朝は早く行くから今日の夜は早く寝ればよい)

2.5 条件形 3

adza ga kak'i ts'ika: bam mai
 kak'i du ssi (兄さんが書けば私も書く)
 kak'i ts'ika: kaka ri du ssi
 (書けば書かれずる。書けば書ける)
 kaka n s'iga kak'i ts'ika: kaka
 ri du ssi (書かないが書けば書くことができる)
 bututu nu nitʒijo:bi n mats'i
 ʔkai ik'i ts'ika: vva ga adza
 n idjo: tai (おとといの日曜日に町へ行ったら、あなたの兄さんに出合った)
 kanu p'itu ʔkai tanum ts'ika:
 iki' du ssi (あの人に頼めば行くよ)
 unu mts'i ik'i ts'ika: imbata
 ʔkai du idi raii (この道を行くと海岸へぞ出られる)

第 3 表 下 地 町 与 那 覇 方 言

分類			動詞	変化部 不変化部	志向形	未然形	条件形 1	条件形 2	条件形 3	連用形	終止形 1	終止形 2	連体形	命令形	接続形	過去形	継続	所 属 動 詞		
I	I.1	1	書 く	kak	a	a	a	i	i	i	i	im	i	i	i	i	iu	iki (行く)		
		2	漕 ぐ	kug	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
		3	押 す	us	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ukusi (起こす) si _o ki _o si (切る) ki _o si (着る)	
				uf				〃				〃	〃		〃		〃			
		4	立 つ	tat	〃	〃	〃	〃											matsi (待つ)	
				tats					〃	〃	〃	〃	〃			〃		〃		
				tatf					〃				〃	〃			〃			
		5	飛 ぶ	tub	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
		6イ	取 る	tur	〃	〃	〃	〃							〃	〃		〃	ki (蹴る)	
				tu					〃	〃	〃	〃	〃			〃		〃		
		6ロ	居 る	ur	〃	〃	〃	〃								〃	〃		△	
				u					〃	〃	〃	〃	〃			〃		〃		
	6ハ	有 る	ar	△	△	〃	〃								△	〃		〃		
			a					〃	〃	〃	〃	〃			〃		〃			
	7	言 う	ai	〃	〃	〃	〃								〃	〃		〃		
			a					〃	〃	〃	〃	〃			〃		〃			
	8	読 む	jum	〃	〃	〃	〃								〃	〃		〃		
			ju					m	m	m	m	m			m		〃			
	9	被 る	kavv	〃	〃	〃	〃								〃	〃		〃		
			ka					v	v	v	vm	v			v		〃			
	I.2		死 ぬ	sin	〃	〃	〃	〃							iru	〃		〃		
				si					n	n	n	n	n			n		〃		
	I.3	イロ	笑 う 思 う	bar	a:	a:	a:	ai	o:	o:	o:	o:m	o:	ai	ai	o:	aiju:	aro:(洗う) ko:(買う) fo:(食う)		
				um	a:	a:	a:	ui	u:	u:	u:	u:m	u:	ui	ui	u:	uiju:			
II		イロ	見 る 落ちる	m				i:	i:i	i:	i:i	i:m	i:i	i:ru	i:	i:	i:ui	ni:i (煮る)		
				mj	u:	u:	u:													
		ハ	笑 う	ut	u	u	u	〃	ii	i	ii	im	ii	iru	〃	i	〃	uki (起きる) uki (受ける) ibi (植える)		
				ama	iju	iju	iju	〃	ii	i	ii	im	ii	iru	〃	i	iju:			
III		1	す る	s	u:	u:	u:													
				ss					〃	〃	〃	〃	〃			〃				
				f				〃						i:ru	〃		〃			
		2	来 る	k	u:	u:	u:								u:					
				ki _o s					〃	〃	〃	〃	〃			〃		〃		
				ki _o f					〃						〃		〃			〃
主 な 接 尾 形 式					di (志向)	n(ない) dja:n (ない) si (せる) rii (れる)	ba (ば)	ba (ば)	tsika: (ば)	busi:- nu (たり) no:kam (らしい) du (ぞ) gatsi- na (ながら)			体 言 na (禁止)		tti (て) tai (た)					

2.6 連用形

1) 助動詞 busi:nu (たい)

bus'ikimunu (そうだ 様子) 等へ接する。
dzi: zu kak'i busi:nu (字を書きた
い)

ba ga du kak'i busi:nu (私が書き
たい)

dzi: zu kak'i bus'ikimunu (字を
書きそうだ)

uki bus'ikimunu (受けそうだ)

「目的」を表わす助詞 ju (を) は上記の例
のように zu となる場合もある。

2) padz'imi'i (はじめる) に接する。

kju: kara kak'i padz'imi'i (今日
から書きはじめる)

3) gats'ina: (ながら) に接する。

muno: ko: gats'ina: mats'i

θkai ika dja:n na (ものを買いなが
ら町へ行かないか)

num gats'ina: panasa (飲みながら話
そう)

munu fo: gats'ina: fimbun nu
jumja: nara n (ものを食べながら新聞
を読んではいけない)

4) 「連用形+du+si'(ssi)」の用例も多い。

adza ga kak'ŋ ts'ŋka: bam mai
kak'i du ssi (兄さんが書けば私も書き
ぞする。兄さんが書けば私も書く)

2.7 終止形 1, 終止形 2

他の宮古方言同様、終止形に二つの形があら
われる。終止形 2 は do: (ぞ) の前にあらわれ
る。

終止形 1

na: ju kak'i (名前を書く)

pja:pja:ti kak'i (早く書く)

Uki'na: θkai du iki' gumata
ttsa (沖縄へ行くべきだそうだ)

kurju: ba ba ga du kak'i
gumata (これをば私がぞ書くべきだ。これ
は私が書くべきだ)

ba ga nu:i' gumata: kunu funi
(私が乗るべきものはこの舟だ)

du: nu ai' gumata u ba ai'a
daka: nara n (自分の言うべきことをば
言わないといけない)

unu ugunai' θkai ja vva ga du
iki' gumata (この集りへは君がぞ行くべ
きだ)

kabi n kaki tti umuti n pai'
(紙に書いて表に貼る)

kama:ra sinji: ga mmjai' (あち
らから先生がいらっしゃる)

ai' tai' nja: tai' sabaki mi:i'
(あったかなかったか聞いてみる)

Uki'na: θkai iki' (沖縄へ行く)
funi nu naka θkai pai' (舟の中へ
入る)

funi tu funi tu idjo: (舟と舟と
出合う)

ni: ju funi θkai ts'im (荷を舟へ
積む)

funi si: iki' (舟で行く)

funi kara urusi' (舟からおろす)

終止形 2

ba ga kak'im do: (私が書くぞ)

ba ga kug'im do: (私が漕ぐぞ)

ba ga jum do: (私が読むぞ)

ba ga ik'im do: (私が行くぞ)

2.8 連体形

1) 体言に接する

kak'i p'i'tu (書く人)

kak'i tukja:n (書く時)

s'ita n kak'i muna: bits'i nu

kutu (下に書くものは別のことだ)

dz'i zu kak'i padz'i (字を書くはず)

vva ga mmja'i tukana: kuma

nu ts'ig'i (あなたが行かれるところはここ
の次)

finfi ga a'ia mai' kuto: ba

kanaradz'i mamu'i du si' (先生が言
われることは必ず守る)

uri kari tti: a'i p'i'tu mai u'i

padz'i ja ss'iga karja: s'igu

k'i'si padz'i (あれこれ言う人もいるはず
だが、彼はすぐ来るはずだ)

nnja ugunai' d'ikan jari ba

dz'i: ika di (もう集る時間であるので、
さあ行こう)

ba ga du ik'i padz'i (私が行くはず)

2) na (な, 禁止) に接する。

anfinu tukuna n kak'i na (そんな
ところに書くな)

vva: nnja kanfi nu kutu: ss'i

na (君はもうあんなことをするな)

3) 助動詞 jo:kam (ようだ, らしい)

no:kam (ようだ, らしい) へ接する。

dz'i: zu kak'i jo:kam (字を書くら
しい)

dz'i: zu kak'i no:kam (字を書くら
しい)

adza: kju: nu gugu kara

gakko: Økai ik'i no:kam (兄は今
日の午後から学校へ行くらしい)

2.9 命令形

pja:pja:ti kaki (早く書け)

ninnad'zi kaki (ていねいに書け)

atsa gami kaki ku: (明日まで書い
てこい)

kuri ga ts'ig'i gami jumi ku:

(この次まで読んで来い)

atsa nu s'itumutja: mna

rukud'zi n ukiru (明日の朝はみんな
6時に起きなさい)

daØka: ss'ita: d'ikaØ gami

kanaradz'i ku: (約束した時間まで必ず
来い)

unu pittsi' ba atsa gami

matfi fi:ru (その返事を明日まで待つて
くれ)

kju: ja nuka:nuka fi:ru (今日は
ゆっくりしなさい)

kanu funi'i a s'ivkari ba

s'itiru (あのみかんはすっぱいからすてろ)

urju: ba banu n s'imiru (これを
ば私にさせろ)

2.10 接続形

tti (て) を伴わないで、接続形単独で用
いられている例は次の通り。

attsa gami kaki ku: (明日まで書い
て来い)

kuri ga ts'ig'i gami jumi ku:

(この次まで読んで来い)

mittsi' mutfi k'i'fi fi:ru (水を持
って来てくれ)

urju: ba ba ga nara:ʃi turasa
di (それをば私が教えてあげよう)

a'i tai nja: tai sabaki mi:i
(あったかなかったか聞いてみる)

banu: sa:ri iki fi:ru (私をつれ
ていってくれ)

接続形に係助詞の ja (は) が結合して用い
られる場合もある。その際、ほとんどの場合
mai (も) も伴う。

is'ika kakja: mai kakja: mai
mania: n (いくら書いても書いても間に合
わない)

ba ga ʃirabi mi: ts'ikja:
anfinu kutu: ba kakja: uka
ttan (私が調べてみれば、そんなことをば書
いてなかった)

piθgu tti: umuija: mai
piθgiro: n (逃げようと思っても逃げら
れない)

no:ba ʃi: tanumja: mai nnja
kaka dja:n (いくら頼んでももう書かな
い)

tti (て) のついた用例は次の通り。
kabi' n kaki tti umuti m pa'i
(紙に書いて表に貼る)

2.11 過去形

過去を表わす助動詞 tai', tam, ta: に接す
る。

k'inu kak'i tai' (昨日書いた)

dzi: kak'i tam (字を書いた)

dzi: kak'i ta: (字を書いた)

kari ga du kaka ti a'i tai' (彼
がぞ書こうと言った)

karja: kaka dana pi'i tai' (彼は

書かずに行った)

anna ga ʃinʃi: θkai dzo:ka'i
nja:n s'isairu tti a'i tai' (母が
先生へよろしくと言った)

k'inu kanʃi:na: a'i tarja: mai
nnada ʃi: ja uka n na (昨日あん
なに言ったのにまだやっていないのか)

k'inu ʃibai θkai iki' tam
(昨日芝居に行っただろう)

iki' ta s'iga du ami n fura i
tai' (行ったがぞ雨に降られた。行ったが雨に
降られた)

uja: kju: nu s'itumuti oka:s'i
pja:ʃi uki tai' no:kam (父は今日
の朝ずいぶん早く起きたらしい)

kurja: kana:gai kak'i tai'
tigami no:kam (これはずいぶん前に書
いた手紙らしい)

kurju: kak'i tai' muna: ban (こ
れを書いたのは私です)

urju: ba ba ga du kak'i tai'
(これをば私がぞ書いた)

uk'ina: kara k'isi' tai' (沖縄から来
た)

2.12 継続

ba ga du kaka tti umui ju:i'
(私がぞ書こうと思っている)

nnama: dzi: du kaki u'i (今字を
書いている)

vvata: ga ja: θkai mmjai' zu'i
pi'to: to: ga (あなたたちの家へいらし
ている人は誰か)

mnatatʃi anʃi tatʃi uri (みなさ
ん立っていないさい)

kari ga du uja ga nu:rju:i
funi no:kam (あれがぞ父が乗っている
舟らしい)

3 活用の分類

活用は西里方言とほぼ同様に、大きくⅠ・Ⅱ・Ⅲと分類される。Ⅰ型はいわゆる文語の四段活用に対応する動詞が所属する。Ⅱ型は上一・上二・下二段活用に対応する動詞が属する。Ⅲ型はサ行変格・カ行変格に対応する動詞である。

西里方言と異なるのは、Ⅱ型の動詞で、これらは志向形・未然形・条件形Ⅰの変化部がu(u:)またはijuとなる。これは宮古方言のいわゆる志向形成立の考察になんらかの示唆を与えるものと思われる。

また、sin(死ぬ)の命令形がsiniru(死ぬ)となるのは大神方言と似ている。

来間方言

1 動詞活用体系

来間方言の動詞の活用は第4表の通りである。

2 活用形の用例

2.1 志向形

dz'i: kaka (字を書こう)
ba ga kaka di (私が書こう)
pja:kari kaka di (早く書こう)
vva its'i ga kaka di (君はいつ書くか)
baθ kara a'iza di (私から言いましょう)
ba ga kaka di ti: umui u:i
(私が書こうと思っている)

kari ga du kaka di ti: a'i
ta'i (彼がぞ書くと言った。彼が書くと言った)

2.2 未然形

ututu n kaka s'i (弟に書かせる)
vva ga kaki ba du kaka ri:i
(君が書けばぞ書かれる。君が書けば書くことができる)
kaka n si'ga kats'i kka: kaka
ri du ss'i (書かないけれども書けば書かれぞする。書かないけれども書けば書くことができる)
nnjada kaka n (まだ書かない)
nnja kaka dja:n (もう書かない)
aba: ika dja:n (私は行きません)
ban tu: matfaki: ika dja:n
na (私と一緒に行きませんか)
ittfai di kaka nni ba du dami
(熱心に書かないからだめだ)

2.3 条件形Ⅰ

kaka ba du dso:ka'i (書かばぞよい、書くとい)

2.4 条件形Ⅱ

vva ga kaki ba du kaka ri:i
(君が書けばぞ書くことができる)
pja:kari kaki ba du dso:ka
ta'i (早く書けばぞよかった)

2.5 条件形Ⅲ

kats'i kka: kaka ri du ss'i (書けば書ける)
adga ga kats'i kka: bam me:

第 4 表 来 間 方 言

分類		動詞	変化部 不変化部	志向形	未然形	条件形 1	条件形 2	条件形 3	連用形	終止形	連体形	命令形	接続形	過去形	継続	所 属 動 詞	
I	I.1	1	書 く	kak kats	a	a	a	i	i			e	i		iuĩ	itsĩ (行く)	
				kug kudz	〃	〃	〃	〃				〃	〃	〃	〃		
		2	漕 ぐ						〃	〃	〃	〃			〃		
		3イ	押 す	us uf	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		〃	〃		ukusĩ (起こす)
				tsĩs tfĩf	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		〃	〃		
		3ロ	切 る	tats tatf	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		〃	〃		tsĩsĩ (着る)
				tats tatf	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃		
		4	立 つ	ai a	〃	〃	〃	〃					〃	〃		〃	matsĩ (待つ)
				tub	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
		5	言 う	tur tu	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃		〃	kiĩ (蹴る)
		6	飛 ぶ	ur u	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	—	△	
		7イ	取 る	ar a	△	△	〃	〃		〃	〃	〃	△	〃	—	△	
7ロ	居 る	jum ju	〃	〃	〃	〃					〃	〃		〃			
7ハ	有 る	kavv ka	〃	〃	〃	〃					〃	〃		〃			
8	読 む	ka sĩn sĩ	〃	〃	〃	iru					iro	〃		〃			
9	被 る	k um	a:	a:	a:	ai	o:	o:	o:	o:	e:	ai	o:	aiuiĩ	fo: (食う)		
	I.2	死 ぬ	sĩn sĩ	〃	〃	〃	iru					iro	〃		〃		
	I.3	イ 買 う	k	a:	a:	a:	ai	o:	o:	o:	o:	e:	ai	o:	aiuiĩ	fo: (食う)	
		ロ 思 う	um	a:	a:	a:	ui	u:	u:	u:	u:	e:	ui	u:	uiuiĩ		
II		イ 見 る	mj m	u:	u:	u:										niĩ (煮る)	
						i:ra	i:ru	i:	i:	iiĩ	iiĩ	i:ro	i:	i:	i:uiĩ		
		ロ 落ちる	ut	o	u	u	iru	i	i:	iiĩ	iiĩ	iro	i	i	〃	ukiĩ(起きる) idiĩ(出る) ukiĩ (受ける) ibiĩ (植える)	
III		1	す る	s	u:	u:											
				f								iro					
				ass		u	u		〃	〃	〃	〃		〃	〃		
				afff				〃					〃		〃		
		2	来 る	k	u:	u:	u:						u:				
				tsĩs tfĩf					〃	〃	〃	〃			〃	〃	
主 な 接 尾 形 式					n (ない) dja:n (ない)	ba (ば)	ba (ば)	kka: (ば)	busĩkaĩ (たい)		体 言 na (禁止)		tti (て)	taĩ (た)			

katsi du ssi (兄さんが書いたら私も書く)

2.6 連用形

ba ga du katsi busika (私がぞ書きたい)

bam me: katsi du ssi (私も書きぞする。私も書く)

padzimi (始める) は、大神・西里・与那覇方言では連用形 kaki (書き) を承けたのであるが、来間方言では katsi (書き) を承けるのではなく、katsi の変化した kaki を承ける。

kju: kara kaki padzimu di
(今日から書きはじめよう)

大神方言等では、国語の連用形「書き」の中止法・連用法は接続形 kaki (書いて) となつて用いられ、その他の用法は音韻変化をうけて連用形 kaki (書き) となつたことは大神方言の活用記述の項で述べた。

来間方言では連用形 katsi (大神方言等の kaki から変化したもの。kaki → katsi) が更に変化して kaki となり、これが padzimi に接しているのである。来間方言では katsi → kaki の変化がそれほど進んでいないため、同形の接続形 kaki もまだ影響を受けないでいるが、後述する池間・水納方言のように、その変化が進んでくると、接続形の kaki と混同を起こすため、この両方言では接続形は kaki: と長音化することによってこの混同をさけているものと解される。

このように宮古方言の連用形・接続形には同形の kaki があらわれるが、連用形の kaki は kaki → katsi → kaki と変化した比較的新しい形であると解される。同様のことは来間方

言の場合についてもいえることである。

2.7 終止形

来間方言においても、「書く」で言えば、katsi, katsim の二つの終止形があらわれる。

「漕ぐ」以下の動詞においても、恐らく両形が存するであろうと思われるが、これらについては未確認のため、第4表では示しえなかった。

ba ga katsi (私が書く)
katsim do: (書くぞ)

2.8 連体形

dzi: katsi pito (字を書く人)
katsi munu (書くもの)
anfinu tukana nna katsi na
(そんなところに書くな)

2.9 命令形

pja:kari kake (早く書け)
強い調子の命令は次の通り。
pja:kari kakira: (早く書け！)
やさしい口調の命令は次の通り。
dgo:tun kaki jo: (きれいに書けよ)

2.10 接続形

kabi n kaki tti mai n pari
dasi (紙に書いて前に貼り出す)
tti (て) に接しないで用いられる用例もある。
kabi n kaki mai n pari dasi
(紙に書いて前に貼り出す)

2.11 過去形

tsinu du katsi tai (昨日ぞ書いた)

kaki a ta'i 書いてあった)
 kaka ttan (書かなかった)
 kaki ura ttan (書いていなかった)
 kaki uka ttan (書いてなかった)

2.12 継続

ba ga kaka di ti: umuiui' (私が
 書こうと思っている)
 nnama du kakiui' (今ぞ書いている。今
 書いている)
 kakiura n (書いていない)
 kakiu ta'i (書いていた)

2.13 既存

kakia i' (書いてある)
 kakia ta'i (書いてあった)

上記以外は未調査のため、既存は活用表にも
 示してない。恐らく他の動詞でも接続形に a'i
 (有る) が接する形であらわれるものと思われ
 る。

3 活用の分類

活用の型は西里・与那覇方言とほぼ同様で大
 きく三つに分類される。Ⅰはいわゆる文語の四
 段活用動詞にあたる動詞が属しており、Ⅱは上
 一・上二・下二段活用動詞にあたるものが属し
 ている。Ⅲはサ行変格・カ行変格活用にあたる
 動詞である。

Ⅱ型の活用において、志向形・未然形・条件
 形₁の変化部が u (u:) となる点は与那覇方言
 とほぼ同じであるが、しかし、uti' (落ちる)
 等の志向形の変化部が o となる点は異なる。

命令形の変化部が e · iro となるのも特徴的
 である。

また、s'in (死ぬ) の条件形₂・命令形は

s'iniru · s'iniro となる。これらは文語の
 ナ行変格活用が変形して残っているものと解さ
 れる。

当方言では k · g が i' と結合する際、ts ·
 dz となる。

kats'i bus'ika'i (書きたい)
 kudzi bus'ika'i (漕ぎたい)

但し、これも i' → i の変化と共に、もとの k ·
 g へ回帰する可能性がある。

池間方言

1 動詞活用体系

池間方言の動詞の活用を示すと、第5表の通
 りとなる。

2 活用形の用例

2.1 志向形

ba ga kaka di (私が書こう)
 dzo: kaka di (さあ書こう)
 ba ga kaka ddi du umuijui (私
 が書こうとぞ思っている)
 vva its'i du kaka di ga (君はい
 つ書くのか)
 vva kaka di na (君が書くか)

2.2 未然形

kaka si' tiga: munu i na (書かせ
 るときもの言うな)
 ututu n kaka ha di (弟に書かせよ
 う)
 kaka ha dga:n (書かさない)
 ututu n kaka si' na (弟に書かせる
 な)

第 5 表 池 間 方 言

分 類			動 詞	変化部 不変化部	志向形	未然形	条件形 ¹	条件形 ²	連用形	終止形	連体形	命令形	接続形	過去形	継 続	所 属 動 詞		
Ⅰ	Ⅰ.1	1	書 く	kak kats	a	a	a		i			i	iː	i	ijui			
		2	漕 ぐ	kug kudz	〃	〃	〃		i			〃	〃	i	〃			
		3イ	押 す	us uf	〃	〃	〃		i			〃	〃		〃			
		3ロ	起こす	ukah ukas ukaf	〃	〃	〃		i			〃	〃	i	〃			
		4	立 つ	tat tats tatf					i	i		〃	〃				matsi (待つ)	
		5イ	取 る	tur tu	〃	〃	〃		i	i	i	i	〃	〃	i	〃		
		5ロ	蹴 る	kir ki	〃	〃	〃		i	i		i	〃	〃	i	〃		
		5ハ	居 る	ur u	〃	〃	〃		i	i	i	i	〃	〃	—	〃		
		5ニ	有 る	ar a	△	△	〃		i	i	i	i	△	〃	—	〃		
		6	言 う	ai a	〃	〃	〃		i	i	i	i	〃	〃	i	〃		
		7	着 る	tsi tf tt	〃	〃	〃		i	i	i	i	〃	〃	i	〃	uːi	
		8	飛 ぶ	tub tu	〃	〃	〃		i	u	u	u	u	〃	〃	u	〃	
		9	読 む	jum ju	〃	〃	〃		n	n	n	n	〃	〃	n	〃		
		10	死 む	sin si	〃	〃	〃		n	n	n	n	〃	〃	n	juːi		
	Ⅰ.2	1	笑 う	bara	〃	〃	〃		i	i	u	u	〃	〃	i	〃	kau (買う) fau (食う)	
		2	思 う	umu	u	u	u		i	i	u	u	〃	〃	i	〃		
	Ⅱ		イ	見 る	m	iː	iː	iː	iː	iː	iː	iː	iːru	〃	iː	iːui	niː (煮る)	
			ロ	受ける	uk	i	i	i	i	i	i(:)	i	iru	〃	i	〃	utiː (落ちる) uki (起きる) idi (出る) ibi (植える)	
	Ⅲ		1	す る	h	u	u	u			u	u	〃	〃	〃	〃		
					ass					i	i	u	i					
2			来 る	f				uː		uː	uː							
				k	uː	uː	uː				uː							
				ts						ii								
				tf											uːi			
										〃	—							
主 な 接 尾 形 式					di (意志)	n (ない) dʒaːn (ない)	ba (ば)	ba (ば) ttaː (ば)	busi- munu (たい)		体 言 na (禁止)			tai (た)				

ututu n kaka ʃi (弟に書かせ)

dzi: ja kaka i du ssi (字は書かれず。字は書ける)

ja: raka tiga bam mai fa: i du ssi (やわらかなら私も食べられず。やわらかなら私も食べられる)

kainu ʔgjasai tukuma nna munuguto: kaʔgai rai n (こんなうさいところではものごとは考えられない)
ba: ba ga tigami kai n nnanai juma i nja: n (私は私の手紙を彼にみんな読まれてしまった)

vva ju: du musii n fa: i jui (君はずいぶん虫にくわれたね)
gnu: ʔu: ku mma n mmika i tai (昨日は強く母に叱られた)

vva mai nnama tudzi n nagai fu nivva i ma: nti ku: munu aramai dara: (あなたも今度は妻に長く寝られてさぞ苦勞なさったでしょう)

dzi: ja kaka i n (字は書けない)
karja: kaka n (彼は書かない)
mmja kaka dga: n (もう書かない)
nenna: ri kaka nni ba du dami sa: mi (熱心に書かないからだめなのだ)

2.3 条件形₁

sida ga kaka ba bam mai kaka di (兄さん書かば私も書こう)

2.4 条件形₂

vva ga katsi ba du dʒaudzi nna kaka i sa: (あなたが書けばぞ上手に書ける)
hajamari katsi ba du dʒauka

tai (早く書けばぞよかった)

katsi ba du kaka i (書けばぞ書かれる。書けば書ける)

sida ga katsi tta: bam mai kaka di (兄さんが書いたら私も書く)

上記の例のように、池間方言においては、katsi は ba にも tta: にも接する。西里・与那覇・来間方言では ba は kaki を、tsika: または kka: は kaki または katsi を承ける傾向がある。

2.5 連用形

ba ga katsi busimunu (私が書きたい)
dzi: ju katsi busimunu (字を書きたい)

katsi busi ffa nja: n (書きたくない)

ba ga kaki busimunu (私が書きたい)

kju: kara kaki hadʒimi (今日から書きはじめる)

以上のように池間方言の連用形は、動詞によってその変化部に i・i 両形あらわれる。池間方言は音韻的にみても、i→i の変化の過渡期にある方言なので、連用形の i 変化部は恐らく i 変化部から変化した新しい形であろう。従って、たとえば katsi (書く) の連用形では kaki は katsi より新しい形であると解される。

2.6 終止形

nama i ju katsi (名前を書く)
kama kara du finji: ga mmjai (あちらから先生がいっしょる)

調査しえた終止形語例を示すと次の通り。

ndz'i (抜く) s'idz'in (沈む) hits'i
 (引く) Fui (振る) ts'its'i (突く)
 bugai (疲れる) uduruts'i (驚く)
 pukaras'i (喜ぶ) nats'i (泣く)
 nigai (祈る) uri: (下りる) aki: (開
 ける) magi: (曲げる) hinai (減る)
 bju:i (酔う)

2.7 連体形

dz'i: ju kats'i hitu (字を書く人)
 kudz'i tukja (漕ぐ時)
 tu: tui (飛ぶ鳥)
 tui munu (取るもの)
 barau tukja (笑う時)
 uki tukja (起きる時)
 ass'i tukja (する時)
 fu: tukja (来る時)
 ainnu tukununna kats'i na (そんな
 ところに書くな)

2.8 命令形

hajamari kaki (早く書け)
 hajamari kakiba (早く書け! 強い
 命令)
 dʒauto:nti kaki jo (上手に書けよ。
 やわらかい調子の命令)

2.9 接続形

kabi: n kaki: umuti ōkai
 idas'i (紙に書いて表に出す)

国語との対応において接続形と連用形は次の
 ような関係にあるものと推定される。

国語	池間方言
中止法・連用法	→接続形 (kaki→)
「書き」	kaki:
その他の用法	→連用形 (kaki→)
	kats'i→kaki

すなわち、池間方言では連用形がkats'i→
 kakiと変化していくために、同語形である接
 続形はこれとの区別を保てなくなり、そこで接
 続形の方はkaki:と長音化することによって
 区別を保っているものと解される。

Fu: (来る)の接続形はtti: (来て)とな
 っていて、一見「来て」に対応するかのように
 みえる。もしそうであるなら、池間方言の接続
 形はすべて「て」が融合していると解される可
 能性もあるが、しかし、このtti:もやはり次
 のような変化過程を経て成立したものであろう。

k'ŋi ʃiti (大神・与那覇)→tʃi ʃi
 ʃiti (来間)→tti: (池間)

2.10 過去形

nnu nudu kats'i tai (昨日書いた)
 kats'i tai tukja (書きたいとき)
 ndz'i tai (抜いた)
 s'idz'in tai (沈んだ)
 hits'i tai (引いた)
 fui tai (振った)
 uri tai (下りた)
 aki tai (開けた)
 magi tai (曲げた)
 hinai tai (減った)
 bju:i tai (酔った)

2.11 継続

ba ga kaka ddi du umui jui
 (私が書こうとぞ思っている)

nnama dʒiː (dʒiː) ju kakijui
 (今字を書いている)
 vvadu ga jaː ŋkai mmjai ura
 maiju hituː taː du ara mai
 ga (あなたの家においてになっていらっしゃ
 る方はどなたですか)

3 活用の分類

西里・与那覇・来間方言同様、大きく三つに分類される。Ⅰはいわゆる文語の四段活用動詞に相当する動詞が属しており、Ⅱは上一・上二・下二段活用動詞に相当する動詞が属している。Ⅲはいわゆるサ変・カ変に相当する動詞である。

来間方言ではⅠ型に属しながらも「死ぬ」に相当する動詞は多少不規則活用型であったが、池間方言では西里方言と同様規則活用である。

池間方言で特徴的なことはやはり *i* → *ɪ* の変化である。kats*i* (書く) kud*ɪ* (漕ぐ) 等の連用形・過去形ではその変化の過程を反映していて、変化部に *i*・*ɪ* 両形あらわれる。

水納方言

1 動詞活用体系

水納方言の動詞の活用を示すと、第6表の通りになる。

2 活用形の用例

2.1 志向形

dʒuː kaka (字を書こう)
 ba ga kaka naː (私が書くよ)
 ba ga kaka tiː umeːbui
 (umeːbui) (私が書こうと思っている)
 peːpeː kaka dʒiː (早く書こう)

kanu pɪ̯tu nu du kaka tiː iː
 tai (あの人がぞ書くと言った あの人が書く
 と言った)
 vva itsʲiga kaka dʒiː ga (君はい
 つ書くか)

2.2 未然形

1) s*i* (せる) ʃimiː (しめる) に接する。
 uttu n dʒiː kaka s*i* (弟に字を書か
 す)
 uki ʃimiː (受けしめる)
 2) riː (れる) rariː (られる) に接する。
 dʒiː (dʒiː) ja kaka riː (字は書
 かれる。字を書くことができる)
 ʃikin ja uki rariː (試験は受けら
 れる)
 vva ga kaki ba du kitsʲiginariː
 kaka riː (君が書けばぞ上手に書かれる。
 君が書けば上手に書ける)
 kaka tiː umuː takaː kaka riː
 du s*i* (書こうと思えば書かれぞする。書こ
 うと思えば書くことができる)
 kaka dʒiː ga jara kaka maŋ
 ga jara ssʲisa ri n (書くのか書か
 ないのか知られない。書くのか書かないのかわ
 からない)
 3) n (ない) man (ない) に接する。
 kanu pɪ̯toː kaka n du iki
 neːn (あの人は書かないで行ってしまった)
 saːti kaka nni ba du dami
 ʃaːmiː (熱心に書かないからだめなのだ)
 mme kaka man (もう書かない)
 ban na kaka man (私は書かない)
 dʒiː ju kaka n (字を書かない)
 dʒiː ju kaka man (字を書かない)

2.3 条件形 1

pe:pe: kaka ba du dʒo:ʃa a
tai (早く書かばよかった。早く書けばよ
かった)

2.4 条件形 2

vva ga kaki ba du kits'i ginari:
kaka ri: (あなたが書けばぞ上手に書ける)
pe:pe: kaki ba du dʒo:ʃa a
tai (早く書けばぞよかった)
sa:ti: kaki ba du n:na tamari
bul (どんどん書けばぞみんなたまっている。
どんどん書くものだからみんなたまってしまう)
kaki ba mai kaki ba mai
mania:ʃa ri n (書けばも書けばも間に
合わされない。書いても書いても間に合わない)
kaka ti: umu: taka: kaka ri
du si (書こうと思えば書ける)
adʒa ga kaki taka: bam mai
kaki du si (兄さんが書けば私も書く)
kaka n ʃuga kaki taka: kaki
du si (書かないが書けば書ける)

西里・与那覇・来間方言では条件形に三つの
形が認められる。

(西里・与那覇)

(来間)

- | | |
|-----------------|-------------|
| 1 kakaba | kaka ba |
| 2 kakiba | kaki ba |
| 3 kak'i ts'ika: | kats'i kka: |

一方、大神・池間・水納方言では二つの条件
形しか認められない。

(大神)

(池間)

- | | |
|--------------|-----------------|
| 1 kaka ba | kakaba |
| 2 △ | △ |
| 3 kak'i tika | kats'i tta:(ba) |

(水納)

kakaba

△

kaki taka:(ba)

水納方言の kaki taka:(ba) は西里方
言等の kaki ba, kak'i ts'ika: の両形が
統合したものと解される。いわゆる i → i 変化
に伴って起った統合である。但し、これが同じ
i → i 変化が認められる池間方言においては
kaki tta: とはならず kats'i tta:
(ba) となったのはなぜか、これについては今
のところ明らかにしない。

2.5 連用形

ba ga du kaki buʃa al (私がぞ
書きたい)

kare: dʒi:(dʒi:) ju kaki
gimunu (彼は字を書きそうだ)

dʒi: ju kaki bus'i gimunu (字を書
きそうだ)

dʒi:(dʒi:) ju kaki wa:i (字を書
いていच्छる)

kju: kara kaki padʒimi tai
(今日から書きはじめた)

adʒa ga kaki taka: bam mai
kaki du si (兄さんが書いたら私も書き
ぞする。兄さんが書いたら私も書く)

2.6 終止形

na: ju kaki (名を書く)

ba ga kaki (私が書く)

2.7 連体形

dʒi: ju kaki pi'tu (字を書く人)
si'ta ōkai kaki ʃo: pukanu

第 6 表 宮 古 水 納 方 言

分 類		動 詞	変化部 不変 化部	志 向 形	未 然 形	条 件 形 1	条 件 形 2	連 用 形	終 止 形	連 体 形	命 令 形	接 続 形	過 去 形 1	過 去 形 2	継 続	所 属 動 詞	
Ⅰ	Ⅰ.1	1	書 く	kak	a	a	a	i	i	i	i	i:	i	i	i:bui	iki (行く)	
		2	漕 ぐ	kug	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
		3	押 す	uf	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ukufi (起こす) kif i (切る)
		4	立 つ	tat	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	mati (待つ)
		5	飛 ぶ	tub	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
		6	言 う	iɔ	〃	〃	〃					〃	〃	〃		〃	
				i				〃	〃	〃	〃			〃			
		7	死 ぬ	fin	〃	〃	〃	i:	〃	i:	i:	〃	〃	〃	〃	〃	
		8イ	取 る	tur	〃	〃	〃					〃	〃	〃		〃	kil (ki:) (蹴る)
				tu				l (i)	l (i)	l (i)	l (i)				〃		
	8ロ	居 る	bur	〃	〃	〃					〃	〃	〃		〃		
			bu				l (i)	l (i)	l (i)	l (i)				— (〃)			
	8ハ	有 る	ar	△	△	〃					△	〃	〃		〃		
			a				l (i)	l (i)	l (i)	l (i)				— (〃)			
	9	読 む	jum	〃	〃	〃					〃	〃	〃	〃	〃		
			ju				m	m	m	m							
	10	被 る	kavv	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃		
			ka						v								
Ⅰ.2	イ	笑 う	bar	a:	a:	a:	o:	o:	ai	o:	ai	e:	ai	o:	e:bui	kai (買う) fai (食う)	
	ロ	思 う	um	a:	a:	a:	u:	u:	u:	u:	ui	e:	u:	u:	e:bui		
Ⅱ		イ	見 る	m	i:	i:	i:	i:	i:	i:	i:ru	〃	i:	i:	〃	ni: (煮る) ki: (着る)	
		ロ	落ちる	ut	i	i	i:	i:	〃	i:	i:	iru	〃	〃	〃	〃	uki: (起きる) ndi: (出る) uki: (受ける) ɣkagi: (召し上がる)
Ⅲ		1	す る	s						i:	i:						
				f	u:	u:	u:	i:	i:			iru	〃	〃	〃		〃
		2	来 る	k	u:	u:	u:	i:	i:	u:	i:	u:	〃	〃	〃	〃	
主 な 接 尾 形 式					n (ない) man (ない) s i (せる) ri: (れる)	ba (ば)	ba (ば) taka: (ば)	buffa:i (たい) gifa:i (そうだ) du (ぞ)		体 言 na (禁止)		tti: (て)	tta (た)	tai (た)			

kutu (下に書くのは他のことだ)

anfiru tukura nna kaki na (そんなところに書くな)

2.8 命令形

pe:pe: kaki (早く書け)

kits'iginari: kaki jo: (きれいに書けよ。ていねいに書けよ)

dʒo: ʔke: pari mifiru (入口に貼ってみせろ)

2.9 接続形

kabi ʔkai kaki: dʒo: ʔke: pari: mifiru (紙へ書いて入口へ貼ってみせろ)

k'inu: uts'in kaki: ne:n (昨日のうちに書いてしまった)

kaki: kara ika dzi: (書いてから行こう)

tti: (て) に接した用例は次の通り。

kaki tti: du ika dzi: (書いてから行こう)

接続形は池間方言同様、tti: (て) がつか

ないで単独で用いられる場合 kaki: (書いて) となる。これは池間方言の記述の際にも述べたように、連用形が kals'i → kaki (書き) と変化したため、これとの混同をさける必要から kaki → kaki: と変化したものと解される。

2.9 過去形

過去形 1

nama du kaki tta (今書いた)

過去形 2

kju: kara kaki padz'imi tai

(今日から書きはじめた)

kinu: du kaki tai (昨日書いた)

2.10 継続

ba ga kaka ti: ume: bul (bui)

私が書こうと思っている)

nama du dzi:ju kaki bul (bui)

(今字を書いている)

sa:ti kaki ba du n:na tamari bul

(bui) (どんどん書くものだからたまっている)

宮古方言における活用形の通時的考察

1

宮古方言の動詞の活用を調査していく過程で、当方言の活用形間における通時的な相互関連性について示唆を与えるような実態が見い出された。ここでは接続形・連用形・過去形 1・終止形 1・条件形甲・条件形乙・連体形の相互関係と、さらにそれらの活用形と深くかかわっていると解される他の活用形または形式について述べてみたい。

そこで、まず大神・西里・与那覇・来間・池間・水納の各方言における接続形・連用形・過

去形 1・終止形 1・条件形甲・条件形乙・連体形の各活用形を示すと、第 7 表の通りになる。但し、過去形 1 の資料は上記 6 方言の中では大神方言のだけしか持合わせていない。

2

はじめに接続形について考察する。宮古方言の接続形は国語に対応形式を求めるならば、国語のどの形式に対応するのかということについて考えてみたい。具体的には大神方言の kaki をとりあげる。

大神方言の kaki は国語のどの形式に対応す

るのかということであるが、これには一応次の二つの形式が想定されうる。

- ① 「書き」に対応する。
- ② 「書いて」の変化したもの

但し、②の可能性は大神方言の活用形の用例をみていくと、直ちに否定されざるをえない。

大神方言の場合、*kaki* は(～して)の意を強める際には補助動詞 *s'i* (する) を介して *i* (て) に接する。意を強める(強意)機能はむしろこの *s'i* が有している。

o'gi u kaki s'i'ti (s'i'ti) ik'i (字を書いて行く)

bi: s'i'ti (s'i'ti) ja: Okai peri (酔ってから家へ帰りなさい)

一方、補助動詞 *s'i* (する、強意) は大神方言ではよく用いられる。たとえば、「連用形+*du*+*s'i*」の連結は頻繁に用いられる。

k'ys'i du s'i (来ぞする。来るよ)

u'i du s'i (居りぞする。居るよ)

tu'i du s'i (取りぞする。取るよ)

bi: du s'i (酔いぞする。酔うよ)

ia s'ini rai du s'i (親に死なれぞする)

ni'i du s'i (寝ぞする。寝るよ)

s'i の前にあらわれる *du* (ぞ) は *s'i* の有する強意と呼応するかたちであられるものと解される。この「連用形+*du*+*s'i*」の連結は文末でよく用いられる。

この *s'i* は文中では「連用形+*s'i*」の連結で用いられる場合がある。すなわち、連用形と *s'i* との間に *du* を介さない。

nna:ma gami mak'i si ba mai ku: n (今まで待ちせばも来ない。今まで待っても来ない)

以上の例からもわかるように、大神方言にお

いて補助動詞 *s'i* (する) は接続形 *kaki*・連用形 *kak'i* 両方承けえる。

全く同様に、*du* (ぞ) も接続形・連用形両方承けえる。

kaki du u'i do: (書いているぞう)

kak'i du s'i (書きぞする、書くよ)

turi du u'i do: (取っているぞう)

tu'i du s'i (取りぞする、取るよ)

以上の実態から、次のような結論が導かれるであろう。

- (1) 接続形 *kaki* は国語の「書いて」の変化したものではなかろう。もし、「書いて」の変化したものであるとするならば、連用形 *kak'i* も「書いて」の変化したものという解釈の可能性を生み出す結果になってしまうからである。
- (2) 補助動詞 *s'i* や助詞 *du* が接続形 *kaki*・連用形 *kak'i* を共に承けえるとするならば、両形は通時的に深い関係があったであろう。

3

補助動詞 *s'i* および助詞 *du* が接続形 *kaki*・連用形 *kak'i* を共に承けえるという事実は、この両形がもと文法的カテゴリーを同じくしていた蓋然性が高い。

一方、大神方言の連用形 *kak'i* は当方言と国語との音韻対応からしても、国語の「書き」に対応するものと解される。そうすると、接続形 *kaki* も「書き」に対応する蓋然性が高い。

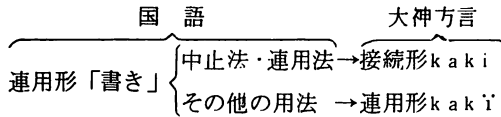
では、接続形 *kaki*・連用形 *kak'i* 両方とも国語の「書き」に対応するものとするならば、なぜ、接続形の *kaki* は当方言の音韻法則からはずれてもとのままの形をとどめたのかという問題がある。

これについては次のような推定が可能であろう。すなわち、国語の連用形の用法のうち、中

第 7 表 宮 古 方 言 活 用 形 比 較

地 点	動 詞	接 続 形	連 用 形	過 去 形1	終 止 形1	条 件 形 甲	条 件 形 乙	連 体 形
大 神	書 く	kaki	kakī	kaki	kakī		kakī tika	kakī
	落 ち る	uti	utiī	uti	utiī		utiī tika	utiī
西 里	来 る	kīfi	kūsī	kīfi	kūsī		kūsī tika	kūsī
	書 く	kaki	kakī		kakī	kaki ba	kakī tsika:	kakī
	落 ち る	uti	uti		utiī	utiri ba	utiī tsika:	utiī
	来 る	kīfi	kūsī		kūsī	kīfi ba	kūsī tsika:	kūsī
与 那 覇	書 く	kaki	kakī		kakī	kaki ba	kakī tsika:	kakī
	落 ち る	uti	uti		utiī	uti ba	utiī tsika:	utiī
来 間	来 る	kīfi	kūsī		kūsī	kīfi ba	kūsī tsika:	kūsī
	書 く	kaki	katsī, kaki		katsī	kaki ba	katsī kka:	katsī
	落 ち る	uti	uti:		utiī	utiru ba	uti kka:	utiī
	来 る	tīfi	tsūsī		tsūsī	tīfi ba	tsūsī kka:	tsūsī
池 間	書 く	kaki:	katsī, kaki		katsī		katsī tta:(ba)	katsī
	落 ち る	uti:	uti		uti:(:)		uti tta:(ba)	uti:(:)
水 納	来 る	tīi:	tsīi		fu:		fu: tta:(ba)	fu:
	書 く	kaki:	kaki		kaki		kaki taka:(ba)	kaki
	落 ち る	uti:	uti		uti:		uti: taka:(ba)	uti:
	来 る	ki:	ki:		ku:		ki: taka:(ba)	ki:

止法・連用法（連用形が用言に接する用法）の用法は当方言の接続形 *kaki* としてそのままの形をとどめて用いられ、その他の用法は当方言の音韻法則に従って連用形 *kaki* となった。これを図示すると、次の通りになる。



以上のように解釈してはじめて、次のような用例も説明可能となる。

中止法→接続形

kanu pita: bi: unu pita:
nivvi ui' (あの人は酔って《酔い》, この人は寝ている)

これは国語の中止法が大神方言で接続形として用いられている例である。

連用法→接続形

tiθ kara du uti ki'si (天からぞ落ちてくる)
ututu jara ba mai sa:ri ku:
 (弟でもつれてこい)
bi: mi: busikam (酔ってみたい)
gi: u kaki iki (字を書いていけ)
jukai ta du gi: u kaki
bukarikam (休まずに字を書くので疲れる)

その他、上記の例のように、*siti* (*fiti*) を伴わずとも、(～して) の意をあらわして用いられている用例はすべて、国語の連用法が当方言では接続形として用いられていると解されるものである。

以上、主に(書く)の接続形と連用形とについて、国語との対応でみてきた。改めてまとめてみると、国語の連用形の用法のうち、中止法・連用法は大神方言では接続形として用いられ、形のうえでは、国語の連用形が、その変化部

(語尾)において、当方言の音韻変化、すなわち、*i* (国語) → *i* (大神) の変化を受けずに、そのまゝの形で用いられたものである。一方、国語の連用形の中止法・連用法以外の用法は、大神方言では連用形として用いられ、形のうえでは国語の連用形が、その変化部において当方言の *i* → *i* の変化を受けて用いたれたものであるといえることができる。

以上のような推定は(落ちる)と(来る)の接続形と連用形の場合にはどうであろうか。

まず、(落ちる)の方からみてみよう。(落ちる)の接続形 *uti* は恐らく国語の連用形「落ち」に対応するであろう。但し、連用形 *uti* は「落ち」に対応しない。そこで、この *uti* を当方言の音韻法則に則ってさかのぼしてみると、国語の「落ちり」に対応することがわかる。そうすると、大神方言では国語の上二・上二・下二段活用に対応する動詞が、かつてある時期に、いわゆるラ行四段化傾向を示し、これが連用形 *uti* に反映されているものと解される。まとめると、接続形の *uti* は、いわゆるラ行四段化傾向を示さないもとの連用形「落ち」に対応し、連用形 *uti* はラ行四段化傾向を示した時点の「落ちり」に対応するものと解釈する。

次に、(来る)の連用形と接続形とについて検討する。まず、接続形 *k'isi* 連用形 *k'isi* における *k'i-* は国語の「き」に対応し、「く」には対応しない。「く」は当方言では *fu* になる。この「き」が当方言では *k'i:* となる。*i* 母音は宮古方言では摩擦音 *s* を伴うのが普通である。この *k'i:* がやがて *k'isi* となって形成されたのが連用形であると解する。このようにして連用形が *k'isi* となって定着すると、やがていわゆるサ行四段的類推が働いて成立し

たのが接続形 $k_i j_i$ であると解する。まとめると、接続形 $k_i j_i$ ・連用形 $k_i s_i$ 共に国語の連用形「き」が音韻変化して成立したものであると解する。

以上のように、大神方言の接続形・連用形はともに国語の連用形にその系統を求めることができる。

4

以上述べてきた大神方言における接続形と連用形に関する通時的な推定は、第7表で示した大神以外の他の五つの方言にもそのまゝあてはまる。

但し、方言によっては、音韻変化の影響によって、接続形と連用形の形のうえでのほりあい関係が多少変形している場合がある。

まず、(書く)の接続形と連用形についてみると、西里・与那覇方言は大神方言と全く同様に説明できる。但し、来間・池間・水納の各方言では接続形と連用形間における形のうえでのほりあい関係が多少異なっている(第7表参照)。

これらの方言は $i \rightarrow i$ の変化過程にある方言である。来間方言はまだ微々たるものであるが、池間・水納方言ではかなり進んでいる。この母音変化は活用形に影響を与え、来間・池間方言では連用形に $katsi$ ・ $kaki$ 両形あられ、水納方言では $kaki$ になっている。これは母音変化に伴い、連用形も kak_i (大神・西里・与那覇) $\rightarrow katsi$ (来間・池間) または $kaki$ (水納) と変化していったものと解される。連用形がこのように変化してくると、これと形の上でのほりあい関係を保っていた接続形も影響を受けざるをえない。来間方言では、連用形は $kaki$ よりも $katsi$ の方がまだ優勢なので、接続形も影響を受けず $kaki$ となっているが、

池間・水納方言のように、連用形 $kaki$ の方が優勢になり、あるいは全く $kaki$ となってしまうところでは、これとのほりあい関係で接続形も $kaki$ (大神・西里・与那覇・来間) $\rightarrow kaki$: (池間・水納) と変化している。すなわち、連用形が $kak_i \rightarrow katsi$ または $kaki$ と変化して接続形の形に近接してくると、接続形の方は $kaki \rightarrow kaki$: と末尾音を長音化することによって、連用形との区別を保っていると解される。

次に、(落ちる)の接続形と連用形についてみてみよう。西里・与那覇方言以外の方言では(落ちる)の接続形と連用形も形のうえでのほりあい関係を保っているが、この両方言の接続形と連用形はいずれも uti となっていて、区別を保っていない。この場合をどう説明するのかということであるが、活用形のほりあい関係というものは、同じ活用型のなかだけでのみみるべきものではないと考える。両方言の他の活用型、たとえば(書く)と(来る)における接続形と連用形は明確な区別を保っている。周辺にこのような明確な区別を保っている多くの活用形があれば、これに支えられて、一部の活用形に同語形があらわれることもありうるであろう。

西里・与那覇方言の連用形 uti は大神方言等の uti_i から変化したとみなせないでもないが、しかし、これはやはりいわゆるラ行四段化傾向にないもとの連用形「落ち」に対応するものと解した方が妥当のように思われる。両方言には t_i という拍は存しない。いわゆる i の直後では $i \rightarrow i$ の変化は起りえなかったのである。(落ちる)の接続形と連用形とが同語形になっている要因の一つはこれにもあると解される。但し、この「落ち」もある時期にいわゆるラ行四段化傾向を示して「落ちり」となり、

その「落ちり」に対応しているのが大神方言の $uti'i$ であると解される。 $uti'i$ は末尾の i が i に変化すると $uti:$ (来間) となり、また uti (池間・水納) となる。その変化過程を示すと、次の通りになる。

uti (西里・与那覇) $\rightarrow uti'i$ (大神) $\rightarrow$
 $\begin{cases} uti: & \text{(来間)} \\ uti & \text{(池間・水納)} \end{cases}$

従って、西里・与那覇の uti と池間・水納の uti とは形は同じでも通時的には全く異なるものである。

(落ちる) の連用形がこのように変化してくると、接続形もこれとのほりあい関係で、 uti (大神・西里・与那覇・来間) $\rightarrow uti:$ (池間・水納) と変化する。すなわち、池間・水納では連用形が uti となったため、接続形は $uti:$ と末尾音を長音化することによって、その区別を保つようになっていると解される。

(来る) の接続形と連用形ももちろん国語の連用形「き」が音韻変化して成立したものであると解する。まず、連用形の変化過程を示せば次の通りになろう。

$k'i's'i$ (大神等) $\rightarrow \begin{cases} ts'i's'i & \text{(来間)} \\ ki: & \text{(水納)} \end{cases}$
 $ts'i$ (池間)

接続形の変化過程は次の通りである。

$k'i'f'i f'i'ti$ (大神等) $\rightarrow \begin{cases} ki'f'i tti & \text{(西里)} \\ ki: tti: & \text{(水納)} \end{cases}$
 $f'i'f'i tti$ (来間) $\rightarrow tti:$ (池間)

水納方言以外では、それぞれ接続形と連用形のほりあい関係が保たれている。但し、水納方言では接続形も連用形も $ki:$ となっている。これはやはり当方言では i が i に変化しているということと、また、国語の1拍語はほとんど2拍に発音されるという当方言の特性に

よって結果しているものと解される。

5

次に、大神方言の過去形₁について考察する。

大神方言の過去形₁は次のように du に接する。

$kaki du$ (書いた) $ku'gi du$ (漕いだ)
 $ufi du$ (押した) $afi du$ (した)
 $uti du$ (落ちた) $k'i'f'i du$ (来た)

西原方言においても過去形は大神方言とほぼ平行的にあらわれる。

過去形₁

$kaki du$ (書いた)
 $kaka hi du$ (書かせた)
 $kaka i du$ (書かれた)
 $kats'i ju:hi du$ (書くことができた)

過去形₂

$kats'i tai$ (書いた)
 $kaka si tai$ (書かせた)
 $kaka i tai$ (書かれた)
 $kats'i ju:si tai$ (書くことができた)

他の宮古方言においても、綿密に調査すれば大神・西原方言の過去形₁に相当する形が見い出せる可能性がある。これまで記述してきた西里・与那覇等の五つの方言で示した過去形は大神方言等の過去形₂に相当するものである。

さて、大神方言の過去形₁を承ける du は助詞 du (ぞ) と同語である蓋然性が高い。なぜなら、これらの過去形₁が文中で用いられる際ほとんど助詞 du (ぞ) を有する文脈で用いられ、代りに過去形₁を承けた du が脱落するからである。

$k'i'f'i du$ (来た)
 $ututu: du k'i'fi$ (おとといぞ来た)
 $kaki du$ (書いた)
 $k'inu du ara gi: u du kaki$

(昨日ぞ私は字をぞ書いた)

{ iki du (行った)
k'ĩnu du iki (昨日ぞ行った)

いわゆるこれらの文では過去形₁の前に du (ぞ) があらわれるので、過去形₁が再び同じ du (ぞ) に接さなくともよいと考えられるのではなかろうか。しかし、なぜ大神方言等で、過去形₁が助詞 du (ぞ) に接して過去をあらわすようになったのか不明である。

過去形₁の接する du が助詞の du (ぞ) であるとするならば、この過去形₁もやはり接続形・連用形と文法的カテゴリーを同じくしていたものと解される。従って、国語に対応を求めるならば、kaki du (書いた) uti du (落ちた) の kaki・uti は「書き」「落ち」に対応する。また、k'ĩfi du (来た) の k'ĩfi は「き」に対応するが、さらに文法上の類推作用も働いて成立したものであると解される。

6

次に、5で示したように、過去形₁が文の終止に用いられることに着目したい。この側面から、終止形₁について考察してみよう。

5で用例を示したように、大神方言では kaki (書いた) iki (行った) k'ĩfi (来た) 等で文を終止することができる。他の用例も示せば、次の通り。

kari ga du ika di ai'ri (彼が行こうとぞ言った)

k'ĩnu du pataraki (昨日ぞ働いた)

過去形₁のこの文を終止させる職能は、過去形₁と終止形₁の文法上の深い関連性を示唆しているように思われる。いわゆる、接続形と連用形の間に存した通時的関係が、全く平行的に過去形₁と終止形₁の間にも存しているのではなかろうか。具体的にいうと、たとえば、過去形₁

kaki・終止形₁ kak'ĩ も共に国語の連用形「書き」に対応する。そして、連用形の用法のうち、「過去をあらわし文を終止する用法」は過去形₁ kaki となってそのままの形をとどめ、「非過去をあらわし文を終止する用法」は当方言の音韻法則に則って終止形₁ kak'ĩ となって用いられるようになったと解するのである。

(書く) (落ちる) (来る) の終止形₁ はそれぞれ次のような変化をへたであろう。

(書く)

kak'ĩ (大神等) → kats'ĩ (来間・池間)
→ kaki (水納)

(落ちる)

uti'ĩ (大神等) → uti: (池間・水納)

(来る)

k'ĩs'ĩ (大神等) → ts'ĩs'ĩ (来間)
→ fu: (池間)
→ ku: (水納)

uti'ĩ・k'ĩs'ĩ は連用形のところで述べたように、それぞれ「落ちり」「き」に対応するであろう。

7

次に、条件形について検討する。宮古方言の条件形には三種ある。その一つは、たとえば大神方言の kaka ba (書かば) 等のようなもので、これは未然形の成立と基盤を同じくしているものと解される。

ここで、条件形として考察するのは他の二種で、これを第7表では条件形甲・条件形乙として示しておいた。

まず、条件形甲であるが、これの対応形式を国語に求めると、たとえば kaki ba (西里・与那覇・来間) だと、次の二形式が想定される。

① 「書きば」に対応する。

② 「書けば」に対応する。

(書く)の条件形甲だけをみていると、国語との音韻対応上からも②の解釈が妥当のように思われる。

但し、(落ちる)の条件形甲をみると、②の解釈は多少疑問になってくる。西里方言の *utiri ba* (落ちれば) の場合は一見「落ちりば」よりもむしろ「落ちれば」に対応するかのように見える。しかし、そう解釈すると、与那覇・来間方言の *uti ba · utiru ba* が説明できない。「落ちれば」が両方言で *uti ba · utiru ba* となる音韻・文法上の理由は見出しえない。

そこで、この条件形甲もやはり接続形等と同様、国語の連用形に *ba* の接したもので、すなわち①の解釈をとった方が妥当のように思われる。そうすれば、*kaki ba* の *kaki* の場合は国語の「書き」に対応し、「き」の部分が *i* → *i̇* の変化を受けずそのまゝの形をとどめたものと解釈することができるし、(落ちる)の条件形甲は次のような変化をへたものと解することができるであろう。

uti (与那覇) → *utiri* (西里) → *utir̥i̇* → *utiru* (来間)

すなわち、与那覇方言の場合は「落ち」に対応し、西里方言はいわゆるラ行四段化傾向を示した時点での形「落ちり」に対応する。「落ちり」は宮古では、西里方言のように、「り」の部分が *i* → *ɾ* の変化を受けずに用いられたものもあるが、時には *i* → *ɾ* の変化を受けて *utir̥i̇* となった場合もある。但し、*utir̥i̇* の形は現在の手持ちの資料内ではみあたらないので、一応想定形という意味で*印をつけておく。その *utir̥i̇* が *utiru* となったのが来間方言であると解する。

同様に、(来る)の条件形甲も「き」の音韻変化したものであると解する。

次に、条件形乙であるが、これは音韻対応上からも国語の連用形に対応するものと解する。

(書く)の条件形乙は「書き」に対応し、次のような変化をへたであろう。

kaki (大神等) → *katsi̇* (来間・池間)
→ *kaki* (水納)

(落ちる)の条件形乙は「落ちり」に対応し、次のような変化をへたであろう。

uti̇i̇ (大神・西里・与那覇) →
 { *uti̇* : (水納)
 uti (来間・池間)

来間・池間方言の *uti* はいわゆるラ行四段化しない以前の「落ち」に対応するとみるよりは、むしろ大神方言等の *uti̇i̇* から変化したものと解した方が妥当である。

(来る)の条件形乙は「き」に対応し、次のような変化をへたであろう。

kis̥i̇i̇ (大神・西里・与那覇) →
 { *ts̥is̥i̇i̇* (来間)
 fu̇ : (池間)
 ki̇ : (水納)

水納方言の *ki̇* : も大神等の *kis̥i̇i̇* から変化した新しい形と解される。

8

上代国語では連用形が連体的機能も有していたことがわかっている(「原始日本語と文法」福田良輔 日本文法講座3 明治書院)。

宮古方言の連体形、たとえば、大神方言の *kaki* (書く) は音韻的には国語の連用形「書き」に対応する。

なお、上代国語では終止形も連体的機能を有していたことがわかっている(前記福田論文)。宮古方言においても終止形₁の有する連体的機

能が連体形として用いられるようになったと解することもできるが、終止形₁が前述したように、国語の連用形に対応するものと解されるのであれば、宮古方言の連体形が国語の連用形に対応するという結論にやはりかわりはない。

（書く）（落ちる）（来る）の連体形は各々次のような変化をへたであろう。

（書く）

kak'i (大神等) → kats'i (来間・池間)
→ kaki (水納)

（落ちる）

uti'i (大神等) → uti: (池間・水納)

（来る）

k'i's'i (大神等) → ts'i's'i (来間)
→ fu: (池間)
→ ki: (水納)

kak'i・uti'i・k'i's'i がそれぞれ「書き」「落ちり」「き」に対応するとみえることはこれまでと同様である。

9

以上述べてきた接続形から連体形までの各活用形の通時的相互関係をまとめて示すと、第8

9・10表の通りとなる。

この表からもわかる通り、宮古方言では、接続形・過去形₁・条件形甲がほぼ同形であり、また、終止形₁・条件形乙・連体形・連用形も同じ形を示している。これらの活用形は形のうえでははい関係を示さないかのようにみえるが、しかし、これは動詞に相当する部分だけがそうなのであって、それらの活用形の接する接尾形式までみていくと、そこには形のうえでのはい関係も明確に存す。大神方言の（書く）の活用形に例をとって示すと、次のとおりである（但し、条件形甲のみは西里方言に例をとる）。

まず、前者の場合を示すと、次の通り。

接続形 kak'i s'i'ti

過去形₁ kak'i du

条件形甲 kak'i ba (西里)

後者の場合は次の通り。

終止形₁ kak'i 文終止

条件形乙 kak'i ti'ka

連体形 kak'i 体言

連用形 kak'i bu's'ikam

従って、宮古方言では、接尾形式が活用形のはりあい関係に重要な役割を果たしていることがわかる。

10

過去形₂は宮古方言で第11表のようにあらわれる。

第11表

	書く	落ちる	来る
大神	kak'i	uti	k'i's'i
西里	kak'i	uti	k'i's'i
与那覇	kak'i	uti	k'i's'i
来間	kats'i	uti	ts'i's'i
池間	kats'i, kaki	uti	tt
水納	kaki	uti	ki

この過去形₂も連用形等とともに、国語の連用形に対応するものと解する。

（書く）の過去形₂は「書き」に対応し、次のような変化をへたであろう。

kak'i (大神等) → kats'i (来間)
→ kaki (水納)

（落ちる）のutiは「落ち」に対応するであろう。（来る）の場合は「き」に対応し、次のような変化をへたであろう。

第 8 表 （ 書 く ） の 活 用 形

国 語		宮 古 方 言	
連用形「書き」	中止法・連用法	接続形	kaki（大・西・与・来）→ kaki:（池・水）
	文の終止	過去をあらわす	過去形1 kaki（大）
		非過去をあらわす	終止形1 kaki'（大・西・与） → katsu'（来・池） → kaki（水）
	条件接続	条件形甲	kaki（西・与・来）
		条件形乙	kaki'（大・西・与） → katsu'（来・池） → kaki（水）
	連体的用法	連体形	kaki'（大・西・与） → katsu'（来・池） → kaki（水）
	その他の用法	連用形	kaki'（大・西・与） → katsu'（来・池） → kaki（水）

※（大・西・与・来・池・水）はそれぞれ（大神・西里・与那覇・来間・池間・水納）をあらわす、以下同じ。

第 9 表 （ 落 ち る ） の 活 用 形

国 語		宮 古 方 言	
連用形「落ち」または「落ちり」	中止法・連用法	接続形	uti（大・西・与・来）→ ti:（池・水）
	文の終止	過去をあらわす	過去形1 uti（大）
		非過去をあらわす	終止形1 uti'（大・西・与・来）→ uti:（池・水）
	条件接続	条件形甲	uti（与）→ utiri（西）→ *utir' → utiru（来）
		条件形乙	uti'（大・西・与） → uti:（水） → uti（来・池）
	連体的用法	連体形	uti'（大・西・与・来）→ uti:（池・水）
	その他の用法	連用形	uti（西・与）→ uti'（大） → uti:（来） → uti（池・水）

第 10 表 (来 る) の 活 用 形

国 語	言 方 古		
	宮	古	言
中止法・連用法	接続形	$k_{\circ}i'si$ (大・与) $\rightarrow k_{\circ}i'si$ (西) $\rightarrow t_{\circ}i'si$ (来) $\rightarrow tti$ (池)	
文の終止	{	過去をあらわす	過去形 $k_{\circ}i'si$ (大)
		非過去をあらわす	終止形 $k_{\circ}i'si$ (大・西・与) $\rightarrow ts'si$ (来) $\rightarrow fu$ (池) $\rightarrow ku$ (水)
連用形「き」	条件接続	条件形甲 $k_{\circ}i'si$ (与) $\rightarrow k_{\circ}i'si$ (西) $\rightarrow t_{\circ}i'si$ (来)	
		条件形乙 $k_{\circ}i'si$ (大・西・与) $\rightarrow ts'si$ (来) $\rightarrow fu$ (池) $\rightarrow ki$ (水)	
連体的用法	連体形	$k_{\circ}i'si$ (大・西・与) $\rightarrow ts'si$ (来) $\rightarrow fu$ (池) $\rightarrow ki$ (水)	
その他の用法	連用形	$k_{\circ}i'si$ (大・西・与) $\rightarrow ts'si$ (来) $\rightarrow ts'i$ (池) $\rightarrow ki$ (水)	

- 136 -

	来 間	大 神	西 里
書 く	kake	kaki, kakira	kaki
落ちる	utiro	utiru, utirura	utiru
来 る	ku:	ku:, ku:ra	ku:

上記の語に限っていえば、与那覇、池間、水納は西里と同じである。

命令形では来間方言の活用形が特徴的である。これは宮古方言の命令形を解明する糸口ともなるもので、今後の緻密な調査が望まれる。

助動詞

大神方言で用いられている助動詞について記述する。またその後に、手持ちの資料の範囲内で、西里・与那覇・水納の各方言の助動詞をも合わせ示し、比較参考資料としたい。

大神方言

大神方言で用いられている助動詞を示すと、次の通りである。みつけえた限りの活用形も示す。

1 s'i (せる, 使役)
 ɡi:u juma s'i (字を読ませる)
 ffa u uma ɸkai jara' si (子をここへ来させなさい)
 juma sa ɖi (読まそう)
 juma sa te:n (読まさない)
 juma s'i bus'ikam (読ませたい)
 juma s'i p'i'tu (読ませる人)
 juma s'i na (読ませるな)
 juma si (読ませ)
 juma si (読ませて)

宮古方言には終止形₁の他に終止形₂もあらわれる。

	大 神	西 里	与那覇
書 く	kak'im	kak'im	kak'im
落ちる	uti'im	uti:m	utim
来 る	k'i'sim	k'i'sim	k'i'sim

その成立過程については終止形₁とともに、従来も説かれてきているが、まだ検討すべきところも多いように思われる。終止形₂の成立をどうみることによっては、終止形₁の成立についても改めて検討せざるをえない場合もあろう。

juma si s'i'ti (読ませて)
 2 s'imii' (させる。しめる, 使役)
 fiken nu uki s'imii' (試験を受けさせる)
 mmu ni s'imii' (芋を煮させる)
 ɡi: kaka s'imii' (字を書かしめる)
 ɡi: juma s'imii' (字を読ましめる)
 ni: s'imi ɖi (煮させよう)
 ni: s'imi te:n (煮させない)
 ni: s'imi ɸa (煮させれば)
 ni: s'imi ti'ka (煮させれば)
 ni: s'imi bus'ikam (煮させたい)
 ni: s'imii' munu (煮させるもの)
 ni: s'imii'(s'imin) na (煮させるな)
 ni: s'imiru (煮させろ)
 ni: s'imi (煮させて)
 ni: s'imi s'i'ti (煮させて)

3 i'i (れる, 受身・可能)

受身

p'i'tu n ɖo tanuma i'i (人に頼まれる)

p^hi^htu n du tataka i^hi (人にたたかれる)
 p^hi^htu n du kurusa i^hi (人に殺される)
 人になぐられること

可能

mi g^hi g^ha:mi numa i n na (水さえ
 飲めないのか)

活用形

tanuma i d^hi (頼まれよう)
 tanuma i te:n (頼まれない)
 tanuma i ba (頼まれれば)
 tanuma i t^hika (頼まれれば)
 tanuma i bus^hikam (頼まれたい)
 tanuma i^hi p^hi^htu (頼まれる人)
 tanuma i^hi(in) na (頼まれるな)
 tanuma i ru (頼まれろ)
 tanuma i (頼まれて)
 tanuma i s^hi^hti (頼まれて)

4 rai^hi (られる, 受身・可能)

受身

p^hi^htu n du tas^hiki rai^hi (人に助け
 られる)

可能

ki kara uki rai du s^hi (今日から
 起きられる)

5 bus^hikam (たい, 願望)

ki: nu mta u tu^hi bus^hikam (木の
 実を取りたい)

uma 0kai du k^hi s^hi bus^hikam (ここ
 へぞ来たい)

tu^hi buffa ne:n (取りたくない)
 tu^hi bus^hikari ba (取りたければ)
 tu^hi bus^hika t^hika (取りたければ)
 tu^hi bus^hika^hi p^hi^htu (取りたい人)

tu^hi bus^hikari s^hi^hti (取りたくて)

6 ja:s^hikam (やすい, 容易)

kanu ki: nu mta tu: ja:s^hikam

(あの木の実は取りやすい)

uma 0kai ja k^hi s^hi ja:s^hikam (こ
 こへは来やすい)

tu^hi ja:ffa ne:n (取りやしくない)

tu^hi ja:s^hikari ba (取りやすければ)

tu^hi ja:s^hika t^hika (取りやすければ)

tu^hi ja:s^hika^hi munu (取りやすいもの)

tu^hi ja:s^hikari s^hi^hti (取りやすくて)

7 kumikam (やすい, 容易)

ja:s^hikam とほぼ同じ意味で kumikam
 という語もある。両者の関連は今のところ明ら
 かでない。

ik^hi kumikam (行きやすい)

8 g^hurikam (にくい, 困難)

kare: tu^hi g^hurikam (あれは取りにく
 い)

kama kara uma 0kai ja k^hi s^hi
 g^hurikam (向うからここへは来にくい)

tu^hi g^huriffa ne:n (取りにくくない)

tu^hi g^hurikari ba (取りにくければ)

tu^hi g^hurika t^hika (取りにくければ)

tu^hi g^hurika^hi munu (取りにくいもの)

tu^hi g^hurikari s^hi^hti (取りにくくて)

9 gu:kam (にくい, 困難)

g^hurikam とほぼ同じ意味で gu:kam とい
 うのがある。

tu^hi gu:kam (取りにくい)

10 ka:kam (にくい, 困難)

guri kam, gu:kam とほぼ同じ意味で ka:kam もある。これら三者の関連もまだはっきりつかみえていない。

tu'i ka:kam (取りにくい)

tu'i ka:ffa ne:n (取りにくくない)

tu'i ka:kari ba (取りにくければ)

tu'i ka:ka tika (取りにくければ)

tu'i ka:kai munu (取りにくいもの)

tu'i ka:kari si'ti (取りにくくて)

11 gikam (そうだ, 様子)

kaki gikam (書きそうだ)

12 busigimunu (そうだ, 様子)

gikam とほぼ同じ意味を表わす。末尾の munu が脱落して busigi で終止する場合もある。

kaka sa i jaffa ne:n busigi
(書かされやすそうでない)

kaka sa i jaffa ne:n busigi
du ja tai (書かれやすくなさそうであった)

ku'gi busigi nari du ura mai
(漕ぎそうでいらっしやる)

ffa u tu'i busigi nari du u'i
(草を取りそうだ)

tu'i busigi nari du u'i (取りそうにしている)

13 mai(mam) (お~になる, 尊敬)

kaka mai (お書きになる)

ffa u du turi ura mai (草をお取りになっていらっしやる)

minaka nu ffa u du turi ura

mai (庭の草を取っていらっしやる)

時には k'si (来る) の尊敬語 mme'i (いらっしやる) が尊敬表現として用いられる場合もある)

turi mme'i (取っていらっしやる)

turi mme n (取っていらっしやらない)

turi mme tika (取っていらっしあれば)

turi mme'i p'tu (取っていらっしやる人)

turi mme'i na (取っていらっしやるな)

turi mme si'ti (取っていらして)

14 te:n (ない, 否定)

これは恐らく de ara n (であらん) の変化したものであろう。de (で, 否定), n (否定) で二重否定になっているが、琉球方言では二重否定で否定を表わす場合が多い。

de ara n の変化したものとすれば、この助動詞はむしろ de:n と表記する方が妥当であるが、ここではさしあたって te:n と表記しておく。

mai ba uki te:n (まりを受けない)

15 n (ない, 否定)

kaka n (書かない)

nau ju mai tura n (なにも取らない)

16 ne:n (ない, 否定)

ne:n は形容詞か形容詞型助動詞を必ず承ける。

kaki jaffa ne:n (書きやすくない)

tu'i buffa ne:n (取りたくない)

17 tai(tam) (た, 過去)

tu'i tai (取った)

なお、他の用例について動詞の活用形の用例を参照。

18 du (た, 過去)

turi du (取った)

西里方言

1 si' (せる, 使役)

kaka si' (書かせる)

kaka sa: (書かそう)

kaka sa dʒa:n (書かさない)

kaka fi ba (書かせば)

kaka si' ts'ika: (書かせば)

kaka si' busimunu (書かせたい)

kaka si' munu (書かせるもの)

kaka si' na (書かせるな)

kaka fi (書かせろ)

kaka fi tti (書かせて)

kaka si' tai' (書かせた)

2 si'mi'i (させる・しめる, 使役)

uki si'mi'i (受けさせる)

uki si'mi (受けさせよう)

uki si'mi dʒa:n (受けさせない)

uki si'miri ba (受けさせれば)

uki si'mi'i ts'ikja: (受けさせれば)

uki si'mi busimunu (受けさせたい)

uki si'mi'i munu (受けさせるもの)

uki si'mi'i na (受けさせるな)

uki si'miru (受けさせろ)

uki si'mi tti (受けさせて)

uki si'mi tai' (受けさせた)

3 ri'i (れる, 受身・可能)

kaka ri'i (書かれる)

kaka ri n (書かれない)

kaka riri (iri) ba (書かれれば)

kaka ri'i (i'i) ts'ikja: (書かれれば)

kaka ri (i) busimunu (書かれない)

kaka ri'i (i'i) munu (書かれるもの)

kaka ri'i na (書かれるな)

kaka iru (書かれろ)

kaka i tti (書かれて)

kaka ri (i) tai' (書かれた)

4 rai'i (られる, 受身・可能)

uki rai'i (受けられる)

uki rai n (受けられない)

uki rairi ba (受けられれば)

uki rai'i ts'ika: (受けられれば)

uki rai busimunu (受けられたい)

uki rai'i munu (受けられるもの)

uki rai'i na (受けられるな)

uki rairu (受けられる)

uki rai tti (受けられて)

uki rai tai' (受けられた)

5 busimunu (たい, 願望)

busimunu は munu が脱落して busi' となる場合もある。

kak'i busimunu (busi') (書きたい)

kak'i buffa nja:n (書きたくない)

kak'i busikari ba (書きたければ)

kak'i busi' ts'ika: (書きたければ)

kak'i busi' p'itu (書きたい人)

kak'i busika tai' (書きたかった)

6 no:kam (らしい, 推定)
 kak'i no:kam (書くらしい)

7 dʒa:n (ない, 否定)
 kaka dʒa:n (書かない)

8 n (ない, 否定)
 kaka n (書かない)
 kaka n p'i'tu (書かない人)

9 nja:n (ない, 否定)
 takaffa nja:n (高くない)
 ss'i'ffa nja:n (白くない)
 p'i'suffa nja:n (広くない)

10 ta'i (た, 過去)
 kak'i ta'i (書いた)
 kaka ttan (書かなかった)
 kak'i tari ba (書いたらば)

与那覇方言

1 si (せる)
 kaka si (書かせる)
 kaka sa di (書かそう)
 kaka sa n (書かさない)
 kaka sa ba: (書かせたい)
 kaka sa ba du (書かさばぞ)
 kaka fi ba (書かせば)
 kaka si ts'i'ka: (書かせば)
 kaka si bus'i'ka'i (書かせたい)
 kaka si tuk'i (書かせる時)
 kaka si na (書かせるな)
 kaka fi (書かせろ)
 kaka fi tti (書かせて)

kaka si ta'i (書かせた)
 kaka fi u'i (書かせている)

2 si'mi'i (させる, しめる)
 uki si'mi'i (受けさせる)
 uki si'mu (si'mi) di (受けさせよう)
 uki si'mu (si'mi) n (受けさせない)
 uki si'mu (si'mi) dja:n (受けさせない)
 uki si'mu ba: (受けさせたい)
 uki si'mu ba du (受けさせればぞ)
 uki si'mi ba du (受けさせればぞ)
 uki si'mi ts'i'ka: (受けさせれば)
 uki si'mi bus'i'ka'i (受けさせたい)
 uki si'mi'i tuk'i (受けさせる時)
 uki si'mi'i na (受けさせるな)
 uki si'miru (受けさせろ)
 uki si'mi tti (受けさせて)
 uki si'mi ta'i (受けさせた)
 uki si'mi u'i (受けさせている)

3 ri'i (れる)
 anna n i'za ri'i (母に叱られる)
 dz'i: nu kaka ri'i (字が書かれる。字
 が書ける)
 kaka ru n (書かれない)
 kaka ru ba: (書かれない)
 kaka ru ba (書かれば)
 kaka ri ba (書かれば)
 kaka ri'i ts'i'ka: (書かれば)
 kaka ri bus'i'ka'i (書かれない)
 kaka ri'i munu (書かれるもの)
 kaka ri tti (書かれて)
 kaka ri (ri'i) ta'i (書かれた)
 kaka ri u'i (書かれています)

4 rai'i (られる)

funi nu du mi: rai'i (舟がぞ見られる。舟が見える)

fikin nu uki rai'i (試験が受けられる。試験を受けることができる)

uki raru n (受けられない)

uki raru ba: (受けられたい)

uki raru ba (受けられれば)

uki rari ba (受けられれば)

uki rai ts'i_oka: (受けられれば)

uki rari bus'ika'i (受けられたい)

uki rai'i tuk'i (受けられるとき)

uki rai tti (受けられて)

uki rai (rai'i) tai' (受けられた)

uki rai u'i (受けられている)

5 bus'i:nu (bus'ika'i) (たい)

kak'i bus'i:nu (書きたい)

kak'i buffa nja:n (書きたくない)

kak'i bus'ikari ba (書きたければ)

kak'i bus'ika ts'i_oka: kaki (書きたければ書け)

kak'i bus'i:nu (bus'ika'i) p'i_otu (書きたい人)

6 bus'ikimunu (そうだ、様子)

bus'ikimunuはbus'ikiとも用いられる。

dz'i: zu kak'i bus'ikimunu (bus'iki) (字を書きそうだ)

uki bus'iki (受けそうだ)

7 jo:kam (ようだ、推定・例示)

kak'i jo:kam (書くようだ)

pana jo:kam (花のようだ)

8 no:kam (ようだ、推定)

kak'i no:kam (書くらしい)

9 mai' (お~になる。尊敬)

kaka mai' (お書きになる)

kaka ma n (お書きにならない)

kaka mai ba (お書きになれば)

kaka mai' ts'i_oka: (お書きになれば)

kaka mai' munu. (お書きになるもの)

kaka mai' na (お書きになるな)

kaka mai tti (お書きになって)

kaka mai tai' (tam) (お書きになった)

10 dja:n (ない)

kaka dja:n (書かない)

kaka dja:n na (書かないか)

kaka daka: nara n (書かなければならない)

no:ju mai kaka dana k'i_os'i tai' (なにも書かずに来た)

11 n (ない)

kaka n (書かない)

kaka n p'i_otu (書かない人)

kaka nfu nai' (書かなくなる)

kaka nnja: mai junumunu (書かなくとも同じ)

kaka ttam (書かなかった)

12 nja:n (ない)

nja:nは形容詞型活用助動詞を承ける。

kak'i buffa nja:n (書きたくない)

to: mai ik'i buffa nja:n (誰も行きたがらない)

13 ta'i(tam)

kak'i ta'i(tam) (書いた)

kak'i ta'i p'i_otu (書いた人)

kak'i tari ba (書いたならば)

水納方言

1 s'i (せる)

uttu n kaka s'i (弟に書かせる)

kaka sa: (書かそう)

kaka fa n (書かさない)

kaka sa ba (書かさば)

kaka fi ba (書かせば)

kaka s'i taka: (書かせば)

kaka s'i ba (書かせば)

kaka fi buffa:i (書かせたい)

kaka s'i p'i_otu (書かせる人)

kaka s'i na (書かせるな)

kaka fi (書かせろ)

kaka fi tti (書かせて)

kaka fi tta (書かせた)

kaka fi bui (書かせている)

2 fimi: (させる, しめる)

uki fimi: (受けさせる)

3 ri: (れる)

dʒi: ja kaka ri: (字は書かれる。字は書ける)

kaka ri: (書かれよう, 受身)

kaka ri n (書かれない)

kaka ri: ba (書かれれば)

kaka ri: taka: (書かれれば)

kaka ri: buffa:i (書かれない)

kaka ri: p'i_otu (書かれる人)

kaka ri: na (書かれるな)

kaka riru (書かれろ)

kaka ri: tti (書かれて)

kaka ri tta (書かれた)

kaka ri: bui (書かれている)

4 rari: (られる)

uki rari: (受けられる)

uki rari: (受けられよう)

uki rari n (受けられない)

uki rariri (rariru) ba (受けられれば)

uki rari taka: (受けられれば)

uki rari buffa:i (受けられたい)

uki rari: ba:nna (受けられる時)

uki rari: na (受けられるな)

uki rariru (受けられろ)

uki rari: tti (受けられて)

uki rari tta (受けられた)

uki rari: bui (受けられている)

5 buffa:i (たい)

kaki buffa:i (書きたい)

kaki buffa: ne:n (書きたくない)

kaki buffa:i ba (書きたければ)

kaki buffaa taka: (書きたければ)

kaki buffaai p'i_otu (書きたい人)

kaki buffan (書きたくて)

kaki buffaa tai (書きたかった)

6 gifa:i (gimunu) (らしい, そうだ)

kare: kaki gimunu (彼は書きそうだ)

funi gimunu (舟らしい)

kaki gifa:i (書きそうだ)

kaki gifa: ne:n (書きそうでない)

kaki gifa:i ba (書きそうであれば)
 kaki gifaa taka (書きそうであれば)
 kaki gifa: du ai (書きそうだ)
 kaki gifa:i p_otu (書きそうな人)
 kaki gifa: tai (書きそうだった)

7 bus'igimunu (そうだ, 様子)

dʒi: ju kaki bus'igimunu (字を書きそうだ)
 kaki bus'igifa: ne:n (書きそうでない)
 kaki bus'igifaa i ba (書きそうならば)
 kaki bus'igifaa taka: (書きそうならば)
 kaki bus'igifa:i p_otu (書きそうな人)
 kaki bus'igifi tti (書きそうで)
 kaki bus'igifaa tai (書きそうであった)

8 wa:i (お~になる)

kaki wa:i (お書きになる)

kaki wa:ra n (お書きにならない)
 kaki wa:i ba (お書きになれば)
 kaki wa:i taka: (お書きになれば)
 kaki wa:i p_otu (お書きになる人)
 kaki wa:ri tti (お書きになって)
 kaki wa:i tai (お書きになった)

9 man (まい, 否定)

kaka man (書くまい)

10 n (ない)

kaka n (書かない)
 kaka daka: (書かなければ)
 kaka n p_otu (書かない人)

11 ne:n (ない)

taka fa: ne:n (高くない)
 p'iruma fa: ne:n (珍しくない)

12 tai (tta) (た)

dʒi: ju kaki tai (字を書いた)
 dʒi: ju kaki tta (字を書いた)

助動詞の相互承接

用言の後にあらわれる助動詞には、そのあらわれ方に一定の順序がある。

その順序を記述するに際して、奄美大島湯湾方言では文の末尾に近く位置する助動詞から順に記述した(『琉球の方言』1976年)。

一方、文中における助動詞の相互承接をみていく場合、用言を基点として、その後に関々の助動詞が相互にいかなる順序であられるかという観点からみていく方法もある。助動詞の次

に位置する終助詞までを記述の展望に入れるとき、むしろこの方法が望ましい。

以下、後者の観点、すなわち用言(ここでは動詞)を基点として、各々の助動詞がどういう順序であられるかという観点に立って、大神方言と西原方言についてみていきたい。

西原方言は名嘉真三成氏(都立大学大学院生)から調査したもので、名嘉真氏からはいろいろ貴重なご意見をいただいた。

大神方言

1 動詞

動詞の活用の項でも述べたように，大神方言も含めて，宮古方言には，奄美・沖縄方言で認められるような「継続」「既存」「完了」等の派生形式は認められない。そのために，助動詞の相互承接も奄美・沖縄方言に比していたって単純である。

ここでは動詞を基点にして，その承接関係を見ることにする。

2 s'i (せる, 使役)

s'imii' (させる・しめる, 使役)

動詞の直後に位置するのがこの「使役」の助動詞である。

kaka s'i (書かせる)

ni : s'imii' (煮させる)

3 ii' (れる, 受身・可能)

raii' (られる, 受身・可能)

s'i, s'imii'の次に位置するのが「受身・可能」の助動詞ii'・raii'である。

(ア) 動詞－受身・可能

kaka ii' (書かれる)

tasiki raii' (助けられる)

(イ) 動詞－使役－受身・可能

ku^oga sa i mmei' (漕がされていられる)

ku^oga sa i mme tam (漕がされていらした)

ku^oga sa i mme da tam (漕がされていなかった)

4 bus'ikam (たい, 願望)

ja : s'ikam (やすい, 容易)

kumikam (やすい, 容易)

g^ourikam (にくい, 困難)

g^ou : kam (にくい, 困難)

ka : kam (にくい, 困難)

「受身・可能」の助動詞ii'・raii'の次に位置するのが，これらの助動詞である。これら6個の助動詞の相互間には前後関係の順序はなく，共に同列であると解される。これらはすべて形容詞型活用の助動詞である。用例は次の通り。

(ア) 動詞 — 願望 (bus'ikam)
— 容易 (ja : s'ikam, kumikam)
— 困難 (g^ourikam, g^ou : kam, ka : kam)

kaki' bus'ikam (書きたい)

kaki' ja : s'ikam (書きやすい)

kaki' kumikam (書きやすい)

kaki' g^ourikam (書きにくい)

kaki' g^ou : kam (書きにくい)

kaki' ka : kam (書きにくい)

(イ) 動詞－使役－受身・可能 — 願望
— 容易
— 困難

ku^oga sa i bus'ikam (漕がされたい)

ku^oga sa i bus'ika tam (漕がされたかった)

ku^oga sa i ja : s'ikam (漕がされやすい)

ku^oga sa i ja : s'ika tam (漕がされやすかった)

k u g a s a i g u r i k a m (漕がされにくい)

5 g i k a m (そうだ, 様子)

b u s i g i m u n u (そうだ, 様子)

「願望」「容易」「困難」を表わす助動詞の次に位置するのがこの二つの助動詞である。この2個の助動詞の間にも前後の順序関係はなく、同列である。これらも形容詞型活用である。

(ア) 動詞－様子

k a k i' g i k a m (書きそうだ)

k a k i' b u s i g i m u n u (書きそうだ)

(イ) 動詞－使役－受身・可能－容易－様子

k a k a s a i j a : s i' g i k a m (書かされやすそうである)

k a k a s a i j a : s i' b u s i g i m u n u (書かされやすそうである)

6 m a i' (お～になる, 尊敬)

「様子」の助動詞の次に位置するのが「尊敬」を表わす助動詞である。

これまで記述してきた1～5までの諸形式は普通表現形式であり、これらの普通表現形式を m a i' が承けると尊敬表現形式となる。

以下に示す用例は、これまで記述してきた1～5までの普通表現形式に対する尊敬表現形式である。また、(5)の例は同時に「様子」の助動詞の次に m a i' が位置することを示すものである。

(1) 動詞－尊敬

k a k a m a i' (お書きになる)

(2) 動詞－使役－尊敬

k a k a s a m a i' (書かせなさる)

n i : s i' m i s a m a i' (煮させなさる)

s i' m i i' は動詞の活用でいうならばⅢの型

(文語の上－・上二・下二段型活用の動詞が属する)に属して活用する。一方, m a i' は未然形

を承ける助動詞である。そこで, s i' m i i' が m a i' に接するとき, 本来ならば s i' m i m a i' となるべきであるが, 上記用例では s i' m i s a m a i' となっている。これは恐らく s i' m i r a から変化したもので, s i' m i r a はⅢの型がⅠの型(文語の四段型活用の動詞が属する)へ類推作用の働いた結果あらわれてきたものと解される。

(3) 動詞－受身－尊敬

k a k a i m a i' (書かれなさる)

t a t a k a i m a i' (たたかれなさる)

(4) 動詞

┌	願望	┐	尊敬
	容易		
	困難		

k a k i' b u s i k a r a m a i' (m a m) (お書きになりたい)

k a k i' j a : s i k a r a m a i' (m a m) (お書きになりやすい)

k a k i' k u m i k a r a m a i' (m a m) (お書きになりやすい)

k a k i' g u r i k a r a m a i' (m a m) (お書きになりにくい)

k a k i' g u : k a r a m a i' (m a m) (お書きになりにくい)

k a k i' k a : k a r a m a i' (m a m) (お書きになりにくい)

k a k i' k a : f u d u a r a m a i' (お書きになりにくい)

(5) 動詞－様子－尊敬

k a k i' g i k a r a m a i' (m a m) (お書きになりそうだ)

k a k i' g i : f u d u a r a m a i' (お書きになりそうだ)

7 n (ない, 否定)

te:n (ない, 否定)

ne:n (ない, 否定)

「尊敬」の助動詞 *ma'i* の次に位置するのが「否定」の助動詞である。

これまで記述してきた 1～6 までの諸形式はすべて肯定表現形式であり、これらの形式を「否定」の助動詞が承けると否定表現形式となる。すなわち、肯定・否定の対立はこのレベルであられる。

▲ 普通・否定表現

(1) 動詞－否定

kaka n (書かない)*kaka te:n* (書かない)

(2) 動詞－使役－否定

kaka sa n (書かさない)*kaka sa te:n* (書かさない)*ni: si'mi n* (煮させない)*ni: si'mi te:n* (煮させない)

(3) 動詞－受身・可能－否定

kaka i n (書かれない)*kaka i te:n* (書かれない)

(4) 動詞

願望

否定

容易

困難

kak'i buffa ne:n (書きたくない)*kak'i jaffa ne:n* (書きやすくない)*kak'i kumiffa ne:n* (書きやすくない)*kak'i guriffa ne:n* (書きにくくない)*kak'i gu:ffa ne:n* (書きにくくない)*kak'i ka:ffa ne:n* (書きにくくない)

(5) 動詞－様子－否定

kak'i giffa ne:n (書きそうでない)

▲ 尊敬・否定表現

(1) 動詞－尊敬－否定

kaka ma n (お書きにならない)*kaka ma te:n* (お書きにならない)

(2) 動詞－使役－尊敬－否定

kaka sa ma n (書かせなさらない)*kaka sa ma te:n* (書かせなさらない)*ni: si'misa ma n* (煮させなさらない)*ni: si'misa ma te:n* (煮させなさらない)

(3) 動詞－受身・可能－尊敬－否定

kaka i ma n (書かれなさらない)

(4) 動詞

願望

否定

容易

困難

kak'i buffa ne: ma n (お書きになりたくない)*kak'i jaffa ne: ma n* (お書きになりやすくない)*kak'i kumiffa ne: ma n* (お書きになりやすくない)*kak'i guriffa ne: ma n* (お書きになりにくくない)*kak'i gu:ffa ne: ma n* (お書きになりにくくない)*kak'i ka:ffa ne: ma n* (お書きになりにくくない)

この否定表現は国語の場合とは異なり、*ma* を中にはさんで、*ne:* (ない) *n* (ない) の二重否定で「否定」を表現している。琉球方言では二重否定は必ずしも肯定とはならない。

(5) 動詞－様子－尊敬－否定

kak'i giffa ne: ma n (お書きになりそうでない)

8 tai'(tam) (た, 過去)

du (た, 過去)

「否定」の助動詞の次に位置するのが「過去」を表わす助動詞である。

これまで記述してきた1～7までの諸形式はすべて非過去表現である。これらの諸形式を「過去」の助動詞が承けると過去表現形式が成立する。すなわち、非過去・過去の対立はこのレベルで成立することになる。

▲ 普通・肯定・過去表現

(1) 動詞－過去

kak'i tai'(tam) (書いた)

kak'i du (書いた)

(2) 動詞－使役－過去

kaka si' tai'(tam) (書かせた)

kaka fi du (書かせた)

ni: si'mi tai'(tam) (煮させた)

ni: si'mi du (煮させた)

(3) 動詞－受身・可能－過去

kaka i tai'(tam) (書かれた)

kaka i du (書かれた)

(4) 動詞

願望	過去
容易	
困難	

kak'i bus'ika tai'(tam) (書きたかった)

kak'i ja:s'ika tai'(tam) (書きやすかった)

kak'i kumika tai'(tam) (書きやすかった)

kak'i gu'rika tai'(tam) (書きにくかった)

kak'i gu:ka tai'(tam) (書きにくかった)

kak'i ka:ka tai'(tam) (書きにくかった)

(5) 動詞－様子－過去

kak'i gu'rika tai'(tam) (書きそうであった)

▲ 尊敬・肯定・過去表現

(1) 動詞－尊敬－過去

kaka mai' tai'(tam) (お書きになった)

kaka mai du (お書きになった)

(2) 動詞－使役－尊敬－過去

kaka sa mai' tai'(tam) (書かせなされた)

ni si'misa mai' tai'(tam) (煮させなされた)

(3) 動詞－受身・可能－尊敬－過去

kaka i mai' tai'(tam) (書かれなされた)

(4) 動詞

願望	尊敬－過去
容易	
困難	

kak'i bus'ikara mai' tai'(tam) (お書きになりたかった)

kak'i ja:s'ikara mai' tai'(tam) (お書きになりやすかった)

kak'i kumikara mai' tai'(tam) (お書きになりやすかった)

kak'i gu'rikara mai' tai'(tam) (お書きになりにくかった)

kak'i gu:kara mai' tai'(tam) (お書きになりにくかった)

kak'i ka:kara mai' tai'(tam) (お書きになりにくかった)

kak'i ka:fu du ara mai' tai' (お書きになりにくかった)

(5) 動子－様子－尊敬－過去

kak'i ɡikara mai' tai' (tam)

(お書きになりそうだった)

kak'i ɡifu du ara mai' tai' (お書きになりそうだった)

▲ 普通・否定・過去表現

(1) 動詞－否定－過去

kaka da tam (書かなかった)

(2) 動詞－使役－否定－過去

kaka sa da tam (書かさなかった)

ni: si'mi da tam (煮させなかった)

(3) 動詞－受身・可能－否定－過去

kaka i da tam (書かれなかった)

(4) 動詞

願望	否定－過去
容易	
困難	

kak'i buffa ne: da tam (書きたくなかった)

kak'i jaffa ne: da tam (書きやすくなかった)

kak'i kumiffa ne: da tam (書きやすくなかった)

kak'i ɡuriffa ne: da tam (書きにくくなかった)

kak'i ɡu:ffa ne: da tam (書きにくくなかった)

kak'i ka:ffa ne: da tam (書きにくくなかった)

以上6例の場合はne: (ない)とda (ない)の二重否定で否定表現をなしている。

(5) 動詞－様子－否定－過去

kak'i ɡiffa ne: da tam (書きそうでなかった)

▲ 尊敬・否定・過去表現

(1) 動詞－尊敬－否定－過去

kaka ma da tam (お書きにならなかった)

(2) 動詞－使役－尊敬－否定－過去

kaka sa ma da tam (書かせなさらなかった)

ni: si'misa ma da tam (煮させなさらなかった)

kaka je: mme da tam (書かせなさらなかった)

(3) 動詞－受身・可能－尊敬－否定－過去

kaka i ma da tam (書かれなさらなかった)

(4) 動詞

願望	尊敬－否定－過去
容易	
困難	

kak'i buffa ne: ma da tam (お書きになりたくなかった)

kak'i jaffa ne: ma da tam (お書きになりやすくなかった)

kak'i kumiffa ne: ma da tam (お書きになりやすくなかった)

kak'i ɡuriffa ne: ma da tam (お書きになりにくくなかった)

kak'i ɡu:ffa ne: ma da tam (お書きになりにくくなかった)

kak'i ka:ffa ne: ma da tam (お書きになりにくくなかった)

(5) 動詞－様子－尊敬－否定－過去

kak'i ɡiffa ne: ma da tam (お書きになりそうでなかった)

むすび

以上記述してきたところをまとめると、大神

方言の助動詞の相互承接は次の通りになる。

動詞－使役 ($\begin{smallmatrix} s'i \\ s'imi'i \end{smallmatrix}$)－受身・可能 ($\begin{smallmatrix} i'i \\ rai'i \end{smallmatrix}$)

$\left[\begin{array}{l} \text{願望} (bus'ikam) \\ \text{容易} \left(\begin{array}{l} ja:s'ikam \\ kumikam \end{array} \right) \\ \text{困難} \left(\begin{array}{l} gurikam \\ gu:kam \\ ka:kam \end{array} \right) \end{array} \right] \text{－様子} \left(\begin{array}{l} g'ikam \\ busig'imunu \end{array} \right)$

－尊敬 ($ma'i$)－否定 ($\begin{smallmatrix} n \\ te:n \\ ne:n \end{smallmatrix}$)－過去 ($\begin{smallmatrix} tai' \\ du \end{smallmatrix}$)

末尾の「過去」から「尊敬」あたりまでのカテゴリーの関係を示すと、次の通りになる。

$\left. \begin{array}{l} \text{普通} \left\{ \begin{array}{l} \text{肯定} \\ \text{否定} \end{array} \right\} \\ \text{尊敬} \left\{ \begin{array}{l} \text{肯定} \\ \text{否定} \end{array} \right\} \end{array} \right\} \text{非過去} \\ \left. \begin{array}{l} \text{普通} \left\{ \begin{array}{l} \text{肯定} \\ \text{否定} \end{array} \right\} \\ \text{尊敬} \left\{ \begin{array}{l} \text{肯定} \\ \text{否定} \end{array} \right\} \end{array} \right\} \text{過去} \\ \left. \begin{array}{l} \text{普通} \left\{ \begin{array}{l} \text{肯定} \\ \text{否定} \end{array} \right\} \\ \text{尊敬} \left\{ \begin{array}{l} \text{肯定} \\ \text{否定} \end{array} \right\} \end{array} \right\} \text{終助詞又は文終止}$

助動詞の相互承接で奄美・沖縄方言と異なるところは、「様子」と「尊敬」の順序が逆になっていることと、「ていねい」表現がみとめられないということである。

※参照資料

奄美・沖縄方言との比較上、奄美・沖縄方言の「継続」「既存」に相当する形式、すなわち～u'i (～している)～a'i (～してある)が助動詞に接した用例を参照に示しておく。

1 kaki'i (書いている)
kake:i (書いてある)

kaki du a'i (書いてある)

kaki da:i (書いてある)

上記例でkaki du a'i→kaki da:i
となっていることはもちろんである。

2 mai (尊敬) に接した例

kaki ura mai (書いていっしゃる)

kaki du ara mai (お書きになってある)

kaka fi ura mai (書かせていっしゃる)

tataka fi ura mai (たたかせていっしゃる)

kaka i ura mai (書かれていっしゃる)

tataka i ura mai (たたかれていっしゃる)

3 n (否定) に接した例

kaki ura n (書いていない)

kaki ara n (書いてない)

kaki ura ma n (書いていっしらない)

kaki du ara ma n (お書きになってない)

kaka fe: ura ma n (書かせていっしらない)

kaka i ja ura ma n (書かれてはいっしらない)

4 tai'(tam) (過去) に接した例

kaki u tai'(tam) (書いていた)

kake: tai'(tam) (書いてあった)

kaki du a tai'(tam) (書いてあった)

kaki ura mai tai'(tam) (お書き

になっていた)

kaki du ara mai tai (tam) (お書きになってあった)

kaka i ura mai tai (書かれていらした)

kaki ura da tam (書いていなかった)

kaki ara da tam (書いてなかった)

kaki ura ma da tam (お書きになっていなかった)

kaki du ara ma da tam (お書きになってなかった)

以上のように、単語のレベルでは宮古方言でも、たとえば kaki i (書いている) kake : i (書いてある) 等と一語のようにみえるが、しかし、これらが助動詞に接した単語連結のレベルでは、これらは明確に動詞と u i (居る) a i (有る) とに分離する。

西原方言

西原方言の助動詞の相互承接は次の通りである。

1 動詞

kats i (書く)

2 s i (せる, 使役)

s i mi : (させる・しめる, 使役)

動詞の次に位置するのは「使役」の助動詞である。

kaka s i (書かせる)

kaka s i mi : (書かしめる)

3 i : (れる, 受身・可能)

「使役」の助動詞の次に位置するが「受身・可能」の助動詞である。

kaka i : (書かれる)

4 ju : s i (できる, 能力)

ju : s i は大沖方言では認められなかったが、当方言では用いられる。これは「受身・可能」の助動詞の次に位置する。

(ア) kats i ju : s i (書くことができる)

これまで述べてきた 1 ~ 4 までの配列順を示す用例は次の通り。

(イ) kaka ha i ju : s i (書かされること
ができる)

5 bus i kan (bus i kai, bus i munu)
(たい, 願望)

ja s i kan (ja s i kai, ja s i munu)
(やすい, 容易)

gu ri kan (gu ri kai, gu ri munu)
(にくい, 困難)

「能力」の助動詞の次に位置するのがこの 3 個の助動詞である。この 3 個の助動詞は大沖方言同様同列である。

kats i bus i kan (bus i kai, bus i munu) (書きたい)

kats i ja s i kan (ja s i kai, ja s i munu) (書きやすい)

kats i gu ri kan (gu ri kai, gu ri munu) (書きにくい)

6 gi kan (gi kai, gi munu) (そうだ
様子)

「願望」等の助動詞の次に位置するのが gi kan である。

- (7) *kats'i gikan* (*gikai, gimunu*)
(書きそうだ)

4～6までの助動詞の配列順を示す用例は次の通り。

- (1) *kats'i ju:s'i jas'i gikan* (書くことができやすそうである)
kats'i ju:s'i guri gikan (書くことができにくそうである)

7 *mai* (お～になる, 尊敬)

「様子」の助動詞の次に位置するのが「尊敬」を表わす助動詞である。

これまで記述してきた1～6までの諸形式はすべて普通表現形式であり、これらの諸形式を *mai* が承けると、尊敬表現形式が形成される。

以下に示すものは、これまで記述してきた1～6までの普通表現形式に対する尊敬表現形式である。

- (1) *kaka mai* (お書きになる)
(2) *kaka ha mai* (書かせなさる)
kaka s'imi mai (書かしめなさる)
(3) *kaka ira mai* (書かれなさる)
(4) *kats'i ju:ha mai* (お書きになれる)
(5) *kats'i bus'ikara mai* (お書きになりたい)
kats'i jas'ikara mai (お書きになりやすい)
kats'i gurikara mai (お書きになりにくい)
(6) *kats'i gikara mai* (お書きになりそうである)

この最後の(6)の用例は「様子」の助動詞の次に「尊敬」の助動詞が位置することを示している。

- 8 *n* (ない, 否定)
nja:n (ない, 否定)

「尊敬」の助動詞 *mai* の次に位置するのが「否定」の助動詞である。

これまで記述してきた1～7までの諸形式はすべて肯定表現形式であり、これらの諸形式を「否定」の助動詞が承けると、否定表現形式が成立する。

▲ 普通・否定表現

- (1) *kaka n* (書かない)
(2) *kaka ha n* (書かさない)
kaka s'imi n (書かしめない)
(3) *kaka i n* (書かれない)
(4) *kats'i ju:ha n* (書くことができない)
(5) *kats'i bus'ikara n* (書きたくない)
kats'i buffa nja:n (書きたくない)
kats'i jas'ikara n (書きやすくない)
kats'i gurikara n (書きにくくない)
(6) *kats'i gikara n* (書きそうでない)

▲ 尊敬・否定表現

- (1) *kaka ma n* (お書きにならない)
(2) *kaka ha ma n* (書かせなさらない)
kaka s'imi ma n (書かしめなさらない)
(3) *kaka ira ma n* (書かれなさらない)
(4) *kats'i ju:ha ma n* (お書きにならない)
(5) *kats'i bus'ikara ma n* (お書きになりたくない)

kats'i jas'ikara ma n (お書きになりやすい)

- (6) kats'i gikara ma n (お書きになりそうでない)

9 tai (tan) (た, 過去)

du (た, 過去)

「否定」の助動詞の次に位置するのが「過去」を表わす助動詞である。

これまで記述してきた1～8までの諸形式はすべて非過去表現形式である。これらの諸形式を「過去」の助動詞が承けると、過去表現形式が成立する。非過去・過去の対立はこのレベルで成立する。

▲ 普通・肯定・過去表現

- (1) kats'i tai (書いた)
kaki du (書いた)
- (2) kaka si' tai (書かせた)
kaka hi du (書かせた)
kaka si'mi tai (書かした)
kaka si'mi du (書かした)
- (3) kaka i tai (書かれた)
kaka i du (書かれた)
- (4) kats'i ju:s'i tai (書くことができた)
kats'i ju:hi du (書くことができた)
- (5) kats'i bus'ika tai (書きたかった)
kats'i bus'ikai du (書きたかった)
kats'i jas'ika tai (書きやすかった)
kats'i jas'ikai du (書きやすかった)
kats'i gurika tai (書きにくかった)

kats'i gurikai du (書きにくかった)

- (6) kats'i gika tai (書きそうだった)
kats'i gikai du (書きそうだった)

▲ 尊敬・肯定・過去表現

- (1) kaka ma tai (お書きになった)
kaka mai du (お書きになった)
- (2) kaka ha ma tai (書かせなされた)
kaka ha mai du (書かせなされた)
kaka si'mi ma tai (書かしめなされた)
kaka si'mi mai du (書かしめなされた)
- (3) kaka ira ma tai (書かれなされた)
kaka ira mai du (書かれなされた)
- (4) kats'i ju:ha ma tai (お書きできた)
kats'i ju:ha mai du (お書きできた)
- (5) kats'i bus'ikara ma tai (お書きになりたかった)
kats'i bus'ikara mai du (お書きになりたかった)
kats'i jas'ikara ma tai (お書きになりやすかった)
kats'i jas'ikara mai du (お書きになりやすかった)
kats'i gurikara ma tai (お書きになりにくかった)
kats'i gurikara mai du (お書きになりにくかった)
- (6) kats'i gikara ma tai (お書きになりそうだった)
kats'i gikara mai du (お書きになりそうだった)

▲ 普通・否定・過去表現

- (1) kaka ttan (書かなかった)
 (2) kaka ha ttan (書かさなかった)
 kaka s'imi ttan (書かしめなかった)
 (3) kaka i ttan (書かれなかった)
 (4) kats'i ju:ha ttan (書くことができなかった)
 (5) kats'i bus'ikara ttan (書きたくなかった)
 kats'i bus'iffa nja ttan (書きたくなかった)
 kats'i jas'ikara ttan (書きやすくなかった)
 kats'i gurikara ttan (書きにくくなかった)
 (6) kats'i gikara ttan (書きそうでなかった)

▲ 尊敬・否定・過去表現

- (1) kaka ma ttan (お書きにならなかった)
 (2) kaka ha ma ttan (書かせなさらなかった)
 kaka s'imi ma ttan (書かしめなさらなかった)
 (3) kaka ira ma ttan (書かれなさらなかった)
 (4) kats'i ju:ha ma ttan (お書きになれなかった)
 (5) kats'i bus'ikara ma ttan (お書きになりたくなかった)
 kats'i jas'ikara ma ttan (お書きになりやすくなかった)
 kats'i gurikara ma ttan (お

書きになりにくくなかった)

- (6) kats'i gikara ma ttan (お書きになりそうでなかった)

以上の例からもわかるように、西原方言では否定・過去表現は ttan となって促音を伴っている。これは形態的には t-tan と分析できるもので、大神方言等の ga tam から ga tam → ttan と変化したものであろう。なお、大神方言の ga は恐らく国語の打消の助動詞「ず」の系統の語形であろう。

むすび

上記述してきたところからもわかる通り、西原方言の助動詞の相互承接は、大神方言とほぼ同じく、次の通りになる。

動詞－使役 (s'i s'imi:i)－受身・可能 (i:)－

能力 (ju:s'i) $\left\{ \begin{array}{l} \text{願望 (bus'ikan)} \\ \text{容易 (jas'ikan)} \\ \text{困難 (gurikan)} \end{array} \right\}$ －

様子 (gikan)－尊敬 (mai)－否定 (n)

－過去 (tai du)

※参照資料

大神方言同様、～ui (～している)～ai (～してある) が助動詞に接した用例を示しておく。

- 1 kaki: ui (書いている)
 kaki: ai (書いてある)
 2 mai (尊敬) に接した例
 kaki: ura mai (お書きになっている)
 kaki: ara mai (お書きになってある)
 kaka s'imi ura mai (書かしめていらっしゃる)

3 n (否定) に接した例

kaki: ura n (書いていない)
 kaki: ara n (書いてない)
 kaki: ura ma n (書いていっ
 しゃらない)
 kaki: ara ma n (お書きになっ
 ていない)
 kaka s'imi ura ma n (書かして
 いらっしゃらない)

4 tai (過去) du (過去) に接した例

kaki: u tai (書いていた)
 kaki: ui du (書いていた)
 kaki: a tai (書いてあった)
 kaki: ai du (書いてあった)
 kaki: ura ma tai (お書きになっ
 ていた)
 kaki: ura mai du (お書きになっ

いた)

kaki: ara ma tai (お書きになっ
 った)
 kaki: ara mai du (お書きになっ
 った)
 kaka s'imi ura ma tai (書かしめ
 ていらした)
 kaka s'imi ura mai du (書かしめ
 ていらした)
 kaki: ura ttan (書いていなかった)
 kaki: ara ttan (書いてなかった)
 kaki: ura ma ttan (お書きになっ
 ていなかった)
 kaki: ara ma ttan (お書きになっ
 てなかった)
 kaka s'imi ura ma ttan (書かし
 めていらっしゃらなかった)

代名詞

大神方言の代名詞について述べる。大神方言
 で用いられている代名詞を示すと、第12表の通
 りになる。

一人称では単数に a, an, 複数に anta: が
 用いられる。単数の a, an は奈良時代の「あ
 あれ」に対応するものと解される。an は文中に
 おいて格助詞 u (を) に接すると anu, 係助詞

ja (は) に接すると ara: となる場合がある。
 a ɡa pera ɔ̌ di (私が行こう)
 a ɡa tura ɔ̌ di ira (私が取るよ)
 am mai ika ɔ̌ di ʃʃi ba vva mai
 ku: (私も行くから君も来い)
 karika: jatika: am mai as'i
 ɔ̌ du si' (あれぐらいなら私もできる)
 anu ba matai ɔ̌ du si' (私をば待って

くれ)

ara: bi: n (私は酔わない)
 ara: umanna ura te:n (私はこちら
 にはいない)
 anta: ɡa ja: ɔ̌ kai pera ɔ̌ di (私
 たちの家へ行こう)

なお、宮古の他の方言では1人称代名詞は次
 のようにあらわれる。

西里 ba (私) ban (私) banta (私たち)
 与那覇 ba (私) ban (私) banta: (私たち)
 池間 ba (私) ban (私)
 来間 ba (私) ban (私) banta: (私たち)
 水納 ba (私) ban (私) banta: (私たち)
 これらの単数形は奈良時代の「わ、われ」に対
 応するものである。

第 12 表 大 神 方 言 代 名 詞

事柄の種類 話手との関係		人	事物	場所	方向	関係	情 態
第一 人 称 (話 手)	第二 人 称 (聞 手)	an (私) a (私) anta:(私たち)					
		vva (君, あなた) vvata:(君たち) (あなた)たち					
第三人 称 (話手・聞手以外のもの)		uri (これ)	uri (これ)	uma (ここ)	umakai (ここへ)	unu (この)	anfinu(こんな) anfi (こう)
		urita:(これたち)	urita:(これら)	umata:(ここら)			
		uri (それ)	uri (それ)	uma (そこ)	umakai (そこへ)	unu (その)	anfinu(そんな) anfi (そう)
		urita: (それたち)	urita:(それら)	umata:(そこら)			
遠 称		kari (あれ) karita: (あれたち)	kari (あれ) karita:(あれら)	kama (あそこ) kamata: (あそこら)	kamakai (あそこへ)	kanu (あの)	kanfinu(あんな) kanfi (ああ)
不定 称		ta:(誰) ta:ta:(誰たち)	nti (どれ) nau (なに) nauti (なに)	nta (どこ)	ntakai (どちらへ)	naunu (どの)	naubafinu (どんな) naubafi (どう)

二人称では単数に *vva* , 複数に *vvata:* が用いられる。*vva*・*vvata:* は目上・同等・目下のどちらにも用いられる。いわゆる奄美・沖縄方言と異なり, 二人称において, 目上・同等・目下を語形でもって区別することをしない。用例は次の通り。

vva nta ŋkai (君はどこへ?)
vva kari ju: mai tajaka'i (君は彼より強い)
vva mai ka: te:n (君も買わない)
vva ga tura di (君が取るべきだ)
vva ika te:n (君は行かない)
vvata: mai ka: te:n (君たちも買わない)

他の宮古方言では二人称は次のようにあらわれる。

西里 *vva* (君, あなた)
vvata (君たち, あなたたち)
 与那覇 *vva* (君, あなた)
vvata: (君たち, あなたたち)
 池間 *vva* (君, あなた)
 来間 *vva* (君, あなた)
 水納 *vva* (君, あなた)
vvata: (君たち, あなたたち)

三人称では近称と中称を区別しない。すなわち, 近称と中称を同語形であらわす。

uri nfi patarak'i p'ita mi: n
 (このように働く人はいない)
uri ga du ika ti: a'iri (それが行くと言った)

遠称では *kari* (彼, あれ) *karita:* (彼たち, あれたち) が用いられる。

kari nfi patarak'i p'ita mi: n
 (彼のように働く人はいない)
kare: s'ii s'iga du narafe:

fi: n (彼は知っていながら教えてはくれない)

kari ga du ika ti: a'iri (彼が行くと言った)

kari ga: tafuke: nuku'i gumata
 (彼だけが残るのか)

kare: ja: nna mi: n pe:m (彼は家にいないかしら)

不定称には *ta:* (誰) *ta:ta:* (誰たち) が用いられる。

ure: ta: ga munu (これに誰のものか)

他の宮古方言で, 三人称は次のようにあらわれる。

西里	近称	<i>kui</i> (これ)
	中称	<i>ui</i> (それ)
	遠称	<i>kai</i> (彼, あれ) <i>kaita</i> (彼たち, あれたち)
	不定称	<i>ta:</i> または <i>to:</i> (誰)
与那覇	近称	<i>kuri</i> (これ) <i>kurita:</i> (これたち)
	中称	<i>uri</i> (それ) <i>urita:</i> (それたち)
	遠称	<i>kari</i> (彼, あれ) <i>karita:</i> (彼たち, あれたち)
	不定称	<i>ta:</i> (誰)
来間	近称	<i>kuri</i> (これ) <i>kurita:</i> (これたち)
	中称	<i>uri</i> (それ) <i>urita:</i> (それたち)
	遠称	<i>kari</i> (彼, あれ) <i>karita:</i> (彼たち, あれたち)

これらの方言では近称と中称は *kuri*, *uri* 等で区別されている。これらの方言の代名詞体系と大神方言のそれとどちらが古いか一概には言えないが, 西里方言等であらわれる近称の

kuri (これ) は比較的新しいものではなからうか。いわゆる宮古方言において近称と中称を区別するようになったのは比較的新しいのではなからうか。

指示代名詞は第7表に示してある通りである。近称と中称を区別しないのは人称代名詞と同様である。以下用例を示そう。

事物

uri mai kari mai mna dʒo:to:
(これもあれもみんなよい)

karika: jatika: am mai as'i
du s'i (あれぐらいなら私もできる)
in tu maju tu nti ga du
tajakai ka (犬と猫とどちらが強い)
ure: nau ka ira (これはなにかしら)
uri pe:m kari pe:m nti ka (こ
れかしらあれかしらどれか)

nti nta n du a'i (どこどこにあるの)

場所

uma nna a'i du s'i (ここにある)
uma nna mi: n (ここにいない)
uma n du a'i tai (ここにあった)
kama n a'i sa (あそこにあるよ)
nti nta n du a'i (どこどこにあるの)

方向

uma ʔkai du ki'si tai (ここへぞ来
た)
uma ʔkai ku: (ここへ来い)
kama ʔkai iki' tika 'iai ssa:
(あそこへ行ったら叱られるぞ)
vva nta ʔkai (君はどこへ?)

関係

unu i'u naunu pusa baka'i du
as'i ka ira: (この魚はどのぐらいばかり
するのかしら)

kanu pi'ta: ma:nu aparakikam
pa'gi (あの人は大変美しいはず)
kanu mmapi upuka tai (あの、もっ
と大きかったでしょう)

情態

naubasi asi ba mai vva ga
si:riti (どうしようが君の勝手だ)

因に、他の宮古方言の指示代名詞を示すと、
次の通りになる。

▲西里

事物 kui (これ) kuita: (これら)
ui (それ) uita: (それら)
kai (あれ) kaita: (あれら)
idʒi (どれ) idʒita: (どれら)
場所 kuma (ここ) kumata: (ここら)
uma (そこ) umata: (そこら)
kama (あそこ) kamata: (あそこら)

{ idza (どこ) idzata: (どこら)
ndza (どこ) ndzata: (どこら)

方向 kuma ʔkai (ここへ)
uma ʔkai (そこへ)
kama ʔkai (あそこへ)
ndza ʔkai (どこへ)

関係 kunu (この)
unu (その)
kanu (あの)
ndʒi (どの)

情態 kantʃi:nu kantʃi:
(こんな) (こう)
antʃi:nu antʃi:
(そんな) (そう)
antʃi:nu antʃi:
(あんな) (あゝ)
no:ʃi:nu (どんな) no:basi (どう)

▲与那覇

事物	kuri (これ) kurita: (これら) uri (それ) urita: (それら) kari (あれ) karita: (あれら) ndʒi (どれ) ndʒita: (どれら)	関係	ndʒa ʔke: (どこへ) kunu (この) unu (その) kanu (あの) ndʒinu (どの)
場所	kuma (ここ) kumata: (ここら) uma (そこ) umata: (そこら) kama (あそこ) kamata: (あそこら) ndza (どこ) ndzata: (どこら)	情態	kantʃinu kantʃi: (こんな) (こう) antʃinu antʃi: (そんな) (そう) antʃinu antʃi: (あんな) (ああ) no:ʃinu no:ʃi: (どんな) (どう)
方向	kuma ʔkai (ここへ) uma ʔkai (そこへ) kama ʔkai (あそこへ) ndza ʔkai (どこへ)		
関係	kunu (この) unu (その) kanu (あの) ndʒi (どの)		
情態	kanʃinu (こんな) kanʃi: (こう) anʃinu (そんな) anʃi: (そう) anʃinu (あんな) anʃi: (ああ) no:bʃinu (どんな) no:bʃi: (どう)		

▲来間

事物	kuri (これ) kurita: (これら) uri (それ) urita: (それら) kari (あれ) karita: (あれら) ndʒi (どれ) ndʒita: (どれら)	関係	ndʒa ʔke: (どこへ) kunu (この) unu (その) kanu (あの) ndanu (どの)
場所	kuma (ここ) kumata: (ここら) uma (そこ) umata: (そこら) kama (あそこ) kamata: (あそこら) ndʒa (どこ) ndʒata: (どこら)	情態	kunʃinu (こんな) unʃinu (そんな) kanʃinu (あんな) no:bʃinu (どんな)
方向	kuma ʔke: (ここへ) uma ʔke: (そこへ) kama ʔke: (あそこへ)		

▲水納

事物	kure: (これ) ure: (それ) kare: (あれ) ndju (どれ)	場所	kuma (ここ) uma (そこ) kama (あそこ) nda (どこ)
方向	kuma ʔkai (ここへ) uma ʔkai (そこへ) kama ʔkai (あそこへ) nda ʔkai (どこへ)		

▲大浦

事物	kui (これ) kuita: (これら)
	ui (それ) uita: (それら)
	kai (あれ) kaita: (あれら)
	ndʒi (どれ) ndʒita: (どれら)
場所	kuma (ここ) kumana: (ここら)
	uma (そこ) umana: (そこら)
	kama (あそこ) kamana: (あそこら)
	ndza (どこ) ndzana: (どこら)
方向	kuma nu kata (ここへ)
	uma nu kata (そこへ)
	kama nu kata (あそこへ)
	ndza nu kata (どこへ)
関係	kunu (この)
	unu (その)
	kanu (あの)
	ndʒi (どの)
情態	antfinu (こんな) antfi (こう)
	antfinu (そんな) antfi (そう)
	kantfinu (あんな) kantfi (あゝ)
	ndʒu: (どんな)
	no: basinu (どんな) no: bafi (どう)

以上記述してきたところからもわかる通り、これらの方言の指示代名詞においても近称と中称は語形上区別を保っている。但し、「情態」の代名詞では次のように、方言によって中称と遠称が語形上の区別を示さなかったり、あるいは近称と中称がその区別を示さなかったりでまちまちである。

	西 里	与那覇
近称	kantfi: nu	kanfinu
中称	{ antfi: nu }	{ anfinu }
遠称		

来 間

大 浦

近称	kantfinu	}	antfinu
中称	antfinu		
遠称			kantfinu

大 神

水 納

近称	{ anfinu }	kunfinu
中称		unfinu
遠称	kanfinu	kanfinu

親族名称と人称代名詞

大神方言における親族名称と人称代名詞およびその他との関係を示すと、第13表の通りとなる。

親族名称についてみると、(曾祖父・曾祖母)を表わす語形は(祖父・祖母)を表わす語形にkapa-がついてきている。(祖父・祖母)はupu'ia (大親)・upumma (大阿母)であらわされる。(父・母)はia (親)・mma (阿母)であらわされる。(伯父) (叔父)は区別なく、共にbudaであらわされる。同様に(伯母) (叔母)も区別なく、共にbubaであらわされる。

因に、(祖父)から(叔母)までを西里・与那覇方言と比較してみると、次の通りになる。

	大神	西 里	与那覇
祖父	upu'ia	ʃu:	ʃu:
祖母	upumma	pa:mma	mma
父	ia	uja	uja
母	mma	anna	anna
両親	ia	ujammaasa	asamma
伯父	{ buda }	upuuja	budza
叔父		budzagama	budzagama

	大神	西里	与那覇
伯母	$\left. \begin{array}{l} \text{伯母} \\ \text{叔母} \end{array} \right\} \text{buba}$	upuanna	buba
叔母		bubagama	bubagama

まず、大神方言の（祖父・祖母）をあらわす語の語構成と西里方言の（伯父・伯母）をあらわす語の語構成がほぼ一致していることは興味深い。すなわち、大神の（祖父）西里の（伯父）は「大きい親」を意味する語形であり、また、（祖母）と（伯母）は「大きい母」を意味する語形である。

大神の（母）をあらわすmmaが西里・与那覇方言では（祖母）をあらわす語形（またはその構成部分）になっている。西里・与那覇方言の（祖父）をあらわすɟu:（主）は比較的新しい語形ではなかろうか。

（両親）は大神では（父）をあらわすi'aであらわされるが、西里ではujammaasa（親阿母アサ）、与那覇ではasamma（アサ阿母）となっている。西里・与那覇方言の語形に含まれているasaは恐らく「ヲサ（長）」と関係があらう。

西里・与那覇方言では（伯父母）と（叔父母）は区別しているが、大神方言では区別しない。

大神方言では（甥）と（姪）は共にmii'（姪甥）であらわされ区別しない。西里・与那覇方言でも、それぞれmiu'i（姪甥）・mju:i'（姪甥）であらわされるが、西里方言では特に区別したいときはbikimiu'i（男姪甥、甥のこと）midunmiu'i（女姪甥、姪のこと）という場合もある。

大神方言では（兄姉）は目上に入っていない。これは「はい」という返事のしかたですぐわかる。いわゆる同等以下に用いるn:, na: という語形が用いられるからである。

人称代名詞二人称のvvaは目上にも用いるという報告を受けているので、親族名称と共にbuba（伯母・叔母）から上の人にも用いられるものと思われる。

第 1 3 表

	親族名称	総 称	呼 称	人 称 代 名 詞		「はい」という返事	
				一 人 称	二 人 称	呼ばれた時	承諾の時
曾 祖 父	kapaupuia	ia	↓	↓	↓	↓	↓
曾 祖 母	kapaupumma		↓	↓	↓	↓	↓
祖 父	upuia		↓	↓	↓	↓	↓
祖 母	upumma		↓	↓	↓	↓	↓
父	ia		↓	↓	↓	↓	↓
母	mna		↓	↓	↓	↓	↓
伯(叔)父	buda	kjo: dai	↑	↑	↑	↑	↑
伯(叔)母	buba		↑	↑	↑	↑	↑
兄	suda		↑	↑	↑	↑	↑
姉	ani		↑	↑	↑	↑	↑
夫(ego)	bikidum		↑	↑	↑	↑	↑
妻	midum		↑	↑	↑	↑	↑
弟 妹	ututu		↑	↑	↑	↑	↑
甥 姪	mi i		↑	↑	↑	↑	↑
長 男	tfakusi		↑	↑	↑	↑	↑
次 男	ginan		↑	↑	↑	↑	↑
三 男	sannan		↑	↑	↑	↑	↑
長 女	animidunfa		↑	↑	↑	↑	↑
次 女	ututu		↑	↑	↑	↑	↑
末 子	nasiki se		↑	↑	↑	↑	↑
孫	mma ga		↑	↑	↑	↑	↑
曾 孫	matamma ga		↑	↑	↑	↑	↑
玄 孫	mi imma ga		↑	↑	↑	↑	↑

形容詞の活用

1. 語形変化の形式

大神方言形容詞の言い切りの形には、三つの形式が認められ、例えば「赤い」を意味する語は、〔akamunu〕, 〔akakaï〕, 〔akakam〕が使用される(注1)。この内〔akamunu〕は、(赤)+(物)の形で、いわゆる形容詞の語幹が直接体言を修飾する形式であり、大神方言においては、普通にこの形式が言い切りの形として用いられる。一方〔akakaï〕と〔akakam〕は、いずれも語幹に「ク」がつき、さらに「アリ」がついた形である。このことから大神方言も他の宮古方言同様、形容詞の活用形は「クアリ」系に属し、沖縄本島方言や八重山方言などの「サアリ」系とは構造を異にする(注2)。

さて、ここで今までに調査した形式の中から、活用形と思われる形を〔akakaï〕(赤い)を選んで示すことにしよう。

〔pana: akakarada uraba mai
kitʃiŋi〕(花は赤くなくてもきれいだ)
〔akafu gu nai〕(赤くなる) 〔kanu
panaka:ja akakaïsauna〕(あの花は赤そうだ)
〔akaffa ne:n tta〕(赤くはないってさ)
〔akakari site: aUkari site:
ti: gu asï〕(赤かったり青かったりする)
〔pane: akakataï〕(羽は赤かった)
〔akakaï tta〕(赤いってさ) 〔aŋa
mi:riŋa mai akakam〕(私が見ても赤い!)
〔ssu kabï n akakaï ŋi: ʃi: kakï〕
(白い紙に赤い字で書く) 〔akakariba gu
tumijasïkaï〕(赤ければ捜しやすい)
〔akakatika: kifite:n〕(赤かったら着けない)
〔akakari:ri tu sïkirain〕(赤い

ので差し上げられない)

これらの形式と、他の形容詞のそれとを比較検討してみると、およそ次の形を大神方言の形容詞の活用形として認めることができる。

1. 未然形 akakara
2. 連用形 1 akafu
3. 連用形 2 akakaï
4. 提示形 akaffa
5. 接続形 akakari
6. 過去形 akaka
7. 終止形 1 akakaï
8. 終止形 2 akakam
9. 連体形 akakaï
10. 条件形 1 akakari
11. 条件形 2 akaka
12. 条件形 3 akakari:ri

なお、各活用形の名称は動詞の活用形も参考にしながら示したが、それらはあくまでも便宜的なものであり、それぞれの活用形の特徴的な用法を、部分的に示したにすぎない。

注1 その外、宮古方言の言い切りの形には、〔aka:aka〕, 〔aka:nu〕などが用いられる。例えば、上野村野原方言では〔tida: aka: aka〕(太陽は赤い) 〔kunu pana: aka:nu〕(この花は赤い)のように使う。

さらに、平良市下里方言や久松方言では、〔akandza〕も用いられているが、これらの形が意味的にどう違うのか明確ではない。

注2 『琉球先島方言の総合的研究』(平山輝男, 明治書院)によれば、宮古方言の中でも多良間方言・水納方言は「サアリ」系に属

するようである。

2. 活用体形

ここでは、前記1で認めた活用形がどのような体系を示すのかを記述する。

大神方言でも形容詞の活用形の構造は、動詞同様に「語幹」＋「語尾」という二つの要素からなる。いうまでもなく語幹は活用形の中心的意味を担う部分であり、語尾は文法的意味を有する部分である。

今、大神方言形容詞の活用表を示すと、第14表のとおりである。

ところで、「サフリ」系の形容詞では方言によってはク活用とシク活用の区別がある。例えば、奄美大島の湯湾方言では、「高い」，「涼しい」はそれぞれ[ta:sa:n],[sida:fa:n]であり、語尾が「-sa:N」であるか「-fa:N」かによって区別を保っている（注3）。伊江島方言でも、これと同様なことがいえるようである（注4）。

一方、「クアリ」系の形容詞においては、これまでク活用とシク活用とは区別せずに記述されるのが普通であった。しかし、大神方言などでは、この二つを区別して示した方がよいと思われる（注5）。ちなみに、「赤い」と「涼しい」を例にとって示すと、まず連用形1と提示形では、つぎのように同一の語尾があらわれる。

	「赤い」	「涼しい」
連用形1	aka-fu	sida:-fu
提示形	aka-ffa	sida:-ffa

しかし、その他の活用形では、これらは違った語尾をとる（注6）。

	「赤い」	「涼しい」
未然形	aka-kara	sida:-sika
接続形	aka-kari	sida:-sika
過去形	aka-ka	sida:-sika

以上のことから、ここでは一応、ク活用とシク活用をわけて考えることにした。

注3 『琉球の方言』一奄美大島宇検村湯湾方言一（法政大学沖縄文化研究所）

注4 「琉球方言概説」（仲宗根政善、『方言学講座』第四巻）

注5 内間直仁氏は、「沖縄の方言」（『伝統と現代』45号）の中で大神方言の形容詞を、ク活用とシク活用にわけて、記述しておられる。

注6 平良市久松方言，上野村野原・宮国方言，および、下地町与那覇方言などにおいても、このような現象が見られる。

3. 活用形

つぎに各活用形の意義，職能，および接辞などについて、用例を示す。

3.1 未然形

ba（ば）がついて仮定条件を表わしたり，ga（ず），gaka:（～なかったら）などがつく。

ma:nu akakaraba mai gami（あまり赤くなくてもダメだ），

mipana: akakaraga uriha gu dzo:to:（顔は赤くない方が良い），

sida:sikaragaka: nivvain（涼しくなかったら眠れない），

sida:sikarafi fi:samati（涼しくして下さい）

3.2 連用形1

用言，および助詞の te:n（さえ），mai（も）gu（ぞ）などに接する。

mi:ta nu akafu na:itika: fa:gi（実が赤くなったら食べよう）

akafu te:n jatika: nauhafi nu

第 14 表 大神方言形容詞の活用表

分 類			語 例	活用 形 語幹	1 未 然 形	2 連用形1	3 連用形2	4 提 示 形	5 接 続 形	6 過 去 形	7 終止形1	8 終止形2	9 連 体 形	10 条件形 1	11 条件形 2	12 条件形 3	
Ⅰ	1	1	赤 い	aka	kara	fu	kaï	ffa	kari	ka	kaï	kam	kaï	kari	ka	kari:ri	
		2	早 い	pe:	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
		3	寒 い	pi fi	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
		4	軽 い	kaï	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
		5	大 き い	UpU	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
		6	弱 い	jo:	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
	2	1	煙 い	kiy	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
		2	痛 い	jam	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
Ⅱ		1	涼 しい	sïda:	sïkara	"	sïkaï	"	sïkari	sïka	sïkaï	sïkam	sïkaï	sïkari	sïka	sïkari:ri	
		2	恐 しい	uturu	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
		3	快 い	kïme:	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
後接する主な接続					da (ず) ba (ば)	naï (なる)	sauna (そうだ) busïkam (ようだ)	ne:n (ない)	fiti (して)	taï (た)	tta (ってさ) sa (よ)	tta (ってさ) ira (ね) go: (ぞ)		ba (ば)	tika: (たら)	ba (ば)	

kaβiː jaraba mai muti kuː (赤くさえあれば、
 どのような紙でも持って来なさい)

ssufu mai akafu mai neːn (白くも赤くもない)

kunu panakaːja akafu du ai (この花は赤くぞある)

sidaːfu nai (涼しくなる)

3.3 連用形2

助動詞の sauna (そうだ), busikam (ようだ) などが接続する。

kanu panakaːja akakaːsauna (あの花は赤そうだ)

aŋa karaŋiː nu akakaːbusikam (私の髪の方が赤いようだ)

kama nu du sidaːsauna (あそこが涼しそうだ)

3.4 提示形

連用形1の形に係助詞 ja (は) の融合したものである。

akaffa neːnniba tuːtikaː gami (赤くはないから取ったらダメだ)

takanoː sidaːffa neːn (高野は涼しくはない)

3.5 接続形

単独で文を中止したり, fiti (して) がついて接続の意味を表わす。また係助詞の ja (は) が接続する。

kunu panaː akakari, kanu panaː ssukam (この花は赤くて、あの花は白い)

fukisa akakari fiti miːja ffuː ffu uː (口は赤くして目は黒い)

akakarija aUkarija siː uː (赤かったり青かったりする)

uŋamma sidaːsikiari fiti, takanoː akikam (大神は涼しくして、高野は暑い)

sidaːsikiarija akikarija siː uː (涼しかったり暑かったりする)

なお、この形が過去の意味を表わす場合がある。

kinu ŋameː akakari du (昨日までは赤かった)

この用法は動詞にもみられ、しかも他の宮古方言にも一般的に現われる。その場合、語尾が akakariː のように少々伸びるのが普通である。

3.6 過去形

助動詞 tai (た) がついて過去の意味を表わす。前記した形がわりと近い過去を表わすのに対して、この形は遠い過去を示すようである。

akakatai kinna jarifu du nariː uː (赤かった着物は古くなっている)

paneː akakatai (羽は赤かった)

kuma nu du sidaːsikatatai (ここが涼しかった)

3.7 終止形1

それ自身で文を終止したり, tta (ってさ), sa (よ) などがつく。

kureːaUkari fiti ureː akakai (これは青くてそれは赤い)

akakai tta (赤いってさ)

kuja akakai sa (ほら赤いよ)

sidaːsikai tiː du aːriː tai (涼しうと言っていた)

なお、この形は言い切りの形としては出にくい面がある。

3.8 終止形2

文を終止したり, tta (ってさ), ira (ね), goː (ぞ) などがつく。終止形1に比べて強調の意味がある。

akakisa akakam (血は赤い。！)

maːn tiː akakam tta (本当に赤いってさ)

さ。／)

tida: akakam ira (太陽は赤いね。／)
akakam ti du a'iri (赤い。／と言った)
k'inu ju: ki:ja si'da:s'ikam do:
(昨日より今日は涼しいぞ。／)

3.9 連体形

体言に接したり、係助詞 du (ぞ) の結びとなる。

akakai' panau ibi: (赤い花を植えよう)
anta ga pata nu ga mi du akakai' (私

達の旗の方がぞ赤い)

si'da:s'ikai' tuke: nna a:ra n asiba
(涼しい時には外で遊ぼう)

ki: nu du si'da:s'ikai' gara (今日が
涼しいでしょう?)

3.10 条件形 1

ba (ば)がついて、確定条件を表わす(注7)。
mme pi:maka: sup'uki' nu akakari ba
du ka'igikai' (もう少し帯が赤ければきれい
だ)

si'da:s'ikari ba du niyjas'ikai' (涼し
ければ、眠りやすい)

3.11 条件形 2

tika: (たら) がついて条件の意味を表わす。
akakatika: kifite:n (赤かったら、着
けない)

akakatika: mi:jas'ikam (赤かったら、
見やすい。／)

mainiki' si'da:s'ikatika: dso:to:
(毎日涼しかったらいい)

3.12 条件形 3

動詞 u'i (居る) の融合した形である(注8)。
同じく条件の意を表わす。

kunu pana: akakari:ri ba du
s'ikirain (この花は赤いので、飾ることがで

きない)

si'da:s'ikari:ri ba du si'ke:s'ijas'ikam
(涼しい状態であれば、走りやすい)

注7 下里・久松方言などでは、条件形に ja
がついた形, akakarja: の形もみられる。

takakarja: mai turain (高くても取れ
ない)

注8 形容詞の連用形に u'i (居る) が融合し
ているのは、宮古方言でも今のところ大神方
言のみである。

4. 活用の種類

大神方言の形容詞は、まず、語形替変の形式
に注目すると、大きく I・II 類に分類できる。
これらを区別する特徴は、連用形 1 と提示形を
のぞく全ての語尾において顕著である。

たとえば、終止形では I 類が kai', kam であり、
II 類では s'ika'i, s'ikam となっている。I 類は、
さらに 1 と 2 に分類される。この区別は、不変
化部分の末尾音の違いによる分類である。1 は
末尾音が母音で終る形容詞を示し、2 は子音で
終る形容詞を示す。1 は母音の違いによって、
さらに 1～6 に分類され、2 は 1～2 に分類さ
れる。一方、II 類の形容詞の末尾音は母音のみ
で終り、それぞれ 1～3 に分類できる。

なお、I 類は国語のク活用の形容詞に相当し、
II 類は国語のシク活用の形容詞に相当する。

5. 形容詞の語例

つぎに、今回蒐集した形容詞の語例を、4 の
分類に従って示す。

[kai'] の類

I・1・1 語幹末尾音が a 母音

akaka'i (赤い), ydaka'i (太い, 厚い)
amaka'i (塩けが薄い), ak'ima'ka'i (甘い)

asakaï (浅い), aUffakaï (生臭い)
 akakaï (明るい), arakaï (荒い)
 avvakaï (油っこい), pantakaï (忙しい)
 ssakaï (薄い), su:takaï (うらやましい)
 katakaï (濃い), karakaï (辛い)
 kitsikaunakaï (いたずらな),
 ka:kaï (きつい), kUpakaï (固い)
 kumakaï (細かい), ffakaï (暗い)
 si:katakaï (きたない)
 pi:satakaï (平べったい),
 ffumatakaï (便がしたい状態)
 fi:ba:kaï (狭い), sukarakaï (塩辛い)
 su:dzakaï (羨ましい), takakaï (高い)
 kiki:pa:kaï (元気な), na:ga:kaï (長い)
 napitakaï (すべっこい),
 niytakaï (眠い), nukakaï (遅い)
 upu:sakaï (多い), janakaï (悪い)
 ba:ta:ka:kaï (満腹な状態)
 ba:kakaï (若い), pi(:)makaï (少ない)
 mai:fukakaï (利口な), mi:ffakaï (憎い)
 muttsakaï (粘っこい)
 ja:rakaï (柔らかい),
 japakaï (軟らかい), ju:ga:kaï (曲った)
 ffakaï (臭い), mmakaï (おいしい)

I・1・2 語幹末尾音が e 母音

pe:kaï (早い), mipe:kaï (素早い)
 ute:kaï (遠い)

I・1・3 語幹末尾音が i 母音

ikekara:ga:kaï (おかしい)
 wa:kuna:ga:kaï (厚かましい)
 kit:fi:ga:kaï (きれいな)
 apa:ra:ga:kaï (美しい), aUmikaï (憶病な)
 imikaï (小さい), i:ba:ri:ga:kaï (生意気な)
 su:ra:si:ga:kaï (勇しい)
 kiffa:si:ga:kaï (えらそうな)

umuffikaï (おもしろい)
 ujakikaï (富んだ), ka:ga:kaï (美しい)
 pau:ri:kaï (乱暴な), pu:ka:ri:kaï (きつい)
 pi:fi:kaï (寒い), ki:ni:ga:kaï (雄々しい)
 uka:si:ga:kaï (すばらしい)
 ki:muka:ga:kaï (心がやさしい)
 pa:i:ku:ri:kaï (手が早い), pa:u:ti:kaï (にぶい)
 ni:ffarikaï (御飯などのよわたた状態)
 pi:nna:ga:kaï (ふしぎな), pu:ri:ga:kaï (愚かな)
 maikaï (近い), mi:tsu:fa:ki:kaï (見苦しい)
 ja:ri:kaï (古い), ja:kaï (瘦せた)
 ja:ga:u:mi:kaï (大変な), ja:vvi:kaï (気が荒い)
 ndzi:ga:kaï (醜い)

I・1・4 語幹末尾音が i 母音

ak:kaï (熱い, 暑い), ik:kaï (元気な)
 kana:kaï (謹勉な), ka:kaï (軽い)
 si:pu:ta:kaï (濡れて気持ち悪い状態)
 su:ru:mi:ki:kaï (清けつな)
 ka:ka:mi:tsu:kaï (そそっかしい)
 ga:kaï (だるい), ta:ki:kaï (良く切れる状態)
 ba:kaï (悪い), mi:kaï (新しい)
 ja:si:kaï (安い), ga:ga:kaï (けちくさい)

I・1・5 語幹末尾音が u, U 母音

aUkaï (青い), UpUkaï (大きい)
 undzu:kaï (運の強い)
 umukutukaï (かしこい), kaukaï (痒い)
 ka:taUkaï (風が強い状態)
 ga:dzu:kaï (我が強い)
 ffukaï (黒い), ga:ukaï (良い)
 fi:ga:kukaï (四角い), ssukaï (白い)
 pi:ki:UrUkaï (冷たい), a:ja:pi:ga:UrUkaï (ぬるい)
 pa:si:kaukaï (痒くて気持ちが悪い)
 pi:sUkaï (広い), ma:ru:kaï (短い)
 ma:kUkaï (丸い), ma:tu:kaï (真っ直ぐな)
 ju:ru:kaï (ゆるい), tsu:kaï (強い)

pakauka'i (こわい) nufuka'i (ぬくい)

ntauka'i (口惜しい)

I・1・6 語幹末尾音が o 母音

jo:ka'i (弱い)

I・2・1 語幹末尾音が v 子音

kiyuka'i (煙い), suyuka'i (すっぱい)

iyuka'i (重い),

I・2・2 語幹末尾音が m 子音

jamka'i (痛い), simka'i (しみて痛い)

kimujamka'i (悩ましい)

tasikaramka'i (気のきかない)

[sika'i] の類

II・1 語幹末尾音が a 母音

uka:sika'i (こわい)

kasamasika'i (うるさい)

umuja:sika'i (和やかな状態)

atarasika'i (かわいい)

kamarasika'i (悲しい)

kabasaika'i (芳しい)

fuge:masika'i (きびしい)

sidge:sika'i (涼しい)

vve:masika'i (羨ましい)

kimtara:sika'i (痛ましい)

natsikasika'i (懐かしい)

pakikasika'i (恥かしい)

pi:umasika'i (おかしい)

hakasika'i (こっけいな), pukarasika'i (嬉しい)

mutsikasika'i (難しい), ja:sika'i (ひもじい)

ogjamasika'i (やかましい)

II・2 語幹末尾音が u 母音

uturusika'i (恐しい)

II・3 語幹末尾音が e 母音

kime:sika'i (快い)

me:sika'i (安らかな状態)

参考文献

平山輝男・大島一郎・中本正智『琉球方言の総合的研究』

平山輝男・大島一郎・中本正智『琉球先島方言の総合的研究』

鈴木一彦・林巨樹編集『品詞別・日本文法講座』4, 形容詞・形容動詞

仲宗根政善「琉球方言概説」(『方言学講座』第4巻)

中本正智『琉球方言音韻の研究』
法政大学沖縄文化研究所『琉球の方言』1975,
1976,

助 詞

以下の調査は1977年2月12日狩俣秀雄
(1925年生) 狩俣千代(1928年生)氏
より行ったものである。

ʔa:raŋkai idafi 外へ出なさい
minakaU paUki 庭を 掃け
tʃa: numi 茶 飲め
ŋgɛkɪsamati おあがりなさい
kuri: mi:ru これ 見なさい
panaU turi 花を 取れ
ki:ju puri 木を 掘りなさい
ammo pari 網を 張りなさい
am <網> . kam <蟹>
kammu turi 蟹を 取れ
pariU katiru 畑を 耕す
funiU: fai みかんを 食べる
ʔissiː jaŋkɪru 石を 投げる
isi <石> . meju <猫>
meju kau 猫を 飼う
taufu kfi 豆腐 作る
kaɪmataŋkai ikattɪsse: mati:ri
狩俣に 行くから 待っていないさい
piʃikariɓa kʲɪnnu kiʃɪru
寒いから 着物を 着なさい
ikima 池間, siːmakʲi 島尻
me:ku 宮古, buːranu sakʲi 保良の崎
pʰisara 平良, mmna 皆
upukati jarɪɓa ki:ja
大 風 だから 今日は
funie: idasain
船は 出せぬ
imimam 小波, upunam 大波,
naŋui うねり, su:ti 潮流,
su:tinuɗu tsu:kaɪ 潮流が強い。

ki:ja aŋaɗu itʃiɓam pe:ʃi ukitaɪ
今日は 私が 一番 早く ^(uki) 起きた
uvaŋa iŋiːtika: ammai ma:taki ikadi
君が 行くなら 私も 一緒に 行く
josioŋaɗo anʃi auri:ɪ
良雄が そう 言っていた
kanuja:ja antaŋa ja:mutu
あの家は 私の 本家
ure: ta:ŋa munu これは 誰の もの
buɗu:ɪ mi:ika 踊 見に 行こう
karɪnʃi patarakʲi pʰita: mi:n
彼のように 働く 人は いない
kare: ʃi:riʃi:ɗu anunna nara:ʃan
彼は 知っているが 私には 教えない
pe:pe: tuːsuŋa tama
早く 取る方 のものだ
ki:nu suraŋɗu pananu sakiː
木の 枝に 花の 咲く
ikimanu siːma 池間の島
uŋamnu siːma 大神の島
siːmakʲinu siːma 島尻の島
kamman mi:raɪju muna: nau
向こうに 見える 物は 何
naurare:
何か
mmaŋaɗu ikiʃiti ku:titi aʲri:ta:U
母さんが 行って 来いと 言っていた
vvaŋa aʲri:U munʲa purafɪɗu umuiU
お前が言うのは うそと思うよ
mita:nu utsʲinu tafke: pakʲi
三人の うちの 一人 だはず
kanu pʰitunu ʲa jamɪɗu: pakʲiju
あの 人の 親は 病気 だはずよ

pe'ĩnu p'ĩkĩgkai taŋke:ri

針の 孔に 通してくれ

antaŋa mmaŋaŋu k'ĩ

私の 母さんが 来る

s'ĩkamau pak'imi u 仕事を はじめる

naifiteĩ sauk'ĩĩ ass'ĩ

縫い物してから掃除をなさい

pe:ĩmu はっきりしない言葉

ikaŋipe:ĩm ikate:mpe:ĩm ti:ŋu

行くとか 行かんとかと

a'ĩri:taĩ

話していた

vva: itanu お前 どのか

ara: maine:ĩnu 私は マイネ(屋号)の

kamanu ja:ĩnu p'ĩtu むこうの 家の人

vvaŋa tʃakussa ifuk'ĩnu fa:

お前の ちゃくしは いくつの(時の)子(か)

nidŋu:ĩnu fa: はたちの子

jamkam, patanu jamkariŋaŋu mpe:iŋ

痛い, 腹の 痛いから たえられない

ma:ĩnuŋu jamukariŋa 非常に 痛いから

umanna paynu u utass'iŋaŋu

そこに ハブが いたが

naumai aŋidataĩ

何もしなかったか

jamunu <ねずみ>, kati fuk': <台風>

katinuŋu fuki'ĩ 風が吹く

kanu p'ĩta: kakadaŋu pe'ĩtai'

あの 人は^(o:) 書かずに 帰ってしまった

aŋa kakadi 私が書く

unu munu takatai:jariba ka:iŋ

この 物 高くて 買えぬ

muna: <物は>, takatai 高い

ki:ĩnu mmta 木の実

pank'ĩnu mmta <桑の実>

akaUki <木の名>, jamas'imi <木の

実の名>, pukakaki: <福木>

aminuŋu fi:ĩ 雨が 降る

tikara fumu <うろこ雲>

ssu fumu <白雲>, fu fumu <黒雲>

ani <姉さん>

suda: Uantu niti:ĩ'ĩ ane: mmantu

兄さんは 親に 似ている 姉さんは母さんに

niti:ĩ

似ている

itsiŋan suda <長男>, ŋ'ĩnan <次男>

tʃakusi <嫡子>, ʃikikjorɔdai <男兄

弟>, ʃikiututara <男兄弟> ,

midum ututara <女兄弟>

itsiŋan ani <長女>

ututun kaŋammo: fi:ĩru

妹に 鏡を くれなさい

ja:te: mmnatu ja:ĩn u'

家族は 皆 家に 居る

kamaŋkai iki'tika: uaissa:

あそこへ 行くと 叱られぞ

annaŋa ʃakaka'ike: si'manu pas'itin

私達が 若い時には シマの はずれに

upuupunu ki:ĩnuŋu uijuta:

大きな 木が 立っていた

uanu tukuman uragi 親の所に居ろう

taruŋu fi:taĩ 誰に くれたか

ua: si'kama kaidu pe'ĩtai'

父は 仕事へ 行った

kaŋun kaki mauke:n pa'ĩtai'

紙に 書いて 前に 張った

ʃiŋajau mi:ti:ŋu pe'ĩtai'

芝居を 見に 行った

ututun kakafi 弟に 書かせる

uki'ina:ŋkai ikaŋi 沖縄へ 行く

nu:maḡkai nu:ri 馬に 乗る
 vva: itaḡkai ikad̥i 君はどこへ行くか
 umakara kamaḡkai ḡuḡuri
 ここから むこうへ 跳べ
 pakuu ki:ʃi k(y)fi 箱は 木で 作る
 urifʃi k(y)faiti これで 作られるか
 fud̥iʃi kaki 筆で 書く
 upummaḡa naraʃine:n assi
 おばあさんが 教えるように しなさい
 aminuḡu tiḡkara ffi:ju
 雨 が 天から 降る
 tud̥z̥inuḡu kiṇu funikara
 妻 が 昨日 舟で
 ka'imataḡkai pe'ita'i
 狩侯へ 立った
 s̥itumutikara junaita:ʃi
 朝から 晩まで
 patarak̥'ita'i
 働く
 jusarabi <夕暮。junaiよりは前>
 saki:ḡa ma'i ʃitu kf
 酒は 米で ^(d) 作る
 upuḡa puḡakaratu a'iki:ta'i
 おじいさんは 浜から 歩いていた
 ḡakats̥aku <魚の名、鯉の餌>
 katʃu: <鯉>
 mk̥'ikara a'i:i:ta'i 道から 歩いていた
 nis̥imura tu:ri pisaraḡkai iḡ'ita'i
 西原 通って 平良へ 行く
 avvana:ri: tukuma kaiku
 油の肉のところ 買って来い
 ki:kara kakipak̥imiru
 今日から 書きはじめる
 funi karaḡu kifi 舟から来た
 nnamaḡami matiz̥riḡamai ku:n
 今まで 待っても 来ぬ

k̥'ik̥isUnu aka'ita:ʃi patarak̥i k̥'ita:
 月 が 上るまで 働いて 来た
 su <野菜>
 jarab̥inu mita:ʃi minakan ʔasiḡbi:ʃi
 子供の 三人 庭に 遊んでいる
 unu jama: kanu jamaḡu:ʃi takakam
 この山は あの山より 高い
 kutuju:ʃi kutussa nufukam
 去年より 今年は 温い
 mbus̥inabitu is̥'iu'iu kariku:
 蒸し鍋と 石臼を 借りて来い
 k̥'ik̥is̥utu pusutu ju:tu id̥iju
 月と 星と 夜 出る
 pussa <星は>, pitukifi <-キシ。
 キシは畑を数える助数詞>
 mmatu ma:ʃitaki ik̥'iu
 母さんと 一緒に 行く
 suḡu periti:ḡu mmaḡa a'ita'i
 すぐ 帰れと 母さんが 言った
 nara:s̥'ita'i おっしゃった
 ikad̥aka: naraṇti:ḡu a:ri:ta'i
 行かねば ならないと 言っていた
 kanu p̥'itunūḡu kak̥'iti a:ri:ta'i
 あの 人が 書くと 言った
 kakati <書こうと>
 kaḡun sumiʃi k̥i: kaki
 紙に 墨で 字 書く
 na:u kaki: kaki 名前を丁寧に書く
 uri: muti これを 持て
 ataḡkai ku:ḡi 明日 来なさい
 anʃinu k̥inte:ṇḡu a'i
 こんな 着物しか ある
 aḡa jumad̥i 私が 読む
 aḡate:n jumad̥i 私がだけ 読む
 kak̥'ita:ʃi munun fi:ḡi
 勝った 者に くれる

muḵi'i k(u)fi 餅を作る
 aḡa kakadi 私が書くのだ
 kuriḡadu ḡauka これがよい
 ututunu mi:taka: suku muḡuri ku:
 弟の いなかったらすぐ 戻って 来い
 anfi jarabamai baḡḡitika:
 それでも 忘れてからは

vvauba: jurusate:nsa:

君をば 許さんぞ

upuḡa iḵi mmetife:
 じいさんは いつ いらっしゃるかしら
 ta:ḡadu ssasita'ḡa ssaiḡ
 誰が 知らせたか 分からない
 kure: naujare: これは 何かしら
 kī: jumammuna: aḡa tafuke:te:ḡ
 字 読めないのは 自分 一人だけかしら
 tafuke: <一人>, aja <字(古語)>

ammai ma: taki fa:ḡi
 私も 一緒に 食べよう・

urimai karimai ḡaukam
 これも あれも よい

ḡitibamai ḡititara:mai
 捨てても 捨てなくても

vvaḡa punta:

君が 勝手

kaḡutḡamai siūmai
 かぼちゃも 冬瓜も

upunimai turiku:

大根も 取って来い

turiku: ira 取って 来いよ
 siḡma <ねぎ>, pi'i <にんにく>
 tamana <きゃべつ>, siḡuna <しま名>
 ḡakeo <にら(明瞭なḡ)>

maḵiki:mai kaḡimaraki:mai(tu)
 松木も ガジマル木も(と)
 ?uiju:
 生えている

taki <竹>, mu:so:ki <ミージョ
 ーキー, 箕>, panaḡi <花>

tu:pana <百合>, ḡasana'i <バナナ>
 mandḡu: <パイヤ>, funi'i <九年母>

kuḡa <クバ(檳榔樹)>, mm <いも
 (甘薯)>, ḡu:k'i <キビ(甘蔗)>

pu:na'i <稲>, aḡamki: <アダン木>

sufiki' <蘇鉄>, kja:ḡi <いぬまき>

ju:naki: <ゆうな(おおはまぼう)>

tintaku <鳳仙花>, saḡifu <浜木綿>

tsunaminu nu:ritu

津波の のぼって

ja:mai naḡasaine:n

家も 流されてない

taro mai kifi:m 太郎も 来ているか

siḡtumutikara jusarabita:ḡi(mai)

朝から 晩まで (も)

junumunu: te:n a'iḡi:ḡ

同じことを ばかり言うよ

naupafi a'iḡibamai kī'kaḡ

いくら 言っても 聞かぬ

kakabam kakaḡara:mai ḡaukam

書いても 書かなくても よい

mi:mai fukumai ne:ḡ

目も 口も ない

pututu:ḡu kī'ta'ina:

一昨日ぞ来たんだろう

ure: ta:ḡa munu jare:

これは 誰が 者 か

a:ja ki:roi 栗は きいろ

inna nusīnu aumunu:ḡu kī'syukī

犬は 主の 言うこと 聞く

fumuna: ssumunuju:ḡ ḡami

黒い物は 白い物 より だめ

pe:pe: ukitaka: muna: mura:in

早く 起きたら 物は もらえる

unu ja:ja upukamna:
 その 家は 大きいね
 fa:ja ntagkaidu pe:taire:
 子供は どこへ 行ったか
 uriju:i kariḡadu dauka'i
 これより あれが よい
 daukam <上等>
 daikam <なまけもの> ([ḡ]は[iʔ]の
 ようにも聞こえる。[u][i]の最小対立か)
 samjimju:i kotonudu dauka'i
 三味線より 琴が 上等
 anfinu kutu ass'imuna:
 そんな こと するのほ
 vvaḡa pukanna mi:ḡ
 お前より 外には居ない
 sata: ak'imaka'isukadu
 砂糖は 甘い
 ma:su: sukaraka'i
 塩は からい
 vvaḡa pukanna janakutu
 お前より外には 悪い事
 asiḡitu: mi:ḡ
 する人は 居ない
 ara: fujuju:i naḡ'inudu dauka'i
 私は 冬より 夏が よい
 vvan asiraimuna: naomai ne:ḡ
 お前に できないものは 何も ない
 fi:muna: <やるものは>
 vva: munu fa:da itagkaidu pe:re:
 君は 物 食べずに どこへ 行くか
 pe:i <行く>, puta <浜>
 mmnaḡu:ja putanta ai
 砂 は 浜に ある
 kairasi <海の石, 20 cm 位のもの>
 isi <石>, upuisi <大石>

imiis'i <小石>, jak'i (珊瑚礁)
 kanu p'iitu kakati:ḡu ai'tai
 あの 人は 書くと 言った
 anfinu tukuma na:u kakuna
 そんな 所 名前を 書くな
 kanu mme: kunu mmiju:i takakam
 あの 嶺は この 嶺より 高い
 kanu jama: takakam あの山は 高い
 kanu jama: ma:nu: takaffane:n
 あの 山は そんなに 高くはない
 ure:ḡum ssaidaka: naunudu ssaidi
 これさえ 分からないのに 何が 分かるか
 jutumte:ḡdu ssaiui
 女さえ 分かるのに
 bikiḡum ssaimuna: ne:n
 男 分からないものはない
 upuUa sakite:ḡdu numii
 じいさんは 酒ばかり 飲んで
 merii <召し上がっている>
 ifukḡdu ariika jumimi:ru
 いくつ あるか 読んでみなさい
 unu i'uu naunu pusa ja:re:
 この 魚は いくら する か
 aḡate:n ikadi 私だけ 行く
 nauribaḡdu ma:nu jaijure:
 どうして こんなに やせたか
 upuḡitumai jarabimai upo:sa ui
 大人も 子供も 沢山 いる
 kanu p'itunubun patarak'i
 あの 人くらい 働く
 p'ita: mi:n
 人は いない
 karinfe: anummai patarakain
 彼くらいは 私 も 働けない
 atunna tafuke:te:ḡdu nuku'i
 後には 一人だけ 残る

nauribaḡu anḡima:nu ju:ka:jare:

どうしてあんなにまで 弱いか

kikisunu akaḡita:fi pari:kaḡiḡi

月の あがる迄 畑を 耕す

anta: funiḡkai nu:ḡbusukam

私達 船に 乗りたい

ara: <私>, anta: <私達>

vvatamai kaḡte:nna:

君らも 買いませんか

umandu aḡina: ここに あるか

itandu are: どこに あるか

puraḡika auna うそ 言うな

upumma: jaḡndu uramaḡi

ばあさんは 家に いらっしゃるか

uḡina: 居るか

nnama kḡisḡi pita: upuḡana:

今度いらっしゃる方はおじいさんですか

nnama taḡiḡibaḡu mani au

今 立てば 間に あう

kanu jarabe: ma:nu

あの 乙女は 大変

aparaḡikam aranna:

美しいんじゃないか

vva ikadi ikate:n 君は行くか行かないか

kari uri これか あれか

ute: <むこう>, kama <あっち>

im ki takuu turi ku:ḡi

海行って 蛸を 取って来る

ike <鳥賊>, saḡa <鰻>

ḡuḡi <2~3斤くらいの小さな鰯>

sa:ra <さわら>

unu sḡikama:narita: uri:ritu ka:ka:

この 仕事は なれないから 疲れる

pukarika:ira: 疲れるね

pukarasḡikata: 嬉しかったなあ

maḡnti:ḡi naḡau utuḡi

本当に 涙を おとしたよ

ma:nu kaḡikaira: いい 格好だね

kaḡikam <上等>

pirumasḡikamira: 珍しいね

kariḡa tumi:ḡi muna: nauḡaira:

彼がさがしている物は どれだろう

aḡibaḡu kumajaki
masaḡamtimi: assḡi

だから 用心して やりなさい

vvata: masaḡamti umui fi:taira

君らは 注意して 思っ くれよ

jarabitu auna 童と けんかするな

nauribaḡu vva niḡkata:re:

どうして 君は 遅かったか

ḡinḡi:ja nnamaḡu mmeḡuta:

先生は 今 いらっしゃったか

nnamaḡu kḡḡtaiḡ 今 来たか

kanuira: upukata:ḡtarassa:

あのね 大きかったでしょう

akapana: <仏桑華>

ki:nu ju:ja pussiḡiḡu pḡikariḡi

今日の夜は 星が出て 光る

kḡisḡiḡusupe:m ku:te:mpe:m

来るやら 来ないやら

kḡisḡiḡusuarag ku:narag me:te:ḡiraig

来るやら 来ないやら あてにならぬ

kḡisḡiḡusuka ku:nka kumusamme:ḡiraig

来るか 来ないか あてにならぬ

kurite:m mutiku: これだけ 持って来い

maiḡḡgame: mutiku:

米 だけは 持って来い

kariḡa kḡḡtika:ssaiḡu ssḡi

彼が 来れば 分かる

ari:tika: anun fi:ru

あったら 私に くれなさい

aminu fi:raḅamai kadinu fukaḅamai

雨の 降っても 風の 吹いても

ara: kanarakī ikadi

私は 必ず 行く

jusarape: piṣikariḅa

夕方は 寒いから

a:raḅkaija idirain

外へは 出られない

aḡa kakadisṣe: vva

私が書くから 君は

kakaḡa:ramai junumunu

書かなくても よい

imkai ikīṣe:ḡ pariḡkai ffaiju

海へ行きながら 畑へ 肥料を

katami iki

かついで 行く

ṣi:riṣiti:ḡdu nara:ṣan

分かっているながら 教えない

anṣi aṣiḅamai vvaḡa puntai

そうしても しなくても 君が 勝手

aṣiḡara:mai しなくても

naubāṣi auriḅamai kīkan

どんなに言っても 聞かぬ

ki:ja ikada ata:ḡkai iki

今日は 行かないで 明日に 行け

asubata ku 遊ばんで 来なさい

unu munā: takatai jari:ritu ka:ig

この 品物は 高いから 買えない

uki mi:ī 起きなさい

nak^ḡṣa p^ḡṣa naḡakam 夏は 日が 長い

nak^ḡṣa ju:a marukam 夏は 夜は 短い

kak^ḡṣitika: kakaidu ṣi 書けば 書ける

takatai jare: kauna 高いなら買うな

takakaiṣnakadu nu:ḅusikai

高い程 登りたい

umaḡkai ku: ここへ 来い

anunna aṣirain 私には できない

an jatika: aṣidi 私なら する

miḡṣi jarabamai numiḅusikam

水 でも 飲みたい

taru jarabamai ku:

誰でも(よいから)来い

anu ku:ti:ḡdu aiṣai 私を来いと仰った

anu:ḅa: ku:ti:ḡdu aiṣai

私をば 来いと 仰った

kadinu fukutika: pana: utiḡdu ṣṣi

風の 吹けば 花は 散る

aiṣtu ṣi ne:n 有るか ないか

aipe:m ne mpe:m ṣṣain

有るか ないか 分からない

aḅiribamai me:ke:tummi:n

呼んでも ふりかえらない

muti:riḅamai ku:n

待っていたが 来ない

ku:ḡdatai 来なかった

naubāṣi umujurabamai ṣirain

どう思っても(後悔しても)出来ない

ma:nu: aran それ程ではない

mi:ṣṣe:ḡ iki 見ながら 行く

mme ja:ykai ikadi もう 家に 帰ろう

mme pi:maka: aṣi:ri ikadi

もう 少し 立ってから 行こう

ure: ta:ḡa munu これは 誰の もの

mme ḡaikī もう 大変